

---

# SOLITUDE

torch

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SOLITUDE

### 【NZコード】

N9665X

### 【作者名】

torch

### 【あらすじ】

あの黄金の別離を経験した衛富士郎が、遙か遠い理想に向かって走りだす！

その時、彼を取り巻く人々の想いが時の歯車となつて廻り出した。幼き頃より憧れ続けた、人の世の理を超えた理想を目指す衛富士郎の生涯を、セイバールートアフターストーリーとしてシリアルスに綴るSFファンタジー作品です。

## 序章「胎動」

君は知つてゐるだらうか？

効率よく人を殺す大量殺戮兵器、そんなものが飛び交う戦場では、個としての英雄など、もはや意味を成さないのだということを。ああ、勿論聰明な君のことだから、殊更私が説明するまでもなかつたな。

だが それでも尚、居たのだよ。理想を信じ、誰かを救えるのだと思ひ上り、そんな戦場を駆け抜けた愚か者が。

おそらく君には理解できまい。否 あまりにも無様で歪なソイツの生きざまに、君ならば怒りすら覚えるかも知れないな。それでも良いと言うのなら 仕方あるまい。語り始めるとじょうが、この済いのない御伽話を……

「SOLITUDE」第零話 - The end of the fifth - 序章「胎動」

一ヶ月前

およそ一万？離れた極東の地において、五度行われた”とある魔術儀式”が終焉を迎えてから、一週間という時間が流れていった。

いや　それを”魔術儀式”と呼ぶには、些か語弊があるかも知れない。何しろ、その名称に”戦争”という言葉を冠する程、熾烈極まる殺し合いなのだから。

”聖杯戦争”と呼ばれるその殺し合いは、七人の魔術師が召喚した英靈　サーヴァントを使役し、最後の一人となるまで殺し合つといつもの。

そしてここに、決められた一つの”約束”が存在する。

たとえそれがどんなシステムであれ、魔術師によって行われる闘争である以上、当然の帰結ながらその全ての内容は、世界中の正当なる魔術師達を統括する、魔術協会へと報告されなければならないという約束が。

此処、倫敦は大英博物館の地下深くに存在する魔術協会本部”時計塔”と呼ばれる施設内の廊下を、一人の男が歩いている。ゴシック建築の様式美を凝らした内装、その長い廊下には、地下に造られた建造物であるにも関わらず、巨大な窓から穏やかな日の光が差し込んでいる。

そんな非常識極まるこの場所を、上体を揺らすこと無くカツカツと甲高い足音を響かせながら歩くこの男もまた、当然のことながら魔術師である。

時計塔上級教授の証である純白のローブを纏い、他者を寄せ付けぬほどの威厳をまき散らしながら歩くこの男の名は、降靈学部長ジル・ベル・ドウ・ラ・ボルト。

フランス貴族である彼の家系はまた、古より続く魔術の名門でもあり、彼自身九代を数えた現当主である。

「ふむ　少しばかり、急がねばならぬな」

上質な仕立てのスーツから取り出した懐中時計を見るや、一言咳いたジルベルは、普段から感情を表さない面長の顔を僅かに顰め、その歩みを早めた。

きつちりとオールバックに整えられた金髪を、軽く両手で整えながら、ジルベルは今から会合する相手の慇懃無礼な態度を思い出し、小さく舌打ちをする。

もつとも、彼の苛立ちは会合相手へと向けられたものではない。それは、彼自身が蔑視する人物を会合相手に選ばねばならないという、今現在彼の置かれた立場に対するものだった。

会合場所として指定していた降霊学部談話室へとジルベルが到着したのは、彼が指定した時刻の一分前だった。

オーク材で造られた重厚な扉を開けると、彼の予想通り、会合相手は既に着席して待ち構えていた。

「失敬、待たせてしまつたようだね ミスター・グレイ」

寸分も頭を下げる事無く、ジルベルが口にした内容だけは自身の非を詫びた言葉が、彼とこの場にいるもう一人の男 儀式学部副部長、エドワード・グレイとの関係を端的に表している。

この時計塔内において数多存在する魔術師の派閥、その中において弱小派閥の一つであるドゥ・ラ・ボルト派のトップとその配下とう関係を。

「いえいえ、お気遣いは無用です、ロード・ドゥ・ラ・ボルト。何かとお忙しい御立場であるのですから、私がお待ちするのは当然の事ですよ」

その名の通りの灰色の目を、どこか作り物めいた笑みで細めながら答えるこの小太りの魔術師を、ジルベールは冷やかな眼差しを持つて眺める。

十年前、ジルベールがまだアーチボルト派の一員だった頃からの付き合いであるこのグレイという魔術師は、彼がアーチボルト派を離反した時に、ただ一人付き従つたのだ。  
もつとも、グレイの決断が決して忠節や崇拜によって成されたものではない事を、ジルベールは良く理解していたし、そもそも魔術師同士の派閥において、そのようなものを求めることが、無意味であるということも理解していた。

少なくとも、あくまで己が目的のために利害関係が一致した者同士、一時的な同床異夢の関係になるのだと、厳格に自己規定し得る程度には。

だがしかし と、ジルベールは密かに忸怩たる想いを噛み締めた。それならばそれで、相手にある程度の有能さを求めるることは罪なのだろうか、と。

ジルベールのグレイに対する能力査定は、一言で”愚妹”と表された。

魔術師として血の浅い家系であるグレイのことを、それを理由に蔑視していたジルベールは、貴族としての礼節を理解し得ぬグレイの一拳手一投足にも、苛立ちを覚えた。

現に今でさえ、派閥の長である自分を迎えるにあたつて、この男は着席したままの姿であることに、怒りにも似た苛立ちが募つて行く。それでもジルベールがこの愚妹なる魔術師を、自身の派閥に置き続ける理由は、偏にエドワード・グレイという魔術師の人並み外れたフォーマルクラフト儀式魔術の才能故であった。

未だ、三代しか数え得ない筈の魔術師が、この時計塔において”灰色の奇才”と呼ばれる程の腕を持つているのだ。

「……院長補佐<sup>ザ・クイーン</sup>殿に、この報告書をお届けしていたのでね。もっと

も、一瞥すらくれずには放置なされたが。まあ、仕方あるまい。今更、失敗し続ける、しかも極東の地で行われる聖杯降靈儀式など、興味を持つ者がこの時計塔に居るはずもないのだからな

あえてグレイに聞こえるようと大きな溜息をつき、ジルベールは手にしていた”報告書”を机に置きながら、グレイの正面へと着席した。

彼が好んで使用するルイ15世スタイルのアームチェアに腰を降ろすと、いつものように足を組み、アームレストに肘をついて両手を組む。

「さて、早速だが本題に入ろうか、ミスター・グレイ。先日、君に連絡したように、彼の地で行われた第五次聖杯戦争が終結し、その報告書が提出された。それが、コレだよ

淡々と事務口調で話し出したジルベールは、目の前に置いた”第五次聖杯戦争報告書”と記されたレポートを、トントンと指示示した。

「君にも同じ物を手渡しておいたのだが　　まずは君の意見を伺おう、ミスター・グレイ」

躊躇みするかのような眼差しを向けながら、ジルベールはグレイの意見を促す。

「……ならば私から述べさせて頂きましょう。まず、最も目を惹かれたのは、この報告書の作成者が監督役を務めるキレイ・コトミネではなく、彼の地の管理者であるリン・トオサカだったという事でしょつか

「ふむ、なるほど」

「勿論、監督役に不測の事態が起こった場合、セカンドオーナー管理者であるトオサ力がその代行として報告書作成を務めること自体は、なんらおかしなことではありません。しかし、この報告書に記載されております”不測の事態”が問題ですな。あらうことか、公平であるはずの監督役が、サーヴァントを一体も使役し、自ら聖杯をその手にしようと画策した挙げ句、殺害されている」

先を促すジルベールに従い、報告書を手の甲でパンと囁きながら、グレイは己ワタクシが見解を開示する。

その一方では微動だにせず聞き続けるジルベールの様子を、常に細めた目で盗み見るしたたかさを併せながら。しかし、期待した反応がいつこうに返つてこないことに焦れたグレイは、そろそろ言葉を重ねていく。

「これは明らかに我々魔術協会に対しても、また彼ら聖堂教会に対しても、背任行為に当たります。この事実を持つて、教会への何らかの交渉事を、有利に進める手札として利用できるのでは？」

額に滲み出した汗を拭いながら、グレイは己ワタクシが見解の評価をジルベールに求めた。

「君の見解は良く理解したよ、ミスター・グレイ。しかし　残念ながら私の見解とは、些かのズレがあるようだね」

姿勢を崩さず、じつとグレイを眺めたまま、ジルベールが自身の見解を語り始める。

「確かに君の言う通り、この監督役の行為は背任に値する。だが、

私は敢えてこれを黙殺し、聖堂教会にはその責を問わぬいつもりだよ」

「そ、それは一体？」

自身の論に怪訝な表情で疑問を投げかけたグレイを、ジルベールは冷たい視線で眺めたまま先を続ける。

「解からないのかね？ ミスター・グレイ。そもそもこの聖杯戦争のルール設定が欺瞞に満ち溢れているのだよ。七人の魔術師が、七騎のサーヴァントを使役し、最後の一組となるまで殺し合う事で、勝者には万能の願望機たる聖杯が授けられる……ならば、このシステムを創り上げた御三家達は、何故自分たちだけで事を成そうとしないのかね？ 外来の魔術師を招き入れ、下手をすれば自分達以外の他所者に聖杯を攫われるリスクを背負つてまで七人、七騎という数字に拘るのは何故だ？ 恐らくはこの儀式、表立つて謳われている目的以外に、もつと奥深いものを孕んでいるのだよ。教会との取引で小さな利を得るよりも、この隠された謎にこそ大きな果実が実っている。私はその為にこそ、この手札を利用するべきだと考える

「な、なるほど……」

細めた目を、更に細くしながら相槌をうつグレイに、ジルベールはこれ見よがしに溜息を付いた。

やはりこの男は愚昧である、と。

そして付け加えるならば、表立つて宣伝された上辺の情報に踊らされ、このような儀式に参加しようとするものも愚かしいが、だからといって、その秘奥に隠されているであろう神祕まで無視している時計塔の連中も等しく愚かだと、ジルベールは心中で断じた。

「もう一つ、この報告書には最大の重要な事項が他にあるのだよ、ミスター・グレイ。驚くべきことに、第四次・第五次と二度に渡つて同じファミリー・ネームを持つ勝者が排出されているのだ。これは刮目に値することだ、ミスター・グレイ。しかも、その勝者のファミリー・ネームは、我々魔術師にとって、決して見過ごしてはならない呪われたものだっ！」

かつて自身が師事した魔術師の仇敵に関する話題へと差し掛かるに連れ、ジルベールは自ずと知らず興奮していた自分に、少なからず驚いていた。

「失敬……柄にも無く、少し興奮していたようだね」

「お気遣いには及びません、ロード・ドウ・ラ・ボルト」

グレイに気遣われてしまつた事に己を恥じながらも、冷徹な仮面をかぶり直したジルベールが再度話し出した。

「”エミヤ”　かつて世界中の魔術師を震え上がらせた悪名高き”魔術師殺し”、キリッグ・エミヤ。第四次聖杯戦争において勝ち残つたこの男と、同じファミリー・ネームのシロウ・エミヤ。今回もまた”エミヤ”が勝ち残つたのは何故だ？私はこの報告書に関するこれら二つの疑問を解き明かし、聖杯戦争の奥に隠された神祕をこの手にするつもりだ。そこで　この報告書の内容をヴァチカンへと漏洩させる。敢えて、聖堂教会側の責を問わずにだ。さすれば、奴等がその調査に動き出す。我々は外側からその一部始終を観察すればよい。”エミヤ”的相手は教会にして頂こうではないか」

第五次の勝者であるシロウ・エミヤが、あの”魔術師殺し”的業を受け継いだ存在である可能性は否定できない。

そんな相手に直接対峙するなど、愚の骨頂でしかない。ならば使えるものを使うまでのことだと、ジルベルはほくそ笑む。

「確かにロードの仰る通りです……私はロードより年配故、あの”魔術師殺し”の噂には震え上がったものでござります。しかし、ならばもう一手、妙案がございます」

「ほう　聞こへ

意外にも更なる案を進言するグレイに、僅かな驚きを覚えながらジルベルは先を促した。

「第五次の勝者、シロウ・エミヤがあの”魔術師殺し”縁のものであるとすれば、なのですが……”エミヤ”に恨みを抱く他の魔術師達にも、この報告書の内容を流してみては如何でしょうか？」

引き攣つた笑みに表情を歪めるグレイが告げた内容を、ジルベルは慎重に思案する。

この報告書を不特定多数の魔術師にばら撒く事は、ジルベル自身の目的から考えても下策に過ぎる。だが

「アインツベルン　奴等ならばあるいは……」

同じ魔術師でありながらも、協会との関係を絶っているアインツベルンならば、情報漏洩が協会に露見することはあるまい。そして、奴等こそが御三家の一なのだ。ならば、その動きを追えれば、聖杯戦争の秘奥を垣間見ることが可能かもしれない。

何より　アインツベルンならば”エミヤ”への恨みはさぞ深かるつ。グレイ、君にしては中々の案だよ、とジルベルは心中で愚昧な魔術師に初の賛辞を与えた。

「では、早速手筈を整えましょつか？」

そう言つて立ち上がろうとしたグレイを、ジルベルが手振で押しどめる。

「いや　待ち給え、ミスター・グレイ。此度の為に用意した最良の駒があるのでね。今回は彼女に任せるとしよう」

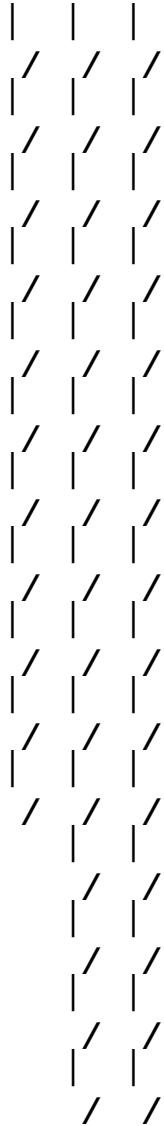
「御意にござります、ロード・ドウ・ラ・ボルト」

会合の終了と共に、二人の魔術師が姿を消したこの談話室は今、静寂に包まれている。

その静寂の空間に、扉を開いた気配すら伴わず、突如現れた人物が一人存在した。

その不可思議な人物から、不意に歌声のように滑らかな詠唱が一節紡がれる。

数瞬の後、その人物の姿は微笑と共に忽然と消えていた……



日本の地方都市である冬木市は深山町の高台に、この地の管理者セカンドオーナー

である魔術師 遠坂の洋館が存在する。

この国で一番目の規模を誇る靈脈を有するこの土地を管理する、そんな大役を協会より任された遠坂の魔術師とは、第五次聖杯戦争にアーチャークラスのサー・ヴァントを使役するマスターとして参戦した、六代目遠坂家当主、遠坂凜だった。

「イリヤ、あんたねえ……ちゃんと約束の時間通りに来なさいよ。あんた自身の躰の事なんだから……」

この日、遠坂邸のリビングには一人の少女が居た。

一人はこの屋敷の主である遠坂凜、そしてもう一人の少女は、雪のような銀髪に、赤い瞳という人間離れした容姿のイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

もつとも、ある意味において”人間離れした”という表現は、当たりはずとも遠からずと言える。

なぜならばこの少女は、第五次聖杯戦争における聖杯の器として、また同時にバーサーカークラスのサー・ヴァントを使役するマスターとして、御三家の一角であるアインツベルンが送り出した、ホムンクルスなのだから。

「解っているわ、リン。でも、朝の九時に来いだなんて……自分がどれほど朝に弱いかつてこと、きちんと自覚したほうがいいわね」

ホムンクルスであるイリヤスフィールの延命治療のために、聖杯戦争終結後から開始されたこの施術は、毎週日曜日の午後に遠坂邸で行われる。

ただこの日に限っては、凜が午後からどうしても外せないアポイントがあるため、午前中に行うこととなっていた。

前もつて打ち合わせていた施術開始時刻は、午前九時 リビングに添え付けられたアンティーク調の大きな柱時計は、午前十時を過ぎていている。

これだけを見れば、誰がどう言おうと凛の言い分が正しいのだが……つい先程、イリヤスフィールが遠坂邸を訪れた時、凛はパジャマ姿のまま出迎えたのだった。

「はあ……つまらない事言つてないで、ちやつちやと終わらせるわよ。わたし、今日は忙しいんだから」

このままではいつものように不毛な言い合いでいると感じた凛は、頭の中で本日のスケジュールを確認すると、溜息を零しながら施術の準備に取り掛かった。

「ああ、例のアレのせいでしょう？」

ソファーに横になりながら、凛を憂鬱にさせている理由を、イリヤスフィールが指摘する。

「ええ、そうよ 繕礼の後釜として赴任された神父をまにて、ご挨拶しないといけないんだけどね……」

手馴れた感のある素早さで、凛はイリヤスフィールの問いかけに答えながらも、施術用の魔具と宝石を揃えていく。

「あり？ リンはコトニネが嫌いだったんじゃないの？ だったら、新しい神父になつて良かつたじやない」

施術の準備が整つた事を視線で確認しながら、イリヤスフィールは凛のやたらと後ろ向きな態度に疑問をぶつけた。

「良かつたって言えるかどうかは、正直微妙なところね。新しく赴任した神父さま　”第八” 所属だそうだから……」

ああなるほど、といリヤスフィールは理解した。

つまるところ、前任者と同じ穴のムジナということではないかと。いや、考えようによつては、コトミネ以上に面倒なことにもなりかねないのではないかと、イリヤスフィールは懸念した。

だが、それはこの冬木のセカンドオーナー管理者である凛の悩み事であつて、自分には関係がないと冷静に割り切ることもまた、イリヤスフィールの本質だった。

およそ一時間ほどの施術が完了した後、凛はテーブルに置かれたティーカップを口元へと運びながら、衣服を整えるイリヤスフィールへと声をかけた。

「ねえ、イリヤ。最近、士郎の様子はどう?」

タイを結び終えたイリヤスフィールは、ソファーへと座りながら上品にアッサムティを一口味わう。

いつも凛が淹れる味よりも少しだけ渋いと感じながら、それを表情には出さない。

「どうつて、聖杯戦争はもう終わっちゃったんだもの、だからシロウはいつも通りのシロウよ。そんなの、リンだつて知つてるくせに言つてゐるのかと言わんばかりに、イリヤスフィールの紅い瞳が凛

だいたい三日に一度は衛宮邸で夕食を共にする人間が、今更何を

を見据えた。

「うん……まあ、そななんだけどね……」

その視線から逃れるように俯く凛の様子に、イリヤスフィールはこれ見よがしな溜息で応える。

あの聖杯戦争が終わってからといつもの、凛の士郎に対する煮え切らない態度は、イリヤスフィールにとって歯痒い事この上ないものだった。

現に、今の質問にしたところで、凛が本当に聞きたかったことなど、イリヤスフィールにはお見通しだったのだ。

それを、敢えてはぐらかしてみたのだが 結果、コレである。

「あのね、リン。貴女が何を気に病んでいるのかなんて知らないし、知ろうとも思わないわ。でも、私の前でそんな煮え切らない態度は止めて。相談があるなら、ちゃんと言つべきよ。そうでないなら、最初から言わないで」

いい加減我慢の限界が來ていたこともあり、イリヤスフィールはここ最近凛に対して溜まっていた鬱憤を、真正面からぶちました。どう足搔いたところで、この先長くは生きられない自分には、決して座ることの出来ない席に、凛は座ることが出来る可能性があるのだ。

それどころか、”今この世界にいる”という限定条件さえ付け加えれば、その筆頭候補者であるかもしれない。

そう思うと、イリヤスフィールの凛に対する物言いが、些かきつくなってしまった。

「わたし、後悔してるのかもしれない。あの時、最終決戦の場について行けなかつた事を……」

イリヤスフィールの厳しい言葉に、一瞬ハツとした表情を浮かべた凜は、ようやく心に溜め込んだ纏を訥々と吐き出し始めた。

「あの怪我じやどうじよつもなかつたつて事は、わたし自身も理解はしてるの。だつてわたし、自分に出来ることしかしないから。でも、戦い終えて帰ってきた士郎の顔を見た時 正直、震えが止まらなかつたわ」

今まで、当時を思い返しながら話していくのだろう凜の細い肩が、小さくブルッと震える。

「アレは、何かを成し遂げたり、勝ち得たりしたヤツの顔なんかじゃない。そう アレはまるで、全てを失くしてしまつたヤツの顔だつたわ……」

両手を膝の上で握り締めながら、まるで神に自身の罪科を告白するかの如く話す凜を、イリヤスフィールはじつと見つめる。

「アーチャーが消えた時、わたしの傍には士郎とセイバーがいたわ。それでも、涙を堪え切れないほど辛かった。ましてや、士郎とセイバーは愛し合つていたのよ。なのに……どうしてよ！ どうして士郎は、笑顔でなんて、帰つて来れるのよ……」

俯いた凜の顔から、握りこんだ手の甲へポタリと零がこぼれた。それを見たイリヤスフィールは、再度大きな溜息をつき、独りむくれるしかなかつた。

これでは同じ告白でも、その相手は神様などではなく、惚れた男へのものではないか、と。

ただ 今の凜の言葉からイリヤスフィールは、”アーチャーの秘

密”に凜が気付いていないのだと予想をつけた。

「それで？ リンはそこまで解つていて、このままシロウを独りにしておくの？ セイバーには勝てないって、最初から諦める？」

呆れ顔のまま小さな肩を竦め、イリヤスフィールは凜を問い詰める。

ただし、凜の嫉妬心と負けん気の強さを、少しばかりくすぐるような絶妙のスペースを加えて。

「なつ？！ 誰が諦めるなんて言つたのよつー！ つて、ちょっと待ちなさいよ！ それだとわたしが土郎を好きだって事になるでしょうがつー！」

まさにイリヤスフィールの予想通りと言つべきか、凜は顔を真赤にしながら、があ っと怒鳴りだした。

これで少しは前向きになれば良いのだけれど、クスリと笑いながらイリヤスフィールが立ち上がった。

「ハイハイ、なんだか馬鹿らしくて私疲れちゃったわ。それじゃあ、リン。今日はこれでお暇するわね」

「え？ あ、そう？ それじゃあ、氣をつけて帰りなさいよ」

思い切り肩透かしを食らわされた凜は、照れ隠しにブイと顔を背けながらイリヤスフィールを見送る。

そのまま玄関まで見送りに来た凜に、まさにドアが閉まる寸前、イリヤスフィールは、

「どうせなら、つきあつちや えば？」

可愛らじい爆弾を残していった。

暦が弥生から卯月へと変わったその日、午前中にイリヤスフィールへの施術を終えた凛は、昼食後ひとりで冬木教会へと来ていた。彼女がこの教会へと足を運んだのは、聖杯戦争中に訪れて以来の事となる。

礼拝堂最前列の席に腰掛けたまま、凛は一週間前に新しく赴任した神父を待っていた。

とは言つものの、赴任したその日に神父のほうから求めてきた会合の申し出を、あれやこれやと先延ばしにしてきたのは他でもない、彼女の方なのだ。

今此処で、数分待たされようとも文句を言える立場にはなかつた。

「これは ワタシとしたことが、美しい女性をお待たせしてしまいました。なんとお詫びをすればよいのでしょうか」

キィとこう扉の軋む音と共に、190?を超えるかと言つ程の長身が礼拝堂へと現れるやいなや、流暢な日本語で凛へと話しかけてきた。

やや色素の薄い茶髪を腰の辺りまで伸ばしたその男は、前任者である言峰綺礼と同じ黒のカソックを身に纏い、胸には大きな十字架を付けていた。

「いいえ、わたしの方こそ、会合を先延ばしにしてしまいました事、どうかお許下さい」

十代後半の日本人女性としては、決して背が低いほうではない凛

ではあるが、如何せん相手が相手だけに、その威圧感はビリビリする。相手が近づくに連れ、ほとんど見上げるような姿勢になってしまつ。もない。

「いえいえいえいえ、貴女はこの地のセカンドオーナー管理者なのですから、実務を優先されて当然のことです。どうか、お気遣いなさらないでくださいネ」

だといつのに　この長身の神父は、徹底的に腰が低いのだ。二コ一コと優しげな笑顔を絶やさず、どこか気さくな物言いは、初見であつても親近感を与える程だ。

年齢的には三十前後だろうか？　と、凛は推測するも、このやたら陽気な笑顔と、地中海近辺の西洋人に多く見られる彫りの深い端整な顔立ちから、正確なことはわからない。

「では　改めて自己紹介を。」の冬木のセカンドオーナー管理者、遠坂凛です、「

見上げるような格好の凛の自己紹介を聞いた神父は、更に笑顔を深め、眼鏡の奥の元より細い目をより一層細めていった。

「ハイ、『丁寧に有難う』がこます。ミス・トオサカ、と呼ばせていただいても？」

「はい、結構ですわ。神父さま」

社交辞令的な笑顔で応えた凛に、ウンウンと頷く神父。

「ワタシは、聖堂教会第八秘蹟会所属のサルヴァトーレ・ジュリアーニです。前任者に代わり、この冬木教会を任せられました。今後共よろしくしてくださいネ、ミス・トオサカ」

だがその気をくな口調に反して、剣呑な所属組織が告げられた。やはり”第八”か、と。営業用スマイルを崩さないまま、凜は臍を噛む。

この一見陽気な神父、なかなかその本性をみせようとはしない。さて、どうしたものかと凜が思案した時

「お互い挨拶も交わしました。このまま女性に立ち話を続けさせるのは、ワタシの信条に反します。ということでお話しは、執務室で」

それまで張り付いたように剥がれなかつたジュリアーニ神父の笑顔が、ほんの一瞬だが確かに消えた。

その瞬間、縁無しの細い眼鏡の奥に、深海のような深いブルーの瞳が光つたことを凜は見逃さなかつた。

ジュリアーニ神父に案内される形で付き従い、執務室へと通された凜は、席に着くやいなや先手を取つた。

「ジュリアーニ神父もまは、前任者と同じ第八秘蹟会に属しておりますね？」

つまりとこひ、お前の立ち位置はどうなのだ？ といつ凜のジャブだ。

「はい、先程も申し上げました通り、ワタシは第八秘蹟会に所属しておりますが」

そこまで言つて、ジュリアーニ神父は笑顔のまま少し困ったような顔をしてみせる。

「ワタシは前任者と違つて、情報活動専門なのです。どうも荒事にはむいていないよ」

頭を搔きながら、面倒ありませんと言ひ、ジュリアーニ神父に、凛は小さく舌打ちする。

それは、敵か味方か明かさずに、ただ前任者と同じとは思つた、といふ意思表示。

凛のジャブを綺麗に躱された格好である。

「せうそ、ミス・トオサカにお聞きしたいことが一つあるのです。よろしいでしょうか？」

不意に笑顔のままジュリアーニ神父が切り出した。

「ええ、結構ですわ」

「キレイ・コトハネを殺したのは、シロウ・ヒハヤで間違いありませんね？」

突如消えた笑顔、ジュリアーニ神父の眼鏡の奥で、再度深いブルーが光っていた。

「そ……」

「」の神父は何を何処まで知つてているのか？

あの笑顔が偽物だということは、重々承知していたはずなのに。これはわたしのミスだと、口の端を噛み締めながらも、凛は頭の中

で最適な回答を模索し続ける。

「ああ、『めんなさい』、ミス・トオサカ。ワタシ、決してその事を責めているわけではないのです。キレイ・コトミネが重大な背任行為を犯した事は、既にヴァチカンも知っています。ワタシはキレイ・コトミネの件に関して、シロウ・エミヤにその責を追求するつもりはありません」

凛が返答に窮した隙に、ワタワタと慌てた素振りを見せながら、ジュリアーニ神父が誤解なきようになると弁明を始めた。  
そのわずかの時間が、凛を冷静にし、神父に崩されかけた体勢をたてなおさせた。

「そうですか　それは話が早くて助かりますわ。ですが、ヴァチカンにもたらされたその情報、一体何処から入手されたのか　少し興味があります」

微笑みすら浮かべながら、凛はセカンドオーナー管理者としての威儀をもつて、逆にジュリアーニ神父を詰問する。だが

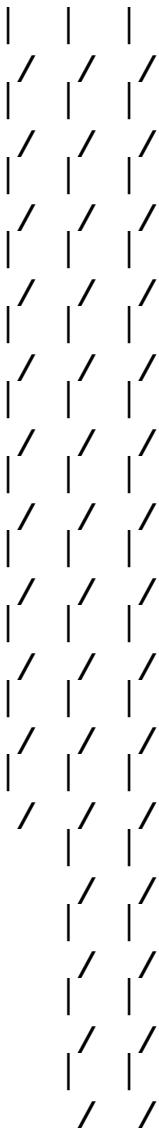
「おや？　ミス・トオサカは『存じなかつたのでしょうか？　この情報は魔術協会よりもたらされたものなのですが？』

逆にどごめのクロスカウンターを叩きこまれてしまった。

会合が終わり、教会から立ち去つていく凛の後ろ姿を、執務室の窓から眺めるジュリアーニ神父が、その細い眼鏡を外しながら呟く。

「ええ、ミス・トオサカ。御約束した通り、キレイ・マリーナ殺害の件に関しては、シロウ・エミヤを咎めることはいたしません。もつとも……あくまで、”キレイ・マリーナの件に関しては”、ですがネ」

未だ肌寒い風の吹く教会の丘を、窓越しに深いブルーが見つめていた。



そして現在

『問おつ 貴方が、私のマスターか』

ただ綺麗だと思った。一瞬でその存在に心まで奪われてしまった。そして この光景ならば、たとえ地獄へ落ちても忘れはしないだろうと、そう思った。

そんな出会いがあったのだと、深く深く心に刻んだ少年は、未だ覚醒前の無意識な状態で尚、涙していた。

「…………んぱい、…………先輩、朝ですよ。そろそろ起きて下さこね

早朝の衛宮邸、その土蔵の中で眠りながら涙を流す少年を、優しく起こす声がある。

およそ一年の間、この衛宮邸では日常の朝の光景として、当たり前のようにあったものであり、そしてつい最近、失われかけた光景でもあった。

だからこそ、少年を起しきりとする少女は、その涙に気が付いたのではない。

なぜなら、おそらく少年が流すこの涙は、失われていた日常が原因なのだろうから。

「ん……桜……」

そして、その優しげな声で少年が起きることもまた、日常の中の一つの光景だった。

「はい、おはようございます、先輩」

土蔵で寝ていた少年を、優しい声で起こした少女 間桐桜が、いつものように嬉げな笑顔を見せながら朝の挨拶を口にする。

「ああ、おはよう、桜。それと、ごめんな。どうやら寝過しちまつたみたいだ」

桜に挨拶を返しながらも済まなさに反省するこの少年 衛宮士郎こそが、およそ一ヶ月前に終結した第五次聖杯戦争において、セイバーと契約し、最後まで勝ち残ったマスターだった。

身支度を済ませ、制服に着替えた士郎が居間へと顔を出すと、そこには彼が守りたかった そして、きっと守れたのであるつ日常の光景があった。

十年前、土郎が養父である衛宮切嗣に連れられ、この家へとやつてきた時から、まるで姉のように土郎のことを気にかけてくれた藤村大河が、遅いぞとむくれていた。

ふとしたきつかけから、この家へと通うことになり、それ以来ずっとこの家の家事を手伝ってくれている可愛い後輩の桜は、すでに出来上がった朝食をテーブルに並べている。

そして、あの戦いを乗り越えて守れたのだと彼自身が胸をはれる証、誕生日イリヤスフィール・フォン・アインツベルンが、その小さな体で元気いっぱい抱きついてくる。

「おはよう、イリヤ、藤ねえ」

大河を諫め、桜に朝食の礼を言い、イリヤスフィールを奢めてから、士郎は朝食の席についた。

それは、いつの間にか決まってしまった席順であり、穏やかな日常へと戻った今でも、ポツカリと空いた士郎の隣の座席には、決して誰も座ろうとはしない。

それでも賑やかに、衛宮邸の朝食は進んでいく。

慌ただしくも賑やかな朝食を終えると、大河と桜は部活の朝練のため一足早く登校していった。

イリヤスフィールも居候先である藤村邸へと戻つていった。

最後に残つた士郎は、玄関の戸締りをし、ふと住み慣れた衛宮の家を眺めた。

「いよいよ今日から新学年だ。それじゃあ、行つてくる」

まるで彼を見送る誰かに話しかけるように呟き、踵を返して歩き

出す。

いつものように通学路を歩きながら、士郎はある聖杯戦争が終わつてから今日までのことを思い返した。

十年前に”衛宮”という姓をもらつてから、ただがむしゃらに走り続けた彼には珍しく、毎日を穏やかに過ごしたこの一月半を。事実、士郎はこの一月半の間、あれ程休まずに続けていた魔術鍛錬をほとんどしていなかつた。

あまりにも多くのことが短期間に起こつたため、田常へと帰還した彼は、その整理に専心していたのかも知れない。

その結果、居なくなつてしまつた”彼女”の事に、後悔も未練も無いのだと、自分自身に結論を出すことは出来た。

だからこれは、自分にとつてのモラトリアムだつたのだと、士郎は思う。

幼い頃から憧れ続けた理想　　それに向かつて走り出す前の、大切な準備期間なのだと。

手に届くのかすらもわからないほど、遙か遠くではあるけれど、目指すべきものは”彼女が”その身を賭して示してくれた。

未だ、そこへと至る道は見えないけれど、それでも　もとより空っぽの自分には、ただ走り続けるしか無いのだから。

もしも、夜空に一点の星すら無かつたとしたら、人はそれを目指すことすら無かつただろう。

元より認識し得ないものを、目指せる道理などないのだから。

だが、星の輝きをその目にすることで、遙か遠きその場所を目指し続けた結果、人はそこに至るという結果を手にしたのだ。

ならば　と、拳を握りしめ、未来を見据えるようにあげた士郎の視線のその先に、以前憧れの存在だつた少女の姿があつた。

「おはよー、衛宮くん」

「ああ、おはよう、遠坂」

通学路の交差点、遠坂凜と合流した土郎は、連れ立つて穂群原学園へと続く坂道を歩いて行く。

新学年、新学期、新たな始まりへの決意を胸にしながら。

「ふうん、アイツが衛宮士郎かいな。なんか、あんまりパツとせん奴やなあ」

その後ろ姿を遠巻きにうかがう人物が、ニヤリと顔を歪めながら呟いた声は、坂道を駆け落ちる卯月の風に掻き消されてしまった。

## 序章「胎動」（後書き）

第零話 - The end of the fifth - は、当作品のプロローグに該当します。

というわけで、次回話より本格的に本編スタートとなります。本格的に三人称で作品を書くのはこれが初めてなので、拙い部分が多いかと思いますが、これからもお付き合い下されば幸いです。

追記) 2011/10/28 : 誤字訂正

## 一章「哀悼の城」

さて、ここまで話で、君なりば既に気がついているのだらう？この愚か者の物語が、君の居るこの世界ではなく、どこか別の並行世界での出来事なのだと、うることを。

まあ、そういうことなのだから、なにもこの世界の君が、そうして青筋を立てるほど不機嫌になる必要などなかろう？ちなみに一つ忠告しておくと、今からそんな調子では、君の血管が最後まで持たないぞ。

ああ、私を睨むのは止めてくれないか。話せと命じたのは君なのだからな。

もつとも、私はここで止めてしまつても、こいつは構わないのだが……フウ、了解だ。では、続けるとしよう。

「SOLITUDE」「第一話・エヌカーネーション - 一章「哀悼の城」

私立穂群原学園へと続く長い坂道は、新学年を迎える季節にふわしく、今年も見事な桜並木の景観を、通学する生徒たちへと提供している。

学園に通いなれた上級生ならまだしも、新入生にとって少々きついこの坂道は、季節とともに学生たちを楽しませ、また困らせもある穂群原の名物だった。

そんな、学園へと通う生徒ならば誰もが通るであろうこの坂道を、士郎は今、遠坂凜とともに歩いていた。やつ、歩いているのだが……

「……なあ、遠坂」

「どうしたのかしら？ 衛宮くん」

通学路途中の交差点で凜と出会ってから、言ひべきか言わざるべきか散々悩みぬいた士郎は、周りからの視線とあえて聞こえるようになじかれるひそひそ話といつ世上にも恐ろしい圧力に屈し、とうとう“ソレ”を切り出した。

「お前、気にならないのか？」

と言いながら、士郎は自分の右腕に添えられた凜の左手へと視線を送る。

ベッタリと絡ますよくなことはなく、あくまでそっと添えるようにして士郎の腕を取る凜の左手は、朝の挨拶を交わした直後からそこにある。

つまり 士郎は新学期早々、学園のアイドルと謳われる遠坂凜と腕を組み、朝の通学路を歩き続いているわけだ。

「気にならないのかって……フフン、衛宮くんは一体何が気になるのかしりあ？」

何とか切り出した士郎の問いかけに、凜はきょとんとした表情を見せたかと思うと一転、満面の笑みで問い合わせた。それはもう、に

ついで……

そこでようやく士郎は理解したのだ。ああ、『マイツわざとやつてやがるな、と。

そして、すぐさまここ最近の彼女に対する己の所業を振り返る。  
もじここで下手を打てば、この後自分にどんな不幸が降りかかるか、  
解かつたものではないのだ。

だというのに、全力で振り返った脳内の”俺、やつちまつたかも  
？”リストには、見事なまでに何一つ浮かび上がつてこない。  
そもそも、ついこの間までは三日と空けずに衛宮邸で夕食を共にし  
ていた彼女が、この一週間程、まったく顔を出していなかつたのだ。  
いくら士郎が周囲から朴念仁だ鈍感だと言われようが、これでは粗  
相をする機会すら無かつたのだから、何も出ないのは当然と言えば  
当然だ。

「すまん、遠坂。どうしても思い出せないんだが、俺、何かお前  
を怒りせるよつなこと、しちまつたのか？」

高まり続ける周囲からの圧力と、いつに間に思いつかない自分が  
しでかしたかもしれない粗相。

かと言つてこのままの状態が続くのは恥ずかしいし、何より相手  
が相手なのだ。穂群原学園男子生徒の殆どを、こんな事で敵に回し  
たくはない。

そういうアレやコレやを考慮した結果、士郎は正直に白旗を掲げ  
ることにした。

「あのねえ……何をどうにづ風に考えれば、そこでそんな言葉が出  
てくるってのよ、まつたく……」

それって、頑張つて勇気を出した女の子に対しては、結構失礼よ  
つ！と思しながら、士郎を軽く睨んだ凜は、ヤレヤレと溜め息を

つきながら、ほんの少しだけ本心を零した。

「まあ、これは宣戦布告みたいなものだから。士郎は、気にしなくていいのよ」

歳相応の輝くような微笑で告げられた凛の言葉に、一瞬ドキッとしながらも、士郎は更に混迷を深めて行く。

「何だかよく解んないけど……まあ、遠坂が気にしないって呟つてなう、いいけどさ。あ、でも学園に着くまでだからなつー。」

そう言つて士郎は、耳まで真赤にしながら、殊更無愛想な態度をとつた。

そんな士郎の様子を、ちらりと横田で見ながら、凛は心中でガツツポーズを決めていた。

この一週間考えぬいた挙句、自分自身に出した答え。それは決心してしまえば、案外単純なものだった。

もしも　士郎が全てを失くしてしまったのなら、今度はわたしが士郎の全てになつてやろう。

わたしは、失くしたものと一緒に探してやるほど甘くはないし、失くしてしまった”彼女”の代わりになれるほど器用でもない。

まあ、きっと士郎のことだから、この先一生”彼女”の事を忘れることはないだろう。

だけど、それならそれで　　”彼女”的ことを忘れない士郎のなかで、わたしが一番になればいいだけだ。

だからこれは、”彼女”に対するわたしからの宣戦布告。

きっかけはほんの少し、生意気な小あくまに背中を押してもらつたのだけれど、それはまあ良しとしよう。

さあ、覚悟してなさいよ士郎、絶対わたしのこと大好きにしてみせるからと、決意を新たに、凛は士郎の腕をぎゅっと抱きしめた。

一種異様な雰囲気の中で執り行われた始業式が終わり、士郎は疲れた足を引き摺りながら、今年も同じクラスとなつた柳洞一成とともに教室へと向かつてゐた。

「はあ……」

溜息のカウント数をまた一つあげた士郎に、隣からやや低いがよく通るバリトンのような聲音で、一成が気遣いの言葉をかけてきた。

「どうしたのだ、衛富？ 先程から溜息ばかりつきおつて。何か心配事の類ならば、相談にのるが？」

ああ、衆目を気にしないでいられる人種がここにもいたのかと、士郎は更にカウント数を上げそうになつた。

もつとも、始業式の最初から最後まで、殺意とか嫉妬心とか好奇心とかを良い感じにブレンンドした、視覚化するほどの視線にさらされ続ければ、士郎でなくとも溜息をつきたくなるといつものだ。さらに付け加えれば、新しい教室へと向かつて歩くこの廊下でさえも、そこかしこから、”あの人が……”とか、”遠坂さんが……”とか、”腕を組んで……”とか言つた、もはやひそひそ話の領域を、遙かに凌駕した音量のささやき声が、ガシガシと聞こえてくるのだからたまつたものではない。

まあ、それもこれも、凜の手を振りほどけなかつた自分の自業自得だなど、士郎は諦観にも似た心境で一成に答える。

「いや、一成に相談するほどのことじゃない……といふか、一成にだけは相談しちゃいけないといつうか……すまん、とにかく気にしな

いでくれると助かる

無理やり作った笑顔でそう答えた士郎の目は、哀愁を漂わせながらどこか遠くを見つめていた。

「まつたく……衛宮にしろ、他の者達にしろ、いつたい今日はどうなつておるのだ。朝から校内がざわついたままではないか」

要領を得ない士郎の返答に、一成は愚痴を零しながら、辺り着いた3年A組のドアをガラリと開けた。

歩調の遅い士郎に合わせていたためか、既に教室には新たにクラスメイトとなつた生徒が殆ど揃つている。

そして、当然のことではあるが、一成に続いて士郎がその教室へと足を踏み入れた途端に、全員の視線が彼に向けられたことは言つまでもない。

「ふむ……衛宮、あの席はまだ空いているぞ」

やはりといづべきか、クラス中のそんな視線を一切気にしない一成が、ずいと指示した方向 教室の窓際から一列目の最後尾には確かに、前後に二一つ席が空いていた。

「そ、そうだな……空いてはいるよな……」

ゴクリと喉を鳴らした士郎が、上の空で一成に返答しながらも見つめるその空席の隣には、何かの書籍に視線を落しながら、もの静かに座る凛の姿があつた。

す、座るのか？ この雰囲気の中での席に俺は、内心そう自分に問いかける士郎を他所に、一成はずんずんと歩みを進め、空いていた席を二つ、確保してしまつた。

「どうした？ 衛宮。 いつまでもそんなところにいたっていいないで、早く席につかぬか。 もうすぐホームルームの時間だぞ」

一成のよく通る大きな声が教室に響き渡つた途端、辺りはまるで水を打つたかのように静まり返る。

まるで、士郎の一拳手一投足を、余さずその目に焼き付けようとするような緊張感を孕んだ空氣の中、もはや逃げ場はないと士郎は全てを諦めた。

「あら？ 遅かったのね？ 衛宮くん。 今年は同じクラスになれて、席もお隣なのですから、よろしくして下さいね」

ぜんまい仕掛けのブリキ玩具のようなぎこちなさで着席した士郎に、パタンと本を閉じた凛がにっこりと微笑ながら声を掛けってきた。なるほど、窓際から一列目の最後尾、しかも隣は学園のアイドルなどという男子生徒にとつては理想郷のようなこの席が、最後まで空いていたのは「イツの所業かと、士郎は呆れ顔で凛を見つめた。

「朝っぱらから堂々と腕組んで登校しておいて、何が”よろしくして下さいね”だ。あ、あ……これじゃあ、あんたとの例の賭け。どうやら、あたしの負けかしらねえ？」

士郎が何かを答えるよりも先に、凛の前の席に陣取つた人物から横槍が入つた。もつとも、その顔には”ニシシ”という擬音が透けて見える様な笑みを浮かべているのだが。

「美綴さん……ホームルーム前の教室で、そんな”噂話”の詮索は、どうかと思ひますわ」

あくまで優等生の姿勢を貫いたまま、凛は自身の悪友 美綴綾

子へと、取り澄まして答える。

「尊話しと来たか。あんたと衛宮が仲良もそつに腕組んで歩いてた姿を田撃した生徒は、十人や一十人じゃきかないんだけどねえ。それにさあ あんた達二人がどういう関係なのかつてことは、まんざらあたしにとつても無関係じゃないのさ。なんたつて、”今年の弓道部部長”のモチベーションが、大いに左右されるんだからね」

「ああ、なるほど、そういうことね……」「

所々に興味心が見え隠れする綾子の言葉に、しかし凛は素直に納得する。

綾子の言つ通り、もし自分と士郎が付き合つことにでもなれば、確かに”今年の弓道部部長”のモチベーションはガタ落ちだろうなど。そう納得した反面、意外とも凄い反撃を食らう可能性も捨て切れはしないなと思い至り、凛はクスリと小さく微笑んだ。

あの聖杯戦争の最中、凛が知らなかつた桜の強い一面を垣間見た今だからこそ、そう思えるのだろうが。

「あ、あのは……お前ら、ちょっと待とつか」

自分の身の安全に大きく関わるような、それでいて何やら良くなわかぬが、それでも決して放置してはいけないと自身の直感が囁く、この一人の不穏な会話を止めよつと、士郎が待つたを掛けたその時

「衛宮……」

まるで地獄の底から響くよくな重低音の声が、またもや横槍を入れ

れた。それはもはやバリトンなどではなく、巨大な銅鑼の連打を彷彿させるかの如く。

「ど、どうした？　一成……」

ギリギリと何かが鋲び付いたような音を発しながら、恐る恐る一成へと振り向いた士郎は、瞬時にガシッと襟首を掴まれた。

「今の話は本当なのか、衛宮つ？！　貴様がこの女狐と仲睦まじく登校し、あまつさえ腕を組んでいたなどといふ戯言はつ……ええい、何故だつ？！　何が貴様を乱心させたああつ……！」

端整な顔立ちを鬼のように歪ませながら、一成は士郎の体をガックンガックンと搖さぶり詰問し続ける。

「遠坂、アレ、止めなくていいのかい？　あんたの彼氏、死んじゃうぞ？」

よくあるテレビ番組のコントでも眺めるかのように、綾子がサラリと問いかける。

「綾子、あんたねえ……何氣ない言葉に、一々罷仕掛けるんじゃないわよ。けど、お生憎様、”まだ”彼氏じゃないわ。それに」

「それに？」

「大丈夫よ、士郎は強いから」

綾子だけに聞こえるほどの声で凛が口にしたその言葉に、驚きの表情で見つめ返した綾子は、再びその顔に笑みを浮かべ呟いた。

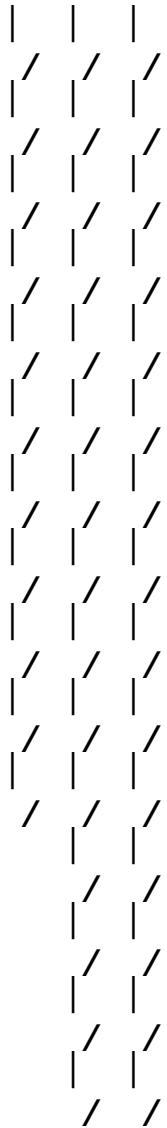
「へえ～、”士郎”ねえ。そいつは、”じゅうそつ”まだ」

結局、一成の熾烈を極める士郎への詰問は、クラス担任である藤村大河教諭が、大幅に遅れて教室に到着するまで続けられた。

初日のホームルームから大遅刻というある意味彼女らしい現れかたをした大河は、挨拶もそこそこに、大急ぎで連絡事項を二つばかり捲し立てた。

急遽休職することとなつた葛木宗一郎の代理講師として、明日からアンナ・カミンスキーと言う名の女性教師が赴任してくること。そしてもう一つは、同じく明日、このクラスに転入生がやって来るということだった。

そんな中、クラスの全員が自分達の担任の暴走っぷりに目を丸くしているその隙に、大河の放つた”はい解散！”の一言で、本日はお開きとなつた。



始業式とホームルームのみで終了となつたこの日、部活動のない士郎と凜は、そのまま衛宮邸へと帰宅した。  
正午が近づいた今、衛宮邸台所からは、ジュウジュウという音とと

もに、僅かに醤油を焦がしたような食欲をそそる匂いが、居間にまで漂ってきている。

もつとも、豪快に中華鍋を振りながら、数人分の黄金炒飯をつくっているのは、この家の主である士郎ではなく、凛だつたりする。帰宅するなり、パタリと前のめりに倒れこんだ士郎は、そのままの姿勢で動かなくなってしまった。

まあ、教室を出るところからこの衛宮邸に到着するまでの間、ずっと凛に腕を組んでいた士郎の精神的疲労が故であるのだが。

「士郎～、そろそろお昼～」ほん出来るから、いい加減復活しなさいよ

琥珀色に透き通ったコンソメスープを味見しながら、士郎に声を掛けた凛は、ちらりとその姿を眺めて苦笑した。少しばかり、初日からやり過ぎだったかしらと。

「お、おひ……」

台所から掛けられた声に、突っ伏したままの姿勢で士郎が答えた時、勢い良く玄関が開く音がした。

同時に、やや軽めの足音がドップラー効果を伴つた声とともに近づいてくる。

「シ～～ロ～～ウ～～ツ！～！」

そして、居間の入り口を踏み切り線に、ぴょんといつ擬音が聞こえてくるほど見事な跳躍を見せたイリヤスフィールの小さな体が、綺麗な放物線を描いて士郎の背中へとのしかかった。

「ぐえ……」

小動物が潰されたような声をあげた士郎の様子にはお構いなしで、満面の笑みを浮かべたイリヤスフィールは、そのまま士郎に抱きついていく。

「お帰りなさいっ、シロウ！　あと、ついでにリンも……」

「ついでにって、あんたねえ……」

イリヤスフィールの憎まれ口に、台所から応戦しようと凛が口を開きかけた時、今度はすこし重たげな足音がドテドテと近づいてきた。

その足音の主は、居間にに入るやいなや、ビシッと士郎を指さし通告する。

「HIIヤシロウッ！　イリヤスフィール様から離れなさいっ！！  
この無礼者っ！！」

まさに言葉の内容だけは、主思いの忠臣ではあるのだが、いかんせん状況が状況なだけに、この場にいる彼女以外の人間からは生暖かい視線が注がれている。

そんな視線を一切無視し、己が道を突き進むこの女性　セラは、イリヤスフィールの魔術教育係兼従者としてアインツベルンが作成した、ホムンクルスである。

そして、もう一人

「……イリヤ楽しそう。わたしもやる」

無表情のままそう言つて、今にも士郎に飛び乗ろうとしている彼女　リーゼリットもまた、アインツベルンがつくりあげたホムン

クルスだった。

「うわっ！ ちょっと待てリズ、いくらなんでもそれはまずいだろ！ って、イリヤはどうあえず、降りてくれッ！ あと、これって俺のせいなのかつ？！」

ほんの少し息を抜いていた間、どんどん事態が切迫した方向へと進んでいく間に、あわてふためきながら士郎が待ったを掛けた。飛びかかるうとするもの、無邪気に状況を悪化させていくもの、無実の罪を糾弾するものに追いつめられた士郎が絶体絶命となつたその時、玄関からは普段の彼女から想像できぬほどほどの慌てた声が聞こえてきた。

「お邪魔しますっ！…！」

そして、これまで普段の彼女には似つかわしくないほど、慌てた足音が廊下を近づいてくる。

「せ、先輩っ！… あ、あの……そのですね、えっと、わたし……」

ぜいぜいと肩で息をしながら、居間へと飛び込んできた桜は、一言大声で士郎に声をかけると、一斉に自分へと集中した視線に負けたように、急に口ごもりだした。

何かを言い出したいのだが、その勇気がでないといった様子のまま、モジモジと口ごもる桜に、士郎はいつものように声をかける。

「おかえり、桜。部活」「へりつさん。まあ、一緒に昼飯にしようつ

絶妙のタイミングで出された士郎の助け舟に、桜は思わず安堵の息をつく。

「はい、先輩。あ、お料理運ぶのお手伝いしますね、遠坂先輩」

パタパタと台所へと向かう桜に、それじゃあお願ひねと凛が応える。

普段なら、ここで騒がしくも楽しい昼食となるのだが　今日はもう一つ、ある意味で大きな事件が起った。

「　「　「　「　「　.....」　「　「　「

ぽかぽかと暖かい春の昼下がり、終始無言のまま進められた昼食の後、衛宮邸の居間に集つた面々は重苦しい空氣の中、アフタヌーンティを楽しんでいた。

もつとも、昼食の開始時点から今に至るまでの小一時間ほど、誰一人として声を挙げないこの状況を、”楽しむ”と言えるのかはまた別の問題だが。

事の発端は、些細な事だった。

昼食の準備が整い、凛が席に座つた。ただそれだけのことなのだ。そう、それだけのことなのだが……その席の位置が問題だった。毅然として凛が座つたその席は、この衛宮邸において暗黙の了解となつている席順でいうところの　士郎の席だった。

凛の突然の行為に、士郎以外の者たち　特に桜とイリヤスフィールは、啞然としたまま凛を見つめた。

だが、肝心の士郎は凛の座る位置に対して何も言わず、いつもと変わらない様子で、これまた当たり前のようにその隣に座つたのだ。つまり　この二ヶ月近く誰もが座ろうとしなかつた、”彼女”的の席に。

そんな士郎の様子をうかがい、ようやく全員が席についた後、それ

以来今に至るまでの長い沈黙が続くこととなつた。

「あ～、その、なんだ。今日はセラもリズも衛宮邸に来るなんて、珍しいよな。何か用事でもあったのか？」

あまりにも重い空氣に負けた士郎が、重圧に耐えかね、日和つた瞬間である。

というのはあくまで表面上のことだ、これは、士郎なりの不器用でわかりづらご凜への感謝と、彼女の行動を責めないで欲しいという皆への意思表示だった。

士郎は気付いていたのだ。学園から帰宅した後、台所に立った凜が真っ先にしたこととは、この一ヶ月間使われること無く食器棚へと並べられていた、可愛いライオン柄の食器を丁寧に洗つたことなのだ。そして、凜のそういう人の良さもまた、中々わかりづらいのだということを。

だからこそ、今のこの雰囲気を、士郎は良しとしなかつたのだろう。

「……ええ、今朝方リーゼリットが雉を捕まえましたので、普段からお嬢様がお世話になつている藤村家へとお持ちしたのです」

「「「え？」」」

士郎の問いかけに、生真面目な表情のままのセラが事務口調で答えたのだが、その突飛な内容に士郎と凜、桜は声を揃えて啞然とした。

かたや、リーゼリットは無表情な面持ちのまま、士郎達にピースサインを向けているのだが。

「雉つて確か……日本の国鳥よね？」

「あの……良いんでしょつか、先輩？ 勝手に狩りとかしちやつて？」

困惑しながらたずねてきた凜と桜の言葉に、士郎は戸惑いながらも記憶を頼りに答えていく。

「ああ、遠坂の言つ通り、雉は日本の国鳥なんだけど、確か狩猟対象に指定されるはずだ。だから狩りしかやいけないってことはない。まあ、わざんと狩猟免許を持つていれば、だけだな……」

士郎の説明に、あちやへとこつ顔をする凜と、困りましたねえと苦笑いする桜。

「フンシ、何を言つのかと思えば……アインツベルンの森で何をしようと、我々アインツベルンの勝手です。Hミヤ様の意見など聞く必要はありませんっ！」

好対照に、何か文句でもあるのかと独自理論を展開するセラ。  
このあたり、見事に言葉のデッジボールなのだが、それを突っ込む人材を欠いていた。

仕方なく士郎がそれを担うのだが、正直、役不足感は否めない。

「あ、いや、意見してるのは俺じゃなくて、この国の鳥獣法って法律なんだけどな……それはともかく、よく雉なんてとれたよな？」

苦笑を浮かべながらも、なんとかこの場の雰囲気が変わったなと一息ついた士郎は、ふと疑問に思つたことを口にした。

「ええ、なんでも、リーゼリットの鍛錬中に、すっぽ抜けた斧槍が森へと飛んでいったそうです。それで、探してみたところ……雉が

「へえ～、リズむじこじやないつー！」

「えつへん」

セラの説明にイリヤスフィールが目を輝かせて称えれば、またもやリーゼリットがピースサインで応える。  
そんな、アインツベルン組のやりとりにて、士郎達は苦笑いを浮かべるしか無かつた。

「それでは、お嬢様。私とリーゼリットは城へと戻らせて頂きます。なにぶん、掃除などの仕事が滞っていますので。それから、藤村家の女中の方が、こちらに雉を届けてくださる手筈になつておりますので、皆様でお召し上がり下さい。ああ、ヒミヤ様、今回だけは特別に貴方も食すことを許可します」

そう言つてセラはリーゼリットを従え、郊外の城へと戻つていった。

「え～っと、衛宮さんちの今夜のメニュー、どうやら、雉鍋らしそう……強制的に」

慌ただしく去つていったセラとリーゼリットを見送つた後、士郎は首を振り向いてポツリと呟いた。

午後九時を少し過ぎた深山町の住宅街を、士郎は凜と桜を送り届けるために連れ立つて歩いていた。

セラの予告通り、夕方に藤村家から届けられた雉肉と鴨肉を使った鍋は、皆に好評だった。

にも関わらず、夕食時騒いでいたのは、学園から帰宅した大河一人であり、特に凛と桜はどこかギクシャクとした様子をあらわにしていた。

結局、今ひとつ盛り上がりに欠ける夕食の後、イリヤスフィールは大河とともに藤村邸へと帰つて行き、士郎は残つた一人を送ることとなつた。

まあ、この二人のギクシャクは、”コレ”に代表される遠坂の態度が原因なんだろうなあと、士郎は登校時と同じ様に自分と腕を組む凛の手に、そつと視線を落とす。

「あの、先輩？」

衛宮邸を出てから、俯いたまま一言も話さなかつた桜が、不意に士郎へと声をかけてきた。

「ん？ どうした、桜？」

「えっと、その……今夜は冷えますよね？」

胸の前でグッと両手を握り締めながら、桜は真剣な表情で時節の挨拶のような言葉を投げかけてきた。

「いや、まあ、冷えるといえばそうなのかな」

その真剣な表情と気迫に押されたように、士郎は曖昧に相槌を打つ。

「はい！ 絶対に今夜は寒いんです！ その、だから……失礼しま

すつー！」

勢い込んで捲し立てた桜は、そう言つやいなや、顔を耳まで真赤にしながらも、土郎の左腕に自分の右腕を絡めた。

「お、おい！ 桜まで何して」

予想すらしなかつた後輩の積極的な攻撃に、驚いた土郎が言いかけた言葉を、桜と反対側の腕をとる凛が遮つた。

「へえ、いい度胸してるじやない、桜」

軽く笑顔でそういつた凛の目が、まったく笑つていなくて土郎も気付いていた。

「はい、ね……遠坂先輩には、負けませんっ！」

対する桜も、一瞬何かを躊躇したものの、その目に強い力を宿し、真直ぐに凛を見据えて答える。

「そう……わかったわ。わたし、あなたのそういう所、正直嫌いじゃないわよ。でも、手加減しないからそのつもりでね」

「はい、わたしも遠坂先輩のことは大好きです。でも、これだけは譲れません！」

自分を挟んで、宣戦布告めいた言葉を投げかけ合う二人の少女。やれ朴念仁だ、やれ唐変木だと散々言われ続けた土郎でも、ここまでくればこの状況が何を意味するのか、薄つすらと自覚し始めていた。

もしも万が一、自分のこの想像が、自惚れや思い上がりで無かつたのならば、二人は自分に好意を抱いてくれているのかもしれない。今日一日、凛がとり続けた態度の意味も、そう考えれば合点が行くのだ。

そして逆に、そう考えてから、過去の桜の言動を思い返せば、ああなるほどなと思い当たるフシが、幾つもあった。

だからこそ、士郎は真剣に、今の自分自身を見つめ直す。結果、自分の気持が今はまだ、この身に余る彼女たちの好意を、きちんと受け止めるだけの状態に無いことを理解した。

二ヶ月　それは、己の存在全てよりも大切だと、初めて心から愛したのだと誓えた”彼女”を、永遠に失くしてしまった疵痕が癒えるには、少しばかり足りないらしい。

だけど　今のこの状況が褒められたものじゃないことだけは確かだよなと、内心頭をかかえる思いでいる。

後一年で学生という身分が終わること、目指すべき自身の理想、そこへと至る道、様々なことをしっかりと考えて、遠からず自分も態度を示さなければいけないのだろうと、士郎は密かに決意した。

「雉、美味かつたよな」

突如脈絡もない言葉を口にした士郎を、凛と桜がきょとんとした表情で見つめる。

「まあ、雉に限つたわけじゃないけどさ。あの家で、みんなでテー  
ブルを囲んで食べる料理は、本当に美味しいんだ。だからさ　とり  
あえず、あの家の中では、できればみんな仲良くして欲しい。今は  
まだ、こんなことしか言えない自分がみつともないんだけどさ。口  
レじゃ駄目か?」

僅かに星を見上げながら、静かに話す士郎を凛と桜はじつと見つ

める。

「いいんぢゃない、それで。まあ、アンタらしい”答え”だと思つし

「はい、わたしもそれでいいと思います。先輩の気持ちがはつきりするまで、いつまでも待ちますから」

二人そろつて、”それでいい”と答えてくれた少女に、ありがとなと答えながら、士郎は再び歩き出した。

士郎が凛と桜を送るため、衛宮邸を出ようと支度をし始めていた頃 同じ冬木市の郊外を走る国道沿いのある森の入り口に、ヴィクトリア調のアンティーケなメイド服を纏った少女が二人立っていた。

頭には大きなキャップ状のホワイトブリムをつけていたため、その髪の色はわからないが、透けるような白い肌に紅玉のような瞳という特徴はあるで

「ここで間違ひありませんね？」わたし ヴォルグンデ

「ええ、この森の奥 私とわたし ヴォークリングわたし デなら、十分とかからな

い位置です」

お互い見分けがつかないほど、似た顔立ちの少女たちは、お互いを「<sup>わたし</sup>ヴォルグン<sup>わたし</sup>デ、<sup>わたし</sup>ヴォークリン<sup>わたし</sup>デ」と呼びあう。

「ならば、疾く駆け抜けましょ、<sup>わたし</sup>ヴォルグン<sup>わたし</sup>デ」

「そうですね、処理は速いに越したことはありません。時間を掛ければ”あの方”にも知れてしまう。急ぎましょ、<sup>わたし</sup>ヴォークリン<sup>わたし</sup>デ」

そう言い合ながら、一人揃つて森の入口境界線まで歩み寄る。

「お待ちなさい、<sup>わたし</sup>ヴォルグン<sup>わたし</sup>デ。ここが結界境界線のようです」

「なるほど、理解しました、<sup>わたし</sup>ヴォークリン<sup>わたし</sup>デ」

「「しかし、”我々アインツベルンのホムンクルス”には、無意味な代物です」」

声をそろえ、自らをアインツベルンのホムンクルスと名乗った瞬間、まるでその場から消えたと錯覚するほどの加速をもつて、二人の少女は森へと跳躍していた。

ほぼ同時刻、アインツベルンの森の奥、第五次聖杯戦争時にはイリヤスフィールが拠点として使用していた城内では、セラトリーゼリットが玄関ホールの清掃作業に取り掛かっていた。

特にこの玄関ホールは対アーチャー戦において、壊滅状態にまで破壊されていたため、ようやく改修作業が終了したばかりなのだ。

「ふう、ようやくこの城も以前の姿にもどりましたね。これで、いつでもお嬢様をお迎え出来るというものです。このままいつまでもHミヤシロウなどの傍にいらっしゃっては、どんな悪影響を被ることか、知れたものではありません」

長い正面階段の掃除を終えたセラが、一息つきながら、何やら中空を睨みつけて思巻いている。

「でもイリヤ、毎日たのしそう。イリヤが楽しそうのは、わたしも嬉しい」

それまで玄関ホールを、踊りながら掃いていたリーゼリットが抑揚のない口調で、しかし、僅かに口元をほこりばせながら話しかけた。

「それは私も否定はしません。出来れば……お嬢様には、最後まで笑顔で過ごして欲しいと、そう思つてているのです」

幾分口調を和らげ、優しさと悲しみを併せたような微笑を浮かべたセラが、その本心をポツリと零した。

「うん、イリヤがこのままシロウと……」

と、リーゼリットがそこまで話した時、轟音とともに玄関ホールの正面扉が盛大に破壊された。

舞い散る破片を物ともせず、ホールに飾られていた斧槍ハルバードを手にしたリーゼリットが、瞬時にセラを庇うように前へと立ちふさがる。

「リーゼリットをアインツベルンの城と知つての狼藉ですか？！ 無礼者

「！！」

リーゼリットに庇われながらも、セラは侵入者に向けアインツベルンとしての口上を叩きつける。

そして、不埒な侵入者をその目にしようと視線を向けた瞬間、期せずしてセラは自身の思考を停止してしまった。

それは、自分達と同じ、アインツベルンのホムンクルスが着るヴィクトリア調のメイド服を纏つた一人の少女が、どういう存在であるかを瞬時に理解してしまった彼女の不幸だったのかも知れない。

「お前たちにアインツベルンを名乗る資格は、もはや無いのだと知りなさい。そして、このアインツベルンの森で何をしよう」と、  
“我々アインツベルン”の勝手です」

「ヴォークリングデと呼ばれていた少女が、一切の感情も抑揚もない口調で、セラとリーゼリットを断罪した。

「そして、お前たちの処置は決定されています。全ては偉大なるアインツベルンの悲願達成のため。無益で無意味なものは、速やかに排除されなければならない」

そう言つて、僅かな迷いすら表情に乗せること無く、ヴェルグンデと呼ばれた少女が、その場に片膝をついた。

瞬間、セラとリーゼリットに向けられた、少女の左足膝関節部が機械的な音と共に変形する。

シユコンという、金属同士が軽く摩擦するような音と共に、そこから飛び出したモノが、対戦車擲弾発射器であるとセラが認識したときには、もはや全てが遅かつた……

夜の闇に浮かびあがつた、まるで要塞のような間桐邸がその視界に入つた頃、連れ立つて歩いていた桜がその手を士郎から離した。

「先輩、送つて頂いてありがとうございました。」ソードで結構ですか

そういうて、佩口とお辞儀をする桜に、士郎はその視線を真直ぐに向けて言葉をかける。

「ああ、おやすみ、桜。明日からも、よろしくな」

「はい、もちろんです、先輩。遠坂先輩もおやすみなさい」

にこりと笑顔で答えた桜の言葉に、半眼で凛がつっこむ。

「”も”って何よ、”も”って……まあいいけど……それじゃあ、おやすみなさい、桜

それでも、どこか優しげな微笑で挨拶を交わす凛を、士郎はじつと見つめていた。

くるりと背を向けて、間桐邸へと歩き出した桜の後ろ姿を見送つて  
いた凜に、そつと土郎が声をかける。

「さてと それじゃ、行くか」

「……ええ」

士郎が促すようにして歩き出した一人は、遠坂邸へと続く坂道を、ただ黙つて歩いて行く。

静寂の坂道に、一人分の足音だけが響く中、ポツリと士郎が呟いた。

「セイバーのこと ありがとな、遠坂」

この一ヶ月間、”彼女”を失った士郎を気遣うあまり、周りの誰もが目に見えない線を引いていた。

それは、たとえば食事時の席であつたり、使われない食器に触れなことであつたり、士郎の部屋の隣の空き部屋には立ち入らないことであつたりと、形は様々であつたのだが。

「へ？ ベ、別にわたしは、わたしのしたいようにしただけなんだから……アンタにお礼を言われるようなことじやないわよ！」

唐突に紡がれた士郎の礼に、凛は頬を朱に染めながらブイッと顔を背けてしまう。

本当に不意打ちに弱いヤツだなあと、内心クスリと笑いながら、士郎は言葉を続ける。

「ああ、それでもさ。正直言うと 少し楽になつたような気がしたんだ。だから、ありがとな」

それは凛が初めて見た、士郎が自分自身のことで浮かべた笑顔だった。

他人が見れば、少し微笑んだ程度であったその笑顔は、少なくとも

彼女にとつて宝石以上に貴重なものに思えた。

「さう なら、良かつたかな」

そして辿り着いた遠坂邸を前に、士郎の腕を離した凛は、くるりと向き合って微笑んだ。

「おやすみ、遠坂」

「おやすみなさい、士郎」

二人、そう挨拶を交わしたとき、遠坂邸を背にした凛の視界に、見知った人物の特徴ある容姿によく似たが姿が小さく映り込んだ。まだ遠く、随分と距離が離れてはいるが、他人よりも小さな体と、雪のように舞う銀髪から、おそらく間違いは無いだろう。

「あれ？ ねえ、士郎。あれって、イリヤじゃないかしら？」

そう言いながら指差す凛に従い、振り返った士郎は、今まで自分達が登ってきた坂道を見下ろした。

「ん？ ああ、間違いない。イリヤだ……けど、様子がおかしいぞつ？」

長い坂道を駆け登つてくるイリヤスフィールの姿を捉えた瞬間、士郎の顔つきが変わった。

他人よりも視力の良いその目は、ぜえぜえと肩で息をし、苦しさに顔を歪ませながらも、走ることを止めないイリヤスフィールの姿を鮮明に捉えていた。

ふらふらになりながらも徐々に近づいてくるイリヤスフィールが、

その美しい銀髪を振り乱し、号泣していくことに士郎は驚き硬直した。そして

「……ウツ！……ロウツ！……シロウツ！……シロウカウ  
ツ！」

喉が張り裂けんばかりの悲痛な絶叫が届いた瞬間、ギリッと奥歯を噛み締め、士郎は飛び出していた。

「ちょ、待ちなさいよ、士郎っ！」

全速力でイリヤスフィールのもとへと、坂道を駆け下りだした士郎を追って、凛もまた走りだす。追いかけたその背中は、ここが坂道であり、それを下っているのだということなどまったく考慮していないかの如く加速していく。アレでは止まれないと凛が判断した瞬間、イリヤスフィールの体がぐらりと揺れた。

「イリヤツー！」

少女の名を叫ぶと同時に、士郎は己が身をクッシュョン代わりにと、投げ出した。

同時に、その後方からは、加速しそぎたまま飛び込んだ士郎をサポートするために、凛の詠唱が紡がれる。

「クツ！ Anfang! E s i st gro s , Es ist kle in vox Gott Es Atlas !」

絶妙のタイミングで発動した凛の重力制御魔術のおかげで、傷一

つないまま、士郎はイリヤスフィールの体を受け止めることが出来た。

「イリヤツ……どうしたんだ、イリヤツ……一体何があった？」

自身の胸に倒れこんだイリヤスフィールの小さな体を抱きしめながら、大声で問う士郎に、凛が追いついた。

「少しは後先考えてから飛び出しなさいよ……このバカつ……」

スコニックと士郎の後頭部を叩きながら、凛が怒りをあらわにした。その時、士郎の胸で泣きじゃくっていたイリヤスフィールが、その小さな手で士郎の服を掴み、嗚咽にまみれて呟いた。

「セラリ、リズが……しんじやったよう……」

「なつ？」

戻ってきた日常の中、これから始まる新たな生活には、あまりに不釣り合いなイリヤスフィールの言葉に、士郎は一瞬、その意味を正確に理解しきれなかつた。

遠坂邸間近のこの坂道で、大切な従者を失つたと泣きじゃくるアインツベルンの少女と、彼女を抱きとめ硬直する衛宮の魔術使い、それを見守るよろこび立けぬくす遠坂現当主の少女。

今、夜の闇の中から、この光景を眺める視線が幾つ存在するのか当事者である士郎達は、未だ気づいてはいない。

## 一章「哀悼の城」（後書き）

なんだか、セイバールートアフターには思えないような展開ですが……  
まだまだ本編がスタートしたばかり、これからどんどん人間関係が動いていきます。  
ちなみに、士郎ハーレム物ではないことをせんので、悪しからず。  
次回も頑張って公開しますので、お付き合い頂ければ幸いです。

## 一一章「罪と罰」

……一つ疑問があるのだが、訊ねてみても良いかね？いやなに、前回の話を聞いた君が、何故顔を赤くしているのかといふ……

あああ、君の照れ隠しに、私を足蹴にするのは止めたまえ！  
まったく……君はもう少し、慎みというものを覚えるべきだぞ。  
それで、まだ続けるつもりなのかね？　フム、私としては気がすすまないのだが、仕方あるまい。

では、語り続けるとしよう、愚か者の物語を。

「SOLITUDE」第一話・Einzenber - 一章「罪と罰」

冬木市の郊外を走る国道沿いに、未だ人の手が入っていない森がある。陽の光あふれる昼なお暗いこの森の入口で、午後十時半を過ぎた今、土郎は凛とイリヤスフィールを伴い、その深い森の闇を見つめていた。

先刻、遠坂邸付近の坂道で、イリヤスフィールからセラとリーゼリットの身に異変が起きたことを知らされた土郎は、まず事態の確認をするべきだと判断した。

ところのも、泣きじゃくるイリヤスフィールを何とか落ち着かせた士郎と凜が聞き出した内容が、にわかには信じがたいようなものだつたからだ。

つまり

イリヤスフィールとリーゼリットの間には、特殊な繋がりがあるらしく、離れた場所にいようと、その身に異変があれば解つてしまふということ。

イリヤスフィールの支配下にあるはずの、アインツベルンの森に張られた結界に、彼女自身がアクセス不能になっているということ。そのために、今現在の城内がどうなっているのか、セラとリーゼリットの身に何が起きたのか、詳細が掴めないということ。

以上の三点が、イリヤスフィールの語った内容だつたのだが、それを聞かされた士郎と凜は、聖杯戦争中にあの森に張り巡らされた結界と、その奥にそびえる城の堅牢さを、嫌といつほぞ思い知られてしているのだ。

イリヤスフィールの言葉を信じないわけではないが、はいそうですかと言うわけにも行かなかつた。

結果、事態を把握するために城へと向かうこととなり、とりあえず新都方面へと進みながら、途中で出合つタクシーをとめようとしたまでは良かつたが、そもそも、この時に年若い士郎たちを快く乗せてくれるタクシーなどあるはずもなく、三度目の乗車拒否でついにブチ切れた凜が運転手に暗示をかけ、何とかここまで辿り着いたのである。

「やつぱり……私の結界が書き換えられているわ」

森の入口の境界線上で、イリヤスフィールはそっと手を瞑り、本來自分のものであつた結界の現状を口にした。

「ねえ、イリヤ。アインツベルンの術式で構築された結界って、そ

「何を言つてゐるのよ、リン。強引に力技で結界を壊すのならまだしも、私の結界がそんな簡単に書き換えられるはずないじゃない！たしならやる気が失せるくらい、厄介な代物におもえるんだけど」

「信じられない」という顔で問いかける凛の言葉に、自分の張つた結界に絶対の自信を持つていたイリヤスフィールは、凛を睨みながら反論する。

当然、どんな事象にも例外といつものは存在し、“絶対”という言葉は無意味である。そういう意味において、イリヤスフィールの結界を書き換えることが可能な魔術師が存在したとしても、不思議ではない。

だがこの場合、凛が言つたのはそつこいつではなく、その行為自体に意味が無いということなのだ。

もしも そんなことが可能な魔術師がいたとしても、それには非常に時間と労力を必要とし、その対価として得られるものは、書き換え前の結界と全く同じ結界の主導権のみといつ、なんとも釣り合の取れない馬鹿げた行為である。

そんなことをするくらいなら、最初から強引に結界を壊し、その後に自身の手で張り直したほうが、よほど効率が良い。

「でも どうしたんだ？ イリヤ？」

「うん、今のこの結界も、アインツベルンの術式で構成されてるみたいね。私のとは少し違うけど……書き換えられたって言つよりも、これだと、乗っ取られたって言つたほうが、より正確ね」

つぶさに結界を調べながら、十郎の間に答えるイリヤスフィー

ルの表情はどんどんと曇っていく。

彼女の杞憂は、まさにその例外を意識したものだった。前述したように、本来ならば釣り合いの取れない行為ではあるが、ここに、同門同族にて同系列の魔術を習得したものが存在した場合、話は全く変わつてくる。ベースとなる術式を理解し、構築方法まで知っていたのならば、最小限の時間と労力で最大の結果を得ることが可能となる。

「とにかく、ここにひじいても始まらない。侵入に支障さえなければ、先を急げ！」

「そうね……私のと同じで感知型の結界だから、森に入ることは可能よ」

「それじゃあ、周囲に十分警戒しながら進むわよ」

イリヤスフイールの不安を他所に、三人は森の暗闇へと足を進めていった。

迷いの森のような闇の中を進むこと約一時間、本来の主が案内する最短ルートを進んだ士郎達の目の前に、巨大な城の輪郭が姿を現した。

以前訪れた時と変わらぬ姿を見せるこの城へと近づくに連れ、その豪奢な造りが詳細に視認できるようになる。

そして、正面玄関へと辿り着いた三人が目にしたものは、無残に崩れ落ちた支柱の、巨大な破片に埋もれた正面玄関だった。

「え？」

「なによ……これ……」

まるでミサイルの直撃でも受けたかのような入り口付近の倒壊に、イリヤスフィールは声も出ず、凛は顔色を失っていた。

その間に、折り重なった瓦礫の山を登った士郎が、人一人分ほど空いた隙間から、ホール内部をうかがつた。

灯りの落ちた玄関ホールは薄暗く、いたる所に大小様々な瓦礫が転がっている。

罅割れた内壁、吹き飛ばされた扉、砕け散った内装品、そして崩れかけた正面階段の下、どす黒いシミの出来た辺りに横たわる”ナニカ”。

「クッ……！」

他人よりも良い目が逆に仇となり、ソレが何であるのかを把握してしまった士郎は、思わず顔を伏せ、やり場のない憤りに奥歯を噛み締める。

それでも、戦慄く体を無理やり抑えこみ、イリヤスフィールに悟られぬよう」と、己を叱咤し、士郎は普段通りの声色で話しかけようとした。

「こここの隙間から中に入れるみたいだ……けど、足場がもうくて危険だから、イリヤと遠坂はそこにいてくれっ！」

だが、士郎の意に反して震えてしまった声は、まるでそんな偽善は無意味だと嘲るかのように、この先の”事実”を眼下の少女へ伝えようとする。

「えつ？ ちよっと、士郎？ あんたいつたい

「シロウ 私に余計な気遣いはしないで。主として、従者の最期をみとる覚悟はできているわ。それに、それは私の責務でもあるの。だから……」

氣丈にも顔を上げ、士郎を見据えたイリヤスフィールは、気高き血に生まれた者の責務を全うしようとするとする。

ならば、これ以上彼女を遠ざけることは、その矜持を辱めることに他ならないと、士郎は彼女の言葉を認める他にすべを持たなかつた。

「…………わかつた。けど、五分……五分だけ待つてくれないか？」

「のままでは、彼女たちの最期が痛々しいだけの記憶になつてしまふ セめてこの主従の最後の語らいを、可能な限り綺麗なものへとするために、士郎はその時間を欲した。  
例えその行為が、偽善と呼ばれるものであつたとしても構つものかと、心の中で叫びながら。

「…………シロウは、やさしいね。うん、シロウの言ひとおりにするわ

この状況で、何を目的に士郎が五分という僅かな時間要求したのか。この場にいる聰明な二人の少女が、それを理解出来ないわけがない。

泣き出しそうな笑顔で答えたイリヤスフィールを見つめ、士郎は惨劇の場となつたホールへ足を踏みれた。

ホールへと入つた士郎の行動は、迅速かつ冷静なものだった。

爆散したように飛び散つた、恐らくはリーゼリットのものだったの

であろう体を集め、サロンから持ちだした純白のテーブルクロスを覆い被せた。

そしてもう一人、四肢のうちその三つを失ってしまったセラの体にも、同じように白のクロスを被せた。

そんな悪夢のような作業をこれ程冷静にこなせたのは、士郎が死体を見慣れていたせいなのかもしれない。

かといって、近しい人の死にまで慣れているのかといえば……作業を終えた瞬間、ホールの床を打ち据えた彼の拳が、全てを物語っているのだろう。

「シロウ……ありがとう、セラとリズを綺麗にしてくれて……」

床に膝を屈したまま、打ち震える士郎の背中に、ホールへと入ってきたイリヤスフィールの声が掛かった。

「イリヤ……」

たつた一言で声を詰まらせた士郎と、掛ける言葉すら見つからない凛において、イリヤスフィールは静かに彼女たちへと近づいていく。

「うん、がんばったんだね、リズ。もう、ゆっくり眠つていいからね」

そつと、その手を純白のクロスに差し伸べたイリヤスフィールが、リーゼリットへと語りかけた。

静かに黙祷を捧げた後、同じく純白のクロスにその体を覆われたセラへと歩み寄る。

その足音がホールに反響する中、唯一残ったセラの左手が、ピクッと動いた。

「……お、嬢様……」

傍に座つたイリヤスフィールへと、最後の力を振り絞るよつし、セラが声をあげた。

ありえないという驚愕と、もしかするとつい僅かな希望を胸に、士郎と凜が駆け寄る。

「申し訳……いざこせん。この……よつな、醜態を晒す……など」

「いいえ、セラ。主人の命に関わる危機を伝えないまま逝くなんて、心配性のセラらしくないもの。それを成し得た貴女は最高の従者よ、セラ」

いかに優れたホムンクルスと言えど、その損傷が活動限界を遥かに超えていることなど、士郎にも一目でわかる。にも関わらず、彼女は自身の主へとこの危急を伝えるためだけに、死の理を拒み続けたのだ。

「身に余る……お言葉……ド、いざこ……ます。お、お嬢様……敵は、ア……アインツ、ベルンツ！」

「な……つ？！」

死力を尽くして伝えられたその名前に、士郎が思わず声をあげたその瞬間、セラの左手が士郎の腕をガシッと掴んだ。

「H、エミヤ様あつ！……ど、どうかつ！　お嬢様をつ…キ、キリツグ様が……守れ、なかつた……お嬢様の、笑顔をつ…！」

どうか……私の……最後の……

事切れる最後の最後まで、己が主人の身を案じ続けた従者の手は、鬼気迫るその言葉とともに、癌となるほどに強く士郎の腕を掴んで離さなかつた。

「見事な最期よ、セラ……貴女のような従者を持てたことを、私は誇りに思うわ」

あまりにも壮絶な従者の最期を、主人が誇ったその哀しそぎる光景に、凛は思わず視線を外し、士郎はその目に焼き付けようとした。腕を掴まれ、託された想いは、主人の身を案じた従者の最後の切望であると共に、自身の養父が犯した罪を贖うため、下された罰の形ではないのかと、士郎には思えた。

ならば

「ああ、後は引き受けた。イリヤは必ず俺が守るから」

「これが切望であるなら、叶えて見せよ。これが罰であるなら、贖つて見せよう。」

そう決意した士郎は、二人の従者の亡骸に黙祷を捧げ、この城へと来てから一度も涙を見せないイリヤスファイールへと声を掛けた。

「だから、もういいんだぞ？ イリヤが泣いても……」

士郎のその言葉が、主人としての矜持を保ち続けた少女の仮面に籠を入れたのだろう。

荒城の月の下、魔術師でもなくホムンクルスでもない ただ、最愛の家族を失つた、一人の少女の慟哭が響いた。

セラとリーゼリットの骸を城の中庭へと埋葬し、国道で通りがかりの車を捕まえた士郎達が、深山町へと戻ってきたのは午前三時を過ぎていた。

遠坂邸の前で車を降り、運転手に遅延発動型の暗示を施した凜と別れた士郎は、泣き疲れて眠ってしまったイリヤスフィールを背負い、衛宮邸へと戻ってきた。

時間が時間だけに、藤村邸には寄らずに戻った衛宮邸の玄関で、一度目を覚ましたイリヤスフィールは、何も言わずにそのまま士郎の背中にしがみついてきた。

絶対に離れようとしないイリヤスフィールに、仕方がないと士郎は観念し、そのまま自室に床を敷くと、やむを得ず同衾という形になってしまった。

精神的にかなりのショックを受けていたのだろうイリヤスフィールは、横になるとすぐに小さな寝息を立て始めた。

枕がわりにした士郎の左手を、しっかりと握りしめて眠るイリヤスフィールの寝顔に小さく溜息をつき、士郎は自分の右腕に浮かぶ真新しい痣を目の前に掲げた。

「俺が……守るんだ」

徐々に浸透する睡魔に抗いながら、士郎はセラの最後の言葉を思い返す。

切嗣が守れなかつたイリヤスフィールの笑顔を守つてほしいといふ、彼女の言葉を。

過去、切嗣がイリヤスフィールを孤独にしたことは事実なのだろうし、その原因の一つは養子となつた自分にあるのだろう。

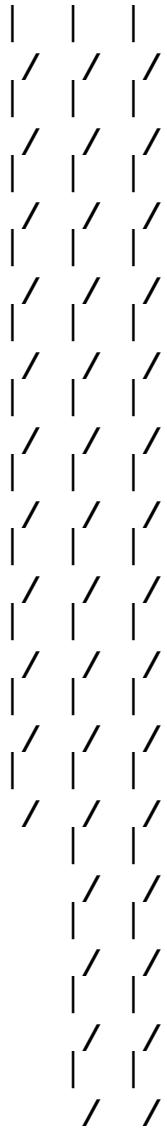
既に他界した切嗣は、イリヤスフィールに詫びることすらできないし、自分が詫びたとしても、イリヤスフィールの過去が変わるわけではない。

だからと云つて、犯した罪から田を背けるわけではないが、それでも許されるならば、罰という形ではなく、託された願いを叶えると、いう形で、彼女の笑顔を守りたいと、士郎は思った。

「俺が……守るんだ」

暗い自室の中、再度囁いたその言葉を噛み締め、士郎は眠りへと落ちていった。

ただ一つ、ならばこの少女に孤独の涙を流させたといつ罪は、一体誰が何時どのような罰を背負つて贖うのだろうかといつ、解けない疑問を胸に抱きながら。



翌朝午前六時半、衛宮邸の廊下を居間から士郎の自室へと進む足音があつた。

「先輩、おはようございます」

朝食の下拵えを終えた桜が、いまだ起きていない土郎を起しあつと、障子越しに声を掛けたのだが

「……」

土郎からの返事は無いものの、部屋の中から気配が伝わってくる。土蔵ではなく、土郎が自室で休んでいた事に安堵はしたものの、何やら伝わってくる気配が妙なのだ。

もしや体調を崩したのではと、不意に湧き上がった心配が、桜の背中を押してしまった。

「あの、先輩？ 何があつたんですか？ その、体調とか崩してないですか？ ……し、失礼しますっ！」

ガラリと開けられた障子を境界線にして、見下ろした姿勢のまま固まる桜と、布団の上で身を起こした姿勢のまま固まる土郎。その布団の上では、寝乱れた姿の銀髪の少女が、土郎の服を掴んだまま、くうくうと寝息を立てている。

「あ、おはよう、桜。えへっと、俺は元気だ」

全身に寝汗とは違う嫌な汗をかきながら、土郎が口元した朝の挨拶と珍妙な返答は、どうやら今の桜には届かなかつたらしい。

「……」

微動だにせず、すう つと閉められた障子の向こうで、足音もなく居間に戻つていく桜の威圧感に、土郎は再び凍りついていた。

大慌てで身支度を済ませ、イリヤスフィールを起こした土郎が居間に入つてみると、すでに出来上がつた朝食がテーブルに並べられていた。

”お先に出かけます。藤村先生は、急ぎの用で来ないとのことです。それと……不潔です” という、丁寧な字で書かれた書き置きとともに。

盛大に溜息をつきながら座つた土郎の目の前には、毒々しい程真赤に染まつた味噌汁が置かれていた。

一目見て朝食を諦めた土郎は、当然のように用意されていなかつた弁当を手早く作り、イリヤスフィールとともに衛宮邸を後にしてしまった。

「なあ、イリヤ。今日から当分の間、俺がいない時は、藤村の家から出ないよにしてくれないか？」

登校前にイリヤスフィールを藤村邸へと送り届ける道すがら、土郎はイリヤスフィールに”お願い”をする。

「ふーん……つまんないけど、シロウがどうしてもつて言つながら、きいてあげるわ」

昨夜の出来事がまるで夢だつたのかと思つほど、イリヤスフィールは普段と変わらない様子で答える。それが、逆に土郎には痛々しく思えてならなかつた。

「ああ、そうしてくれると助かるよ。それじゃあ、出来るだけ早く帰つて来るから、大人しく待つてくれよな」

「うん、こいつらしさこ、シロコ」

藤村邸の門前で手を振るイリヤスフィールに応えながら、士郎は学園への通学路を急いだ。

通学路途中の交差点には、予想通り凜の姿があった。

「おはよう、衛門へん」

「おはよう、おせよひ、遠坂」

二つもどおりに挨拶を交わし、連れ立つて歩き出した士郎は、ふとある違和感に気がついた。今日も、組んでこないんだな……と。

「ん? どうかしたの?」

知らずに彼女の顔を覗き込んでいた士郎に対し、逆にグッと顔を近づけて凜が問いかけてくる。

「あ、いや、何でもないんだ! 何でもないから、気にしないでくれ、コノヤロウ!」

急にアップになつた彼女の顔にわたわたと慌てながら、珍妙な言い訳を口にする士郎の様子を見て、クスリと笑いながら凜が腕を組んできた。

「うん、その様子だと、それほど心配ないかな。あんたが変な罪悪感とか持つてないか、少し心配だったのよ」

「え？」

ジッヒ士郎の顔を見つめぬよつに囁いた凛の言葉で、士郎は内心  
ドキリとする。

「何でもないわ それより急ぎましょ、衛宮くん？」

そのまま凛に手を握られた瞬間に、士郎は学園の坂道を登つ  
ていった。

普段よりも若干遅れて到着した教室には、既にクラスメイトのほ  
とんどが揃っている。

「よひ、今朝も同伴出勤とは流石だねえ、『二人っ！』

そんな中、周囲を気にせずに、とんでもない揶揄を飛ばしてくる  
女傑がいる。

「美綴、お前なあ……」

「おはよひ！ わこます、美綴さん。朝の挨拶へりこは、あらんとな  
れつたほづが良いと思こますよ」

悪友からの揶揄を一切気せず、澄ました様子で着席する凛の隣で、  
ぐつたりとした士郎が席に着く。

「おはよひー、衛宮ー！」

と、同時に前の席に座っていた人物が、くるりとこひらに振り向き、“朝の笑顔のお手本”のよつたな顔で挨拶を投げかけてきた。

「あ、ああ、おはよう、一成……」

思わず昨日の”一成ご乱心”が頭をよぎった士郎は、顔を引き攣らせながら挨拶を返すが、一成はお構いなしに良い笑顔のまま、一冊の冊子を手渡してきた。

「どうだらうか？ 衛宮？」

文法的に様々なものが省かれたその問いかけを聞きながら、士郎は手渡された冊子に視線を落とす。

朝一番に、力強い達筆で”滝行”と書かれたパンフレットを手渡す友人に、俺はどう応えればよいのだろうと、士郎は思わず頭を抱えた。

「なんですか……」

「なに、心配は無用だぞ、衛宮。この荒行、貴様一人に背負わせるつもりは毛頭ない！ 及ばずながらこの俺も、貴様とともに滝に打たれるつもりだ！」

どこまでも乱心していく一成が、熱く滝行の素晴らしさを語つている中、朝のホームルーム開始の鐘が鳴り響いた。

「おっはよ～っ！ みんな今朝も元気かな～っ！ はい、柳洞くん、号令じつてみようー！」

珍しく、チャイムと同時に教室に入ってきた大河が、一成に号令をかけさせた後、ホームルームを始めた。

一通り出席を取り終えたところで、むふふんと笑みを零しながら、なにやらちらちらと教室のドアの方向を見る担任の、あからさまに拳動不審過ぎる行動に、クラス中がひきまくつてはいるのだが。

「それじゃあ、昨日いつたとおり、今日からこのクラスの仲間になる、転入生くんを紹介するわよ～！　さあ、はいってきなさいっ！」

大河の言葉に、そういえばそんなこと言つてたよなど、士郎は教室の入り口へ視線を向ける。

ガラリと開いた扉から、ポケットに手を入れたままゆっくりと入ってきたのは、身長160?にも満たないような体躯の男子生徒だった。

しかも　その容姿はどう見ても、この国の生まれではなく……

「なんどつ！　彼はドイツからこの冬木にやつてきた転入生くんなのだつ！　よし、君に自己紹介を許そつ！」

大河の大袈裟な説明通り、西洋人特有の白い肌に、輝く銀髪、そして……真赤な瞳。

「ボクの名前は、バジリウス・フォン・アインツベルンつていいます。どこぞの国では王様つちゅう意味や。まあ、長いし呼びにくいやうから、可愛く”バジルくん”つて呼んだつてな」

自身をアインツベルンと名乗った男子生徒の登場に、士郎はもちろん凛すらも、驚愕の表情で声がない。

もつとも、まつたく別の意味で、士郎と凛以外の生徒たちも度肝を

抜かれているのだが……

”銀髪でおかっぱ……”とか、”ぱつんかよ……”とか、”おかげでサラサラ……”等々、教室の至る所から、バジリウスの主にヘアスタイルをさした形容が飛び交っていた。

「二ホンの『ミックスとかアニメが大好きなんで、そういうのに詳しい人がおつたら、色々と教えてください」

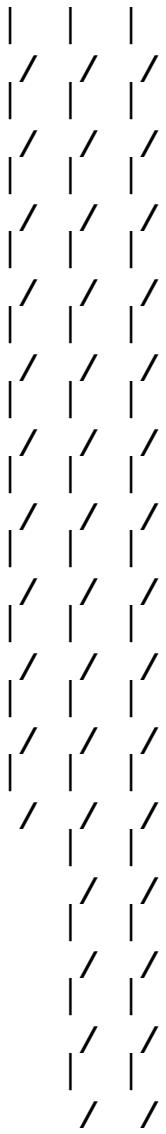
まったく教室内の空気を読まないまま、一方通行で行われた自己紹介は、誰の頭にも入らなかつた。

「じゃあ、バジルくんの席は、あの空いてるところね！」

大河が示した席、士郎からみて斜め前にあたるその席へ、バジリウスはゆっくりと歩いて行き、着席する間際にクルリと振り向くと、

「よろしくおしたつてやあ、HIIヤく～ん？」

ニヤリと零した笑みとともに、そんな言葉を投げかけた。



午前中の授業を終え、昼休みとなつた穂群原学園の屋上に、士郎は凜と連れ立つてやって來た。

「なんなのよ？ アイツ……」

見るからに不機嫌そうな表情のまま、そう呟く凜に、士郎は持参した弁当の一つを手渡しながら答えた。

「何つて、AINZ贝尔ンだろ？ アイツ自身が言つてたじゃないか。ほら、これ遠坂の弁当な」

「ほえ？ あ、ありがと……」

あまりにも普段通りのままの士郎に毒氣を抜かれ、尚且つ、不意打ちで手渡された弁当に、年頃の女の子としてはどうかと思つよつて返答をした凜は、幸せそうにお弁当を開けようとしたりした瞬間、ピタリとその手をとめた。

「だああ つ！ のんきにお弁当なんて食べてる場合じゃないでしょっ！ 昨夜のことだってアイツが！」

「なあ、遠坂」

どこまでもんきな士郎の様子に怒鳴りだした凜の言葉を遮り、士郎がボソリと話しだした。

「……なによ？」

「今はや、勘弁してくれないか？ お前の血通りだと思つし、看過出来る状況じゃないつてこともわかってる。でも……俺さ、思つてた以上に気持ちの整理がついてなかつたみたいだ。今、アイツがAINZ贝尔ンなんだってことを考えちまうと、こじが何処だらう

と関係なしに、アイツをブチのめしたくなる。だからや 「

表情と口調だけは平然としながら、剣呑な言葉を口にした士郎に、凛は睡然としながらも、内心では士郎らしいなと思つていた。

「もつ……しようがないわねえ……士郎の気持ちはわかつたけど、油断だけはしちゃダメよ！ アイツ、既にあなたの名前、知つてたんだから……」

「ああ、了解だ」

凛の口から、油断するなといつ言葉が出た途端、士郎は自分の口から出かかった言葉を飲み込み、言わぬが花だよなど、凛の指示に頷いてみせた。

「それにしても……一体何考えてるのかしら、わざわざ学園に転入してきて、わたしたちの前に姿を見せるなんて……目的がなんなか……そもそも、アイツ一人で……」

ゆつやく弁当に箸をつけ出した凛が、独り言をつぶやきながら、自分の思考の中へと埋没していく。

これも久しぶりだなと、士郎はその様子を横目に見ながら、じばりくはそつとしておくしかないかと、自身も昼食を進めだした。

「あつ！ 忘れてたつ！ ねえ、士郎。わたし今日からまた、あんたの家に泊まるから。荷物の準備とかしなくちゃいけないし、今日は先に帰つていいいわよ」

「ブツ……」

不意に囁かれた凛の言葉に、士郎は思わず弁当を吹き出していた。

放課後、帰宅した士郎は、自宅の前で呆然と立ち尽くす、黒い力ソックを纏った神父の姿をそのままに捉えていた。  
随分と長身の神父は、片手に持ったメモと衛富邸の表札を見比べながら、何やらぼんやりついている。

「あの……衛富邸に何か御用ですか？」

正直なところ、神父のカソック姿に良い思い出はないのだが、それでも自宅の前で困っているものを無理には出来ず、士郎は近づいて声を掛けた。

「おや？」口を血班とこうアナタはもしかして、ミスター・HIMIヤなのですか？」

士郎の声に振り向いた神父は、ニコニコと笑みを浮かべ、くいと細いメガネの位置を正すと、唐突にHIMIヤの名を出した。

「え？ ああ、俺はHIMIの家の衛富士郎でもんだけど」

「おお、コレは失礼しました。ワタシ、新しく冬木教会へと赴任し

てきました、サルヴァトーレ・ジュリアーニです。実は、ミス・ト  
オサカに書類をお渡ししたかつたのですが、お留守のようにして…  
…それで、もしかすると「ひらひらしてしゃるのではないかと」

相手が士郎であったと知り、早速自己紹介をし始めた神父に、士郎は些か面食らっていた。

威圧感のある体格に反する腰の低さ、眼鏡の奥の細い眼を、更に細めている笑顔。

この人の良さそうな神父は、まるで前任者の吉峰とは正反対だなど、内心苦笑するしかなかつた。

「そうですか、確かに遠坂はよく衛宮邸にくるんですけど……生憎、今日はまだ学園から帰つてしませんよ」

士郎が教室を出る時に、凛がまだ教室で綾子と話していたのを見ているのだ。

それに、おそらく今日は遠坂邸に一度戻つてから、一いつ日ひ来るのだろうから、なおさら遅くなるだらう。

そう予測した士郎は、このままあてもなく探し続けでは氣の毒だと、その顔をこの人の良さそうな神父に告げた。

「それはじき親切にありがとうございます。ミスター・ヒミヤは優しいかたなのです」

「いや、別にそんなことないですよ」

「」謙遜なさうとも……しかし、これも何かの縁でしょ。実はワタシ、ミスター・ヒミヤに謝罪させて頂きたいことがあるのです

不意に謝罪を申し出る神父に、土郎は訝しむ。そもそも、お互に初対面なのだから、謝られるようなことをされた筈がないではないかと。

「一体なんのことですか？俺には覚えがないんだけど？」

「申し訳ありません、ミスター・ヒミヤ。少しばかり説明のためにお時間を頂きたいのですが、よろしこですか？」

「はあ……まあ、俺はかまいませんよ。とりあえず、ヒミヤなんですから、家の中へどうぞ。お茶くらいになら出せますので」

土郎に心当たりはなかつたが、神父の言葉を無碍に切り捨てるのも心苦しい。少しの時間なら、構わないだろうと、土郎は神父を家に招いた。

生来、極一部の例外を除いて、他人を嫌つたり、疑つたりすることのない彼には、至極当然の成り行きだったのだろう。  
もしっこいこいこい、凛が居合わせたのなら、きっと怒鳴りつけていたのだろうが……しかも間の悪いことに、彼女は”つっかり”と忘れていたのだ。

”新しく赴任してきた神父には気をつけなさい”と、彼に伝えるべき言葉を。

「おお！ む招き頂き感謝します、ミスター・ヒミヤ。それでは、遠慮なく、おじゃまさせて頂きりますネ」

土郎の誘いに、満面の笑顔で喜ぶ神父を案内するよつて、玄関を開け、居間へと入っていく。

その背後に付き従う神父の顔から、張り付いていた笑みが消えていくことには気が付かず。

居間へ通したジュリアーニ神父を、テーブルの席へと座らせ、士郎はお茶の準備にかかりた。

「あの、ジュリアーニ神父は日本茶、大丈夫ですか？」

色素の薄いロングの茶髪に白い肌の色、細めた目のために瞳の色はわからないが、日本人にはない堀の深い顔立ちは、明らかに西洋系の人種だろう。

中には、日本茶を苦手とする人がいてもおかしくはないと思い、士郎は神父に確かめた。

「いえいえいえいえ、ミスター・エミヤ。そんなに、氣を使わないでくださいね。あ、でもワタシ、日本茶は大好きです」

『気さく過ぎる神父の物言いに、士郎は、前任者と足して割ればちよつどいいかもしないなど、心の中で苦笑いしていた。  
お客様用の湯呑みに、お客様用の少しだけ贅沢な茶葉を使って淹れたお茶は、胸をすくような良い香りを立てている。

お茶を手に居間へと戻った士郎は、ジュリアーニ神父の前に、湯呑みを置きながら、ふと疑問に思ったことを訊ねてみた。

「それにしても、よく知っていましたね？ 遠坂が衛宮邸によく来るってこと

自分のお茶をテーブルに置き、ジュリアーニ神父の正面へと座った士郎に、笑顔のままの神父の顔がすいつと迫ってきた。

「ミスター・エミヤ、あなたは自身の家が、『近所でどれほど有名なのか、認識を改められたほうがよろしいですね。』『近所の奥様達が仰るには……』昔から藤村さんちの娘さんが”とか、”一年ほど前から間桐さんちの娘さんが”とか、”ここ最近では銀髪の少女に、遠坂さんちの娘さんまで”等々……ミスター・エミヤの『自宅の噂を、それはそれは詳しく教えて下さいましたヨ』

「……そ、そうですか」

士郎自身、薄々気付いていたことではあるが、こうして面と向かって言わると、この家の在り方にについて、自分自身に疑問を投げかけそうになる。

ガクリと頭を垂れた士郎に、ジュリアーニ神父は、更に一言付け加えた。

「そういうえば……一ヶ月ほど前、このお屋敷に出入りされていたといふ、”金髪に碧眼の少女”は、もういらっしゃらないのですか？」

まるで別人ではないかと思えるほど重い声でたずねられたその言葉に、士郎は心臓を驚撃みにされた気がした。  
動悸が激しくなり、視界が狭まり、声も出せずに、顔すら上げることができない。

そんな士郎の様子を、ジュリアーニ神父の深いブルーの瞳が射抜いていた。

「その人は……もう、いないんです

歯を食いしばり、たつたそれだけの言葉を搾り出すだけで、全身に汗が吹き出していた。

「いけません、ミスター・ヒミヤ。お顔の色が真っ青ですよ？　どうか具合を悪くされたのでは？」

心配そうに訊ねるジュリアーニ神父に、大丈夫だと返す士郎は、しかし、誰が見ても普通の状態ではなかつた。

「ここのまま長居をしては、かえつてミスター・ヒミヤにじる迷惑をおかけするかもしません。今田は、これで失礼させていただきますね。お話は後日、ミスター・ヒミヤが体調を戻されてからとこうじで」

士郎を気遣い、居間を立ち去ろうとしたジュリアーニ神父が、くるりと振り返つた。

「もしよければ、一度教会で懺悔をなされてはいかがでしょうか？　あなたはその心を、なにか重い罪に囚われている。ワタシには、そんな気がしてならないのです、ミスター・ヒミヤ」

一言、そう言い残し、ジュリアーニ神父が立ち去つた後も、士郎は立ち上がることすら出来なかつた。  
夕焼けの真赤な日差しが差し込む居間で仰向けになり、士郎はたち去つた神父に問い合わせる。

「なら、ジュリアーニ神父。あなたの神は、どんな罪人でも救うのか？　もしそうだっていうのなら、今すぐこの世全ての人を救つてみせろよ」

神に祈るだけでこの世の人々が救われるといつのなら　その人生の全てを賭けて、ただ國の人々が幸せであるよつこと戦つた一人の少女が、あまりにも報われないじやないかと。

そして、いつも簡単に人の心が解つたようなことを言う、あの人の良さそうな神父を、士郎は何故か、好きになれないでいた。

## 一章「罪と罰」（後書き）

セイバールートアフターの場合、帰還モノでない限りは、肝心のセイバーがいません。

（当たり前ですが……）

その分、凛やイリヤ、桜たちに頑張つてもうしが無いのですが、色々と足りない要素はオリキャラで埋めるしかなくなつて、どんどんオリキャラが増え（ゝゝ）

## 三章「始まりの御三家」

……滑稽だな。語り部として、物語の主人公をこいつ言つのもアレだが 無様だとは思わないかね？

所詮、人には成し得ようもない、夢物語のよつた理想に縛られ、誰かを守るのだと、安い言葉を口にする。

しかも、後生大事に抱いたその理想すら自らのものではなく、誰から借り物ときて居る。

そんなことだから、ありもしない罪に怯え、些細な言葉にすら簡単に穿たれてしまう。

そら、私の言った通り、まさに愚か者ではないか。

こんな男のために……君が心を痛める必要など、断じてありはしない！

だからそろそろ、このようなくだらん話はやめにして……フウ、私を睨まないでくれないか。

ああ……君が望むのであれば さあ、物語の続きだ……

「SOLITUDE 第一話 - Einzber - 三章「始まりの御三家」

赤い太陽が、道行く人々の影をひとりわざと落とし始めた頃、大きなスーツケースとボストンバッグを両手に、衛宮邸へと向かう凛の姿があった。

穂群原学園の生徒諸君には、あまりお見せできないような表情をしながらではあるが……

「こんなことなら、士郎を連れてくれば良かつたんじゃない。わたししたことが、失敗したわね……」

ぱんぱんに膨れ上がったボストンバッグを、恨めしそうに睨みながら呟く凛の独り言に、正当性があるのかどうかは置いておこう。最上級のゴーストライナーであるサーヴァントにすら、荷物運びを命じた経験を持つ彼女の価値観を、今ここで論じることにあまり意味はないだろう。

ましてや、今彼女が想定した相手は士郎なのだ。その価値観に疑問を持てど、彼女に言う方が間違っているのかも知れない。

だがしかし……

「でもねえ……それだと、色々と見られちゃマズイものまで、見られる可能性だつてあるわけだし……」

相手が士郎であるからこそ、頼まなかつたのではなく、頼めなかつたという複雑な乙女心というものもあるのだ。

もつとも、荷物整理は自分で行い、その間士郎を待たせておいて、衛宮邸までの荷物運びを命じるという、あくまのよつた手段があるので、どうやらその手は見落としていたらしい。

恋するあくまは、意外と盲目であるのかも知れない。まあ、単に彼女の”うつかり”が発動しただけかも知れないが。

「ふう……お邪魔するわよ、士郎～、居るならちよつと手伝つて

ほしんだけど~」「

道すがら、荷物整理を士郎に頼み、自室で禁断のお約束が発動するシーンを妄想しながら歩いてきた凛は、ようやくたどり着いた衛宮邸の玄関を開けると、居間にむかって声を掛けた。

今回の逗留においても、彼女が自室にしようと企んでいる離れの洋間まで、この大荷物を運ぶのは御免被りたいなど考えた結果などが、期待した人物からの返事が無い。

玄関に士郎の靴があることを確認した凛は、おかしいなと思いつつも、とりあえず荷物を廊下へと置き、居間へ足を運んだ。

「ツ……？」

西田が差し込み、まるで赤一色に染め上げられたような居間の畳に寝転がり、痣の浮かぶ右腕で田元を隠す士郎の姿が凛の視界に飛び込んできた。

その瞬間、このまま彼が、この紅い世界へと消えてしまつ んな、理由のない不安と焦燥感に襲われた凛は、何かを考えるよりも先に体が勝手に行動していた。

「士郎……」

居間に寝転がった士郎の頭を、抱きかかえるように自らの膝にのせ、赤い髪を優しく梳きながら、慈愛に満ちた声で彼の名を口にする。

普段から己を魔術師として律する彼女とつて、それは信じられないほどに、心の奥底から湧き上がった感情の発露だった。  
行かないでと わたしの手の届かないところへ、一人で行つてしまわないでという、根拠のない喪失感が抑え切れず、どうしようもないほど彼に触れずにはいられなかつたのだ。

そして今、彼に触れたことで得られた、ここにいるのだといつ安心感が、彼女に穏やかな感情をもたらしている。

「……どうしたの？　あなたが泣くなんて……」

「遠坂、俺は……」

頭の下の温かな弾力と、眼前から掛けられる優しい声、今の凛がどれほど自分を気遣っているのか、士郎にもよくわかる。だからこそ、言えなかつた。神父の言葉に、この一ヶ月間封印してきた”彼女”との思い出が一気に溢れ出し、動くことも出来ずに涙していたことを。

その涙を拭おうとした腕に、一晩たつても消えない痣を見たことより一層”彼女”がもういないのだという現実を突きつけられたよう思ひ、涙を拭うことすらできなくなつたことを。

「無理に言わなくていいわ。あなたが落ち着くまで、じりじりしていくあげるから」

言葉をつまらせた士郎に、凛は言外の嘆きを聞いた気がした。

決して長い付き合いというわけではないが、一概に時間では推し量れないほど、密度の濃い日々をともに過ごした彼女には、薄々気づいていたことがある。

衛宮士郎は自分のために、泣かない、笑わない。そんな彼に、独り涙を流させるなんてことができるとすれば……やはり、居なくなつてしまつた”彼女”だけだろ。

ある意味、解りたくはなかつたが、解つてしまつたのだから仕方が無いと、凛は苦笑を浮かべながら、士郎の髪を梳ぐ。

「……すまん、それと、ありがと」

少しばかり甘えを含んだ謝罪と感謝の言葉を士郎が口にしたその時、玄関の引き戸がガラガラピシャンと盛大な音をたてた。間髪入れずに近づいてきた、トテトテという軽めの足音の主は、居間へと顔をだすなり大声をあげた。

「早く帰つて来るつて言つたのに、シロウつてば全然迎えに来ないじゃないつ！！」

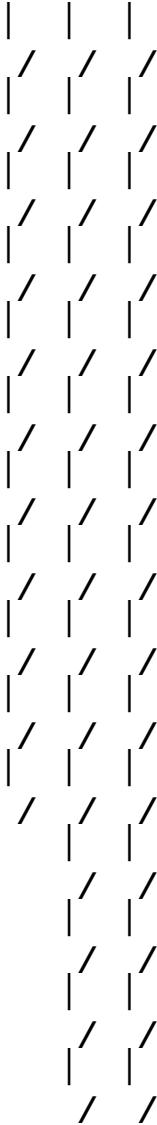
イリヤスフィールが居間の入り口で怒鳴る後ろから、おそらく同じタイミングで入つてきたのだろう、桜がひょいと顔を出した。

「先輩、今朝は変な誤解して、『めんなさい… わたしきつと、早とちり……を……』

と、そこまで言いかけて、居間の入り口を境界線に、その外側で固まる桜とイリヤスフィール、かたや内側で固まる士郎と凜。まるで、今朝の光景を再現したかのような状況に、士郎は頭を抱え、凜はあちゃ～と言いながらその手で顔を覆う。

「先輩も、遠坂先輩も……不潔ですっ！－！」

ビルビルと体を震わせていた桜の絶叫と共に、深山町の日は暮れていいく。



ぐつぐつとテーブルの上の鍋が、良い感じに焼き上がった音を奏でながら、衛宮邸夕食開始の合図を知らせていく。

「あの、先輩？ 先程は失礼なこと言つちやつて、すみませんでした」

「あ、いや、桜が謝ることなんてないぞ。誤解させちまつた、俺がいけなかつたんだから」

ポン酢を入れた取り皿を渡しながら、夕方の一件を謝る桜に、士郎は冷や汗を流す。

「早とちりしそぎなのよ、桜は。朝のことだって、いくら士郎でも、イリヤみたいなお子様に手を出すはず無いんだし、わたしだって、居間で士郎と何かするわけないじゃない」

じゃあ、居間じゃなければするんですね？ と、喉元まで出かけた言葉を飲み込んだのは、桜の懸命なる判断だろう。

昨夜、イリヤスフィールの身内に不幸があつたため、その連絡などで衛宮邸に泊まつたイリヤスフィールが、寂しさのあまり士郎と同衾した。

そのせいで、あまり眠れなかつた士郎は寝不足となり、帰宅後の居間で目眩をおこしてしまつた。

そこへ、たまたまやつて來た凛が士郎を介抱していた、という説明を凛が桜にしたのだが、その場に士郎が居合わせたため、桜はこの説明を受け入れるしか無かつたのだ。

”イリヤスフィールの身内の不幸”と凛が言つた以上、さらなる説

明を求めれば、必ず神秘に關わる内容がそこに含まれるだらう」とは容易に想像がつく。

それは、”魔術師ではないはず”の桜が、士郎の居る場で、聞いて良いものではないのだから。

もちろん、凛も桜もお互にそれを理解した上で、話を合わせたに過ぎず、納得しているわけではないのだが。

そんなことは知らず、テーブルを挟んで台本に書かれた台詞のよくな笑い声をあげる凛と桜の様子に、士郎の冷や汗はその量を増していく。

「失礼なこと言わないでほしいわ、リン。だつて……昨夜のシロウはとっても優しかったもの」

幼いその容貌にも関わらず、強烈な流し目で士郎を見つめながら、イリヤスフィールが偽造爆弾を投下する。

凛の”お子様”発言に対抗心を燃やした結果ではあるのだが、その最大の被爆者がどう考へても士郎だといつといふは、設計上のミスなのかもしねり。

「はいはい、そういうことは、もう少し胸をふくらませてから言つことね……まあ、本当にそんなことしてたら、今この場で捻じ切つてあげるわよ、衛宮くん」

”何を?”とは、恐ろしそぎて聞けない士郎が、とりあえず話題を変えようとしたのは、やむを得ないことだらう。

「……ところで、藤ねえはびついたんだ? 今朝も顔を出さなかつたし」

女性陣三者三様に”逃げたな”という視線を士郎へと飛ばすなか、

桜が代表して答えた。

「えつと、新しく赴任してこられたカミンスキー先生に、前任の葛木先生から引継ぎが出来ていらないらしくて。それで、そのお手伝いをされているそうです。当分の間忙しくなるから、衛宮邸には顔を出せないって、仰っていましたよ」

大河不在の説明をしながらも、鍋から皆の取り皿へと食材を取り分ける桜は、その合間に絶妙なタイミングで、自分のお茶碗へおかれりをよそう。

このあたり、涙ぐましい乙女の努力なのだが、哀しいかな、士郎にはバレバレだつたりするのだ。

そんな様子を見た凛が、クスリと小さく微笑んだ時、玄関から引き戸の開く音が聞こえてきた。

「あれ？ ねえ、士郎。誰か来たんじゃない？」

凛がそう訊ねる間にも、足音が廊下を居間へと近づいてくる。

「他人様の家に何も言わずに上がりこんで来るような知り合いは、<sup>ひとさま</sup>俺の知る限り、一人しかいない。どうやら、引継ぎが早く終わつたんじやないのか？」

ある意味相当ないわれようではあるが、大河の日頃の行いを知る者しかいないこの場においては、至極的を得た意見として受け入れられていた。

つまり、この場にいる全員が、次の瞬間には、居間の入り口から大河の陽気な声が響くのだろうと思っていたのだが

「こなんばんは、Hミヤくん。悪い思うたけど、勝手に上がらしても

「うつたで」

居間の入り口から顔を出し、声を掛けてきたのは、バジリウス・フォン・アインツベルンだった。

賑やかで穏やかな衛宮邸団欒の場に、突如現れた闖入者。その姿を目にした反応は、皆それぞれにバラバラだった。

凛は驚愕に口をあんぐりと開け、桜は事態が掴めずきょとんとしたまま相手を見つめ、イリヤスフィールは怪訝な表情で相手を睨み、士郎は

「テメエ……」

瞬間、なんとか押さえ込んでいた怒りを、今まさに爆発させようとしていた。

そして、両の拳を握りしめ、いざ飛びかかるとした瞬間、その腕を掴まれた。

「士郎」

燃え上がりかけた怒りの炎を凍りつかせるような声と、きつく掴まれた腕に、思わず士郎はその人物へと視線を投げる。

そこには、いちばんやくこの事態に対する対処方を模索した凛が、小さく首を横に振り、強い意志と意図をその眼差しにのせていた。

今は感情に任せて怒りを爆発させて良い状況ではない、まわりをよくみない」と、その瞳が告げている。

確かにと、士郎は冷水を浴びせられた心境で、思考を巡らす。

夕刻から桜が一緒だつたために、未だバジリウスのことをイリヤス

フィールに話していないのだ。

しかも、今この場で事を長引かせれば、桜に聞かせてはならない言葉が飛び出す可能性が非常に高い。

それだけは、断じて避けねばならないと、士郎は奥歯を噛み締めながら、己が怒りを飲み込んだ。

「確かに……パシリウスくんだったかしら？　いきなり、他人様のお宅に上がりこむなんて、非常識にも程があると思わないかしら？」

もつとも、凛にしたところで冷静に働かせたのは思考までであり、相手に対する怒りを完全には抑えきれなかつたのは、この言葉がよく表している。

「誰がパシリやつ！　ボクの名前はバ・ジ・リ・ウ・スッ！　だいたい何やねん、パシリウスつて。」ボク、いつもみなさんのお使いに、いかせてもらります”みたいな名前、誰が好き好んでつけるかあ！」

「…………シロウ、なんなの？　コイツ？」

凛の挑発に、バジリウスが返した必要以上の反応は綺麗サッパリとスルーされ、表情を消したイリヤスフィールが、その言葉に深い疑念をのせて聞いてきた。

「ああ、コイツは今日俺達のクラスに入つて來た転人生で、その……可哀想なヤツなんだ」

「そりだつたんですか……あの、色々と大変かもしれないんですけど、頑張つてくださいね」

咄嗟に作った笑顔で答えた士郎の説明に、桜が哀れむような眼差しで追い打ちをかける。作為が無いだけに、この反応が一番堪えるモノだった。

「待つたれやつ！ 何やねん、可哀想つて！ そこのアンタも、何、可哀想なヤツを見る目で見とんねんつー！ 心の弱いヤツやつたら首括つとるといじやがわつー！」

「あー、わかつたから。俺に用事があつたんだろう？ 見ての通り、夕飯の最中だからな。話なら外で聞く」

地団駄を踏み憤慨するバジリウスへと近づいた士郎は、皆に背を向け、その視線に怒氣を孕ませる。

このままコイツを外へ連れ出し、叩きのめして目的を聞き出せば良いと、士郎がそう考えた瞬間、バジリウスが予想外の言葉を口にしてしまった。

「アホぬかせ、なんでわざわざ外に出なアカンねん。ボクは、イリヤ姉ちゃんを迎えてきたんやで。はじめまして、イリヤ姉ちゃん！ ボクの名前はバジリウス・フォン・アインツベルン。弟やし、可愛く”バジル”って呼んだつてな」

「ばつ……か、ヤロウツー！」

「ラヘラと笑いながら吐かれた言葉の内容も承服出来なければ、コイツがイリヤスフィールを姉と呼ぶことも我慢ならない。ましてや、桜の前でソレを口にしたことが許せない。士郎の自制は一瞬で臨界へと達し、バジリウスの胸ぐらを掴んだまま、その体を壁へと押し付けた。

「せ、先輩つ……」

「土郎つ……落ち着きなさいつ……」

これまでも、兄であつた慎一に対し、士郎がその怒りを見せたことはあつたし、桜自身もそれをしての当たりにしたこともある。だが、度し難い程の怒りをあらわにした、今の士郎の形相に、桜は顔色を失くし、恐怖に体をすくませていた。

その様子を目にした凜が、最悪の展開を危惧し、士郎を諫める。そんな一人の叫びに理性を取り戻した士郎は、ギリツという音が居間に響くほど歯を噛み締め、今この現状で最優先すべき人物へと振り返った。

「そう……あなたが、セラとリズを殺したのね……」

そこには、嗤い顔のまま涙を流し、ふらりと立ち上がったイリヤスフィールが、全身の魔術刻印を煌めかせていた。

「ツ？！ イリヤ ツ！！」

俺が守ると誓つたはずの笑顔が、憎悪と狂気に歪むさまに、士郎は掴んでいたバジリウスの胸ぐらから手を離し、夢中でイリヤスフィールを抱きしめた。

「離して、シロウツ！！ 私、コイツを許さないつ！！」

「離さないつ！ 離すもんかっ！！ 俺が守るって誓つたのは、イリヤのそんな顔じゃないつ！！ なあ、イリヤ、後生だから……お願いだから……俺に任せてくれないか？」

腕の中で叫ぶイリヤスフィールをきつく抱きしめ、彼女にこんな顔をさせてしまった己の不甲斐なさを一人の従者に詫びながら、それでも士郎は懇願した。

この少女の小さな手を、一度と血に染めさせはしない。それは、この少女の笑顔を守るための絶対条件なのだと。だから、どうしても血を流す必要があるといつのなら、その十字架は自分が背負うと覚悟して。

そして、今この場に居るもう一人の憂慮すべき人物に、まだ今ならば、言い訳が出来るかも知れないと。

これ以上、致命的な何かを、桜に見せてはいけない、聞かせてはいけないと、士郎はイリヤスフィールに懇願した。

「なんやねん、いきなり首絞められたか思うたら、イリヤ姉ちゃんは泣き出すし……訳わからんわ。だいたい、最初っからおかしい思ってたんや」

そんな土郎の願いを嘲笑うかのよつて、言葉は紡がれて行き

「なんで始まりの御三家の魔術師が全員揃うて、聖杯戦争に勝ち残ったエミヤの家で、仲良しひ飯食つとるねん。ありえへんやろ、こんな状況」

覆水が盆に返らぬように、一度吐き出されてしまった言葉はもう、無かつた事になど、できなはしない。

静まり返った居間の様子を、衛宮邸の庭に咲く桜の木の枝から、ジツと見つめる鼻がいることに、誰も気づきはしなかった。

—————

かつて 起きてしまったことは元に戻せない、そんなおかしなことを望んではいけないと、声高に叫んだ少年は今、自らが口にしたその言葉の重さを実感していた。

少年にとって、その少女は日常の象徴的存在であり、二ヶ月前の戦いにおいても、それを守ることができたのだと、少年は密かに誇らしく思っていた。

そして彼は今、オマエの認識は間違っているぞと、全否定の言葉を突きつけられている。

「始まりの御三家が全員？……何言つてんだ、だつて桜は」

そんなことはあり得ない。彼女は、確かに魔導の一族に連なるものではあるが、一族の血は薄れ、彼女自身は魔術回路すら持たず、家門の秘伝を知らされずに育つたはずだ。

その彼女が、始まりの御三家の一角、マキリの魔術師であろうはずがない。自分自身にそう言い聞かせ、士郎は桜へと視線を向けた。

「わ、わたし……」

バジリウスの言葉を引き金にした日常の崩壊は、既にこの時点で取り返しがつかない。

仮に、桜が魔術師ではなかつたとしても、神秘の秘匿に抵触するほど、彼女を巻き込んでしまっているのだ。

何より、”桜は魔術師じゃない”という士郎の言葉 자체が、”魔術師”的存在を肯定している。

「ねえ、衛宮くん……あなたの疑問を解いてあげるわ。いいわね？」  
桜？

「はい……」

全てが手遅れだと判断し、俯く桜に一言念を押した凛は、大きく息を吐きだし、決定的な言葉を口にした。

「桜の旧姓は、遠坂。遠坂家の次女として生まれ、幼い頃に間桐へと養子に行つた遠坂桜なの。当然、私と同程度の魔術回路を持つているし、魔術師としての才能もあるわ」

告げられた言葉に、ただ耐えるようにして震える桜の姿と、その横で自身の言葉に口の端を噛む凜の姿が、その信憑性を物語ついた。

そんな一人の姿を見せられたからこそ、逆に士郎は冷静な思考を取り戻すことができたのかも知れない。

いいかい士郎、女の子は泣かせちゃいけないよ。不意に思い出された養父の口癖に、士郎は心の中で当然だと胸を張る。

「なあ、桜」

「はい……」

士郎の呼びかけに、ビクッと大きく肩を震わせた桜は、まるで判決を待つ罪人のように、言こと渡されるであらう処断の言葉に身構える。

自分はずっとこの人を欺いてきたのだからと、かろうじて返答の声は出たものの、その顔を上げることすらできないでいる。

「後でちやんと話そう。だから、今は一言だけ言つや」

「はい……」

だから桜は気が付かなかつた。彼女を見る土郎の目が、いつもどおり大切な家族を見つめるものだといつこと。

「明日の朝飯、お前に任せたからな」

「ツ？！」

土郎から掛けられた言葉は……桜が予期した、処断の言葉などではなく、今まで日常の光景の中、幾度と無く交わされた、何のへんてつもない小さな約束だつた。

そんな、他人にとつては約束とすら呼べないほど、よくある日常の言葉に、込められた想いがどれほどものなのか。

思わず顔を上げた桜は、いつもと変わらぬ土郎の優しい微笑を見たことで、ようやく気づいた。

この人は、こんな私ですら許してくれるといつのだろうか？ 胸をしめる罪悪感と、わずかに灯つた淡い期待に握りしめた掌を、隣からすっと包むように温かな手が差し伸べられた。

「姉さん……」

「大丈夫よ、桜。あなたがわたしの言葉を信じなくてもかまわない。けど、あなたを信じた土郎の言葉は信じなさい」

十年以上の時を超えて、再び繋がれた姉妹の手に、桜の目からあふれた涙が零れ落ちた。

本来ならば、始まりの御三家として引き離された彼女たちには、一度とは呼べないはずの呼び名とともに。

桜と凜の様子に、一つ息をついた土郎は、「この気持ちを切り替え、くしゃりとイリヤスフイールの頭を軽く撫でると、任せると一つ咳いた。

「わっしの、コタゴタは、もうええんか？」

居間の壁に背を預け、今までつまらなそうに様子をうかがっていたバジリウスが、ついと桜のほうを指して訊ねる。

「ああ、これで気にすみないと無く、お前をブチのめしてやれるぞ」

「それやー、この家に来てからずっと気になつとつたんやけどな。エミヤくん、なんでそんなに怒つてるねん？ ボク、なんか怒らせること、してしまったんか？」

改めて怒氣をのせた視線を向ける土郎に、バジリウスはぴつと指をさし、真剣な面持ちで訊ねる。  
もっとも、バジリウスの口調と容貌が、思い切り逆効果を助長しているのだが……

「テメエ……ふざけるのも、大概にしろー。」

「ふざけるも何も、そつちが怒つてる理由がわからん這つてることないせえっちゅうねんつー。」

お互に睨み合い、対峙したまま、緊張感が居間を支配する。そんな中、静寂を破ったのは凜の声だった。

「ねえ、一つだけ確認させてもらいたいんだけど。あなたがアインツベルンだって言つなら、イリヤの従者を殺した目的は何？ さつきイリヤを連れて帰るとか言つてたけど、大切な従者を殺されて、素直に従うはずなんて無いじゃない」

「はあ？ ちょっと待てや。トオサカのお姉ちゃん、あんた何言ってるねん？ ボク、誰も殺してへんがな」

まさに青天の霹靂だと言わんばかりの反応で、凜の問いかけに答えるバジリウス。

「今更とぼけるつもりかっ？！ セラトリズを手に掛けたのが、アインツベルンだってことはわかっているんだ！」

「せやから、ちょっと待てって、言ひとるやないかっ！ なあ、トオサカのお姉ちゃん。それ、いつの話や？」

彼を犯人と決めつけた士郎の言葉に一喝しつつ、バジリウスはようやくお互いの認識がズレていた原因にたどり着いた。

「昨日の夜、たぶん……午後九時から十時の間よ」

凜が答える前に、士郎の横に佇むイリヤスフィールがポツリと答える。

「昨日の夜、九時から十時……その時間やつたら、ホテルの部屋でアニメ見てたな。これがまた、死神になつた主人公が、悪い奴らと

闘つていいくねんけどな。そんなに、「うつつかっこええキャラが出てくるんや」

自身のアリバイ証明もそこそこに、バジリウスは見ていたアニメに出てきたキャラクターの素晴らしさを説明していく。

やれ”関西弁がクール”だの、”やっぱりこの髪型が最高”だの、もはや脱線とすら言えないほど明後日の方向へと話を進めながら。

「ああ、そんなことはどうでも良いから。ねえ、パシリウス。あなたが泊まっているホテルで、利用履歴を確認させてもいいわよね？」

「……人がこれだけ熱心に解説してると、”そんなこと”って言うなや。結構、傷付くで？ それからパシリウスって言つてるやないかああつ！！」

バジリウスの叫びを無視した凛は、手早く彼が宿泊しているホテルへと連絡を取り、その利用履歴を確認するべく手配を開始した。

数分後、凛が手にした情報は、セラとリーゼリットの殺害時刻に、バジリウスが間違いなく新都のホテルに居たという事実を証明していた。

居間の時計が午後八時をさした現在、一同は仕切りなおしとばかりに、テーブルを囲み、着席している。

「な～んか、ボク……ものすごく、悲しいわ。初対面の時から、そんな外道やとおもわれたやなんて……傷つくなあ」

「ハリ……」

頬杖をつきながら、口を尖らせて拗ねるバジリウスの言葉に、士郎は肩身を狭くする。

「ボクやないって言うでも、HIIヤくん……全然聞いてくれへんし。はあ……コレ、名誉毀損で出たとこ出たら、たたかえるんとちがうやうか……」

「クッ……その、すまないと思ってる。昨日の今日で、タイミングよくアインツベルンを名乗るお前が現れたものだから、てっきり……」

士郎の謝罪に、バジリウスの居住まいはどんどんと横柄になつていくのだが、凛とイリヤスフィールの視線は、未だ厳しいものだった。

「勘違いしないでほしいわね。わたしの情報が証明したのは、昨夜の九時から十時の間、あなたがホテルに居たということだけよ。あなたが犯人じゃないとは、証明されてないわ」

「それはちょっと意地が悪いんとちやう？　トオサカのお姉ちゃん。そんなこと証明しようと思うたら、ボクが犯人や無いつていう証拠を逐一拾い集めなアカンねんで。それ”悪魔の証明”みたいなもんやがな」

バジリウスの立場を明確にしようとした凛の追求に、彼はニヤリと笑みを零しながら反論する。

「だから、一度仕切りなおしましちゃうことになったんでしょうが。

それを、あんたがぐちぐちと愚痴りまくるから、いけないのよつー。」

「落ち着けって、遠坂。バジリウスを最初から疑つて掛けたのは事実なんだし、それは悪かつたと思つてる。その上で、改めて聞くけど……バジリウス、お前が冬木に来た目的は何なんだ？」

バジリウスの零した笑みに、凛の機嫌が急降下しだしたことを見取った土郎は、場を制して本題を突きつけた。

それを受け、バジリウスの表情もまた、真剣なものへと豹変する。

「ああ、よつやく本題に入れるなあ。ええか、ボクがこの冬木へ来た目的は三つや。まず一つ目、イリヤ姉ちゃんを連れ帰ること。次に二つ目、第四次においてキリツグが持ちだした聖遺物アーティファクトを回収すること。最後に三つ目、キリツグが第四次で使用した魔術礼装ミステック・コードを入手すること。以上や」

「返答するが、まず一つ目だが、イリヤは渡さない。次に二つ目の聖遺物アーティファクトだが、本来の持ち主へ返却した。だから回収なんて出来ない。最後の魔術礼装ミステック・コードが何かは知らないが、切嗣のものをくれてやる謂れはない。以上だ」

まさに即答……バジリウスが明かした全ての要望を、土郎はその場で切つて捨てた。

その返答のあまりの速さに、桜や凛、イリヤスフィールはもうろん、当事者であるバジリウスですら、あんぐりと口を開けたままだ。

「速つ！ つていうか、もうちょっと考えてくれば、ええんとちやうか？ これやどボク、立場無いやん」

「いくら考えて、俺の意見は変わらない。二つ目はそもそも不可

能だし、二つ目もその可能性が高い。イリヤのことに關しては、俺が守ると誓った俺の家族だ。今更、手を離すなんてあり得ない。そもそも……」そんな女の子に一族の悲願とやらを押し付けておいて、それを良しとするような奴等のところに、イリヤを床らせはしない

「シロウ……」

「これがバジリウスの要望を、土郎はがんとしてはねのける。  
「言つておくナゾ、二つなつた衛門くには、梃子でも動かないわよ。  
れて、どうするつもりなのかしら?」

予想通り、膠着状態に陥つた交渉に、凛は警戒心を高めていく。  
そもそも、最初から言葉だけで済むような内容ではないのだから、  
次に予想される相手の動きは、必ずと限られるだろう。

「どうする言われてもなあ。まあ、納得してもらひつまで、誠意を取  
くすんが筋やろ?」

「「「「は?」「「「

「」の場にいたバジリウス以外の全員が、荒事になると予想したの  
だが……彼の返答はその斜め上を行つていた。

「何が”は?”やねん。頼んでもアカン言われたら、こいつの誠意  
を見てもろて、納得してもらひつまで頼むんが、王道とかじゃつか?」

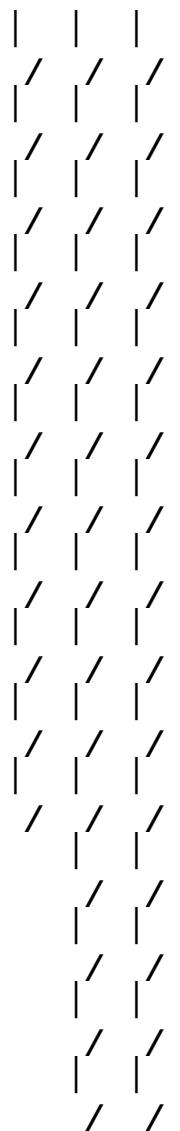
「あ、いや……それは、その通りだ。その通りなんだが……」

そんな一般社会の正論を、魔術師の交渉事に持ち出すなど、誰も

予想しないだろ？。土郎ですら、あっけに取られたのはやむを得ないのかもしれない。

「ボクはそういう王道が大好きやねん。マンガでも何でも、王道が一番かつこええしな。そういうわけやから、ヒミヤくんには納得してもらえるまで、つきまとわせてもらつで。まあ、今日はそれを言いに来ただけやし、これで帰らせてもらつわ。ほな、また明日」

理解を超えた理屈を残してさつさと帰宅してしまったバジリウスを、その場にいる全員が呆然と見送るしかなかつた。



冬木市を流れる未遠川を隔て、その東側に位置する新都の中央近くに、数年前に再建されたばかりの冬木ハイアットホテルがある。そのプレジデンシャルスイートを長期契約で借りているのが、今まさに部屋のドアを開けようとしている、バジリウス・フォン・アインツベルンである。

「お帰りなさいませ、バジリウス様」

カチャリとドアを開けた瞬間、彼の帰還を労う声が掛けられた。まるで、主人の帰宅を迎えるメイドのように、謙った言葉遣いと態度で彼を迎えたのは、ヴィクトリア調のアンティークなメイド

服を纏い、頭にはキャップ状の大きなホワイトブリムをつけた、二人の少女だった。

「ただいま」

彼女たちに視線を向けないまま、バジリウスはリビングのソファへ腰をおろす。

「なあ、ヴォークリンデ、ヴェルグンデ。お前ら昨日の夜九時頃、どこにおった?」

テレビのリモコンを操作しながら、バジリウスは無造作に問いかける。

「恐れながら、バジリウス様。私とわたしヴェルグ<sup>ン</sup>デはその時刻、この冬木市の調査を行なつておりました」

全く同じ外見をもつ二人の少女のうち、ヴォークリン<sup>ン</sup>デといふ名の少女が、よどみなく答える。

「ふうん、そうか。その時、何かボクに報告せなアカンこととか、無かつたか?」

「と、申しますと?」

パチパチとチャンネルを切り替えながら、バジリウスが更に問い合わせた言葉に、ヴォークリン<sup>ン</sup>デが質問で返した。

「例えば、ボクの命令無視してしまいましたあ みたいなことは、なかつたやうなつて聞いてるねん」

プツンとテレビの電源を落とし、バジリウスはその視線を彼女たちへと向け、威厳に満ちた眼差しで見据える。

「それは、”バジリウス様のご命令無しに、イリヤスフイール様とシロウ・ヒリヤへの手出しを禁ずる”ことにござり命令でしょうか?」

「そや、それや!」

ヴェルグンデが復唱確認したバジリウスの命令に、彼は大きく頷く。

「はい、バジリウス様。私もヴォーカーリングわたしも、ご命令に背く行動はいたしておりません」

「……そうか、それやつたら、ええねんけどな。ほな、風呂はいつてぐるわ」

数秒の間、ジッと二人の少女を見据えたバジリウスは、フツと息を吐き、表情を緩めた。

おもむろにソファーアを立ち上がり、リビングを横切つてバスルームへと歩むバジリウスに、ヴォーカーリングデが声を掛ける。

「恐れながら、バジリウス様。私からもう確認させて頂きたいことがあります」

「なんや」

「はい、よもやアハト様からのご命令、お忘れになられたとは思いませんが……バジリウス様の手法では、目的完遂までに些か時間が

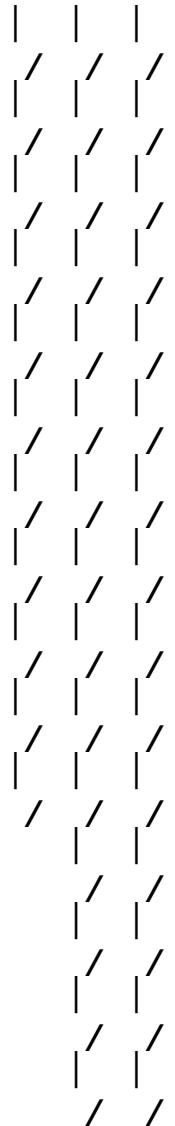
掛かり過ぎるのでは？『ご自身に残されたお時間があまりない』ということを……』

感情の欠片もうかがわせない、事務的な口調で告げられたヴォーグリン『テの言葉を、バジリウスが苛立ちを露にして遮った。

「わかつとるつ……！……聞きたいことは、それだけか？」

「はい……」

諫言を断ち、一瞥をくれてからバスルームへと消えたバジリウスの後ろ姿を、一人の少女は眉ひとつ動かさずに見つめていた。



バジリウスがハイアットホテルへ帰着したのとほぼ同時刻、ライトップされた冬木大橋を臨む海浜公園に、一人の女性の姿があつた。

豊かな長い銀髪を後ろで束ね、透き通るほど白い肌に、青い瞳を持つこの妙齢の女性の名は、アンナ・カミンスキー。

先日、穂群原学園に赴任してきた教師である。

ロシア系の生まれである彼女の容貌とそのスタイルから、赴任早々、授業を担当したクラスの男子生徒に絶大な人気を博していた。何しろ、つい先程まで連れ立つて歩いていた同僚教師である藤村大

河が、初めて彼女を目の当たりにした瞬間、その胸元を見て呪詛の言葉を吐きながら、気絶したという噂まであるのだ。

「来たか……」

学園からの帰路、深山町に自宅のある大河と別れ、この海浜公園へと独り立ち寄った彼女のモトヘ、夜の闇から舞い降りた梟が近づいてきた。

差し出した彼女の腕へ、音もなく舞い降りた梟は、何かを囁くような仕草を取ると、直後、飛沫となつて跡形もなく消えてしまった。

「ほう、アインツベルンが動き出したか。思ったより行動が速いが……まあ、よからう

小さく笑いを零したカミンスキーは、人影のない海浜公園にヒールの音を響かせながら、冬木大橋へと歩みを進めた。  
この季節の冬木大橋には、海側からの強い川風が吹きつけるため、徒歩でこれを渡ろうとする人は殆どいない。

ましてや、午後九時を過ぎたこの時間なら、尚更である。

だが　新都側の拠点へと向かうため、冬木大橋を渡り始めたカミンスキーの視線の先に、新都側からこの橋を歩いてくる人物の姿が映つた。

お互の歩みがその距離を縮めるに従い、相手がかなり長身の男性で、黒いカソックを身に纏つていることが見て取れた。

「教会の狗か……」

カミンスキーが小さく呟いた言葉が川風に攪われ消え失せる頃、丁度大橋の中央付近で一人がすれ違う。

「このよつな時間の独り歩きは、あまつおすすめできません。特に、あなたのようにお美しい女性には」

彼女がその視界にとらえてから、一度も消えない笑顔で、黒衣の神父がすれ違いざまに話しかけてきた。

「お気遣いには感謝するが……無用な心配だ、と言わせてもりおつか」

「いえいえ、本当に危ないんですよ？　この街。例え……アナタのよつな方でもネ」

やう言つて黒衣の神父は、笑顔のまま闇へと姿を消し去つた。

### 三章「始まりの御三家」（後書き）

穂群原学園での教師としての藤ねえの評価ってどうなんだろう?  
といつしじょうもないことだが気になつて、中々筆が進まなかつた三章。  
あれだけむちやくちやなのに担任もつつて、何気に評価高いのだろ  
か…

## 四章「ホムンクルス」

フム……前回の話、君にとつてはある意味、貴重なものであったのかもしれんな。

見方によつては、ある姉妹が救われたかのように思えるのだから、まあ、仕方あるまい。

だが 私に言わせれば、度し難いほどに醜悪だよ。

この男は、まるで馬鹿の一つ覚えのように、誰かを救うと口にするが、その実、何を何から救うのかすら理解していない。

当然だ、そもそもこの男自身が、救いといつもの理解出来ていなければならぬ。

そんな男が差し伸べた手を掴まされても、それは、その場しのぎの一時的な救済に過ぎん。

これでは、救われたほうが迷惑というのだ。

君はもう理解しているだろうが……この物語は、そんな済わないものの話なのだ。

それで良いといつのならば わあ、物語を続けようではないか……

「SOLITUDE」第一話 - Einzbern - 四章「ホムンクルス」

午前六時、朝の眩しい日差しが差し込む衛宮邸の廊下を、身支度を済ませた士郎が居間へと向かっている。

近づくにつれ聞こえてくる、包丁が規則正しくまな板を叩く音に、予想通りの人物が朝食の準備をしていることを知り、小さく笑みを零す。

昨夜の約束を覚えていてくれたんだなど、そのことに感謝しつつ、士郎はこちらに背を向けて台所に立つ桜へと声を掛けた。

「おはよう、桜。今朝は随分と早いんだな」

「あつ？！ 先輩、おはよひびきります」

長い髪をふわっと揺らし振り返った桜は、手に持った包丁を止め、朝の挨拶を返す。

昨夜、凛の提案から、桜もそしてイリヤスフィールもが衛宮邸に宿泊した。

居間の隣室に布団を並べ、見た目だけは女の子同士のパジャマパーティーを開催したのだ。

もつとも、その話の内容は、とてもパーティーなどと呼べるような代物では無かつたのだが、それを知るすべは士郎にはない。ただ、自身の出生の秘密を士郎に知られた桜が、いつもと変わらず台所に立っていたことで、士郎は一先ず安心を覚えた。

「もう殆ど出来上がりだな。何か手伝えること、あるか？」

「え～っと、それじゃあ……お弁当のおかずを、お任せしても良いですか？」

「よしこー、任された！」

グイツと腕まくりをしながら、愛用のエプロンを身につけ、手早く下揃えをしたアスパラのベーコン巻きを、火に掛けたフライパンで炒めていく。

「ごめんな、桜。俺が魔術師だってこと、お前に隠してさ」

フライパンを振る手を休めず、何気ない様子で士郎が口にした謝罪の言葉に、桜は啞然として、料理の手を止めてしまった。

「せ、先輩……」

もし謝ると言いつのなら、むしろ、色々なことを隠したまま、この人を欺き、嘘をついてきた自分ではないかと。  
それなのに……謝る必要のないことを詫びてくれる人のお人好しが、涙が出そうなほどに愛おしい……

だから、言わなくちゃいけないことを、きちんとと言おうと桜は決心した。ただし……深く深く封じ込めた、最奥の闇には田を向けずに。

「わたしも……先輩に沢山隠し事をしてきました。本当はわたし、先輩が魔術師だつて知っていたんです。聖杯戦争のこと、サーヴァントのことも……でも、言えませんでした。言つてしまつたら、もうこのお家に来れなくなる、先輩の傍にいれなくなるつてわかつていたから……それが、怖くて、怖くて……ごめんなさい、先輩。許して頂けるとは思つていません。でも……」

ぱろぱろと大粒の涙を零す桜の独白を黙つて聞いていた士郎が、エプロンの端でそつと桜の頬を拭う。

「それじゃあ、お互い様つてことにしよう。俺も、桜も、お互い隠

し事をしてたんだから、おあこじひとでここじゃないか

「せん、ぱー……」

優しい笑顔で、そんなことを言わないでトセこと、桜はぎゅっとエプロンの裾を握りしめた。

甘えてしまいたくなる、このまま、この人の許しを受け入れてしまいたくなる自分が、桜には許せなかつた。

「あっ！ それから、一つだけ言つとくけどな、桜が今言つてた、この家に来れなくなるとか、俺の傍にいれなくなるつてのは、間違つてるからな！ 俺、桜にこの家の鍵を渡した時に言つたよな？ ”自分の家だと思って、好きに使つてくれ”つて。あの時から、もうこの家は桜の家でもあるんだぞ。だから、勝手にこの家から自分の居場所を無くすようなことを言わないでくれ。別に桜が魔術師だろうが何だらうが、そんなことばざりでもいいけど、そこだけはずれないからな！」

一転、キッと表情をきつくした土郎の言葉が、再び桜の涙腺を崩壊させてしまつた。

魔術師の家門に生まれたが故に、親に捨てられ、家を追われた自分に、この人は、魔術師であることなど問題にもせず、この家の居場所を優先してくれる。

知つてしまつたこんなにも優しい温もりを手放したくないと、桜は止まらない涙を拭おうとした。

その涙で霞んだ視界の中、桜は田の前にいる土郎の背後に、ふらふらと揺れながら、もの凄い田付きでしきりくと近づいてくる凜の姿を目にした。

いや、田にしてしまつた……

「うへへ……わわわ～」

「おひ、遠坂、起きてきたんカハツ……」

冷蔵庫を開けながら、あくまのような声を出す凛べと、士郎が振り向こうとした瞬間、桜の両手が士郎の首をぐりつと捻った。

「ダ、ダメですっ、先輩っ！… 今、振り向いたやダメエエー！」

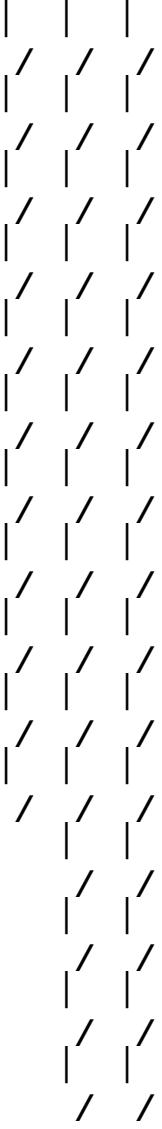
ギュッと目を瞑り、必死で士郎の首を自分の方向へと固定する桜の絶叫は、ある意味仕方のないものだった。

なぜなら、未だ寝ぼけたままコクコクとミルクを飲む凛のネコ柄パジャマは、胸元が全開状態だったのだから。

もつとも 人間の首といつものは、自分の意思に反した急激過ぎる稼働に、耐えられるようには設計されていないのも事実である。

「サクサク……シロウを振り向かせたい気持ちは、私にもよく解かるわ。でも、物理的にやつやつのは、どうかと思つの……」

居間へと入ってきたイリヤスフィールの声に、よつやく桜が目を開いた時、目の前で士郎が白皿を剥いていた。



「どこか間の抜けた調子で鳴り響く、午前中の授業終了をしらせるチャイムとともに、士郎は凛と屋上へ来ていた。

もちろん、昼食を取るためであるが、教室では食べれない理由もある。

元々、士郎が作る弁当は、その腕前を知る飢えたクラスメートにとって、格好的となつていたため、以前から教室で弁当をあけることはなかつた。

加えて、凛の弁当を士郎が作つているために、女子の一部からはからかわれ、男子からは殺氣の籠つた視線を突きつけられるのだから、落ち着いて食べるこゝとなど出来るはずがない。

本日も、士郎お手製の弁当を二つ持参して、屋上へと来ているのが……先程から、士郎の隣に座つている凛の機嫌が、日に見えて急降下しているのだ。

もつとも、その原因是士郎にも簡単に予測がついた。

その最大の原因は、今日の前にいるコイツの存在だらうなど、小さく溜め息をつく。

「おおおおっ?! なんや、トオサカのお姉ちゃん、昼飯はエミヤくんに作らせてるんかいな?」

士郎と凛が屋上についた直後、どこからとも無くわいて出たバジリウスが、焼きそばロールにかじりつきながら感嘆の声を上げる。うこと祈るばかりであつた。

「……」

「しつかし、ええなあ。手作り弁当を一人で仲良いいぢやいぢや食

べるんやろ？ アレか？ やつぱり、あ～～んとか、やつてまうんか？ うわっ、言つてるこいつちが、恥ずかしなつてきたわ！」

「うひ セーフ！」

バジリウスが好奇心いっぱいの眼差しで話しあつた瞬間、凛は貫手も見せずにバジリウスの額へと箸を突き刺した。当然のことではあるが、いくらアインツベルンが誇るホムンクルスであろうと、痛いものは痛い。

箸の、しかも尖った方で遠慮無く突き刺されたバジリウスは、顔面を両手でおさえたままのたうちまわっている。そして今度は、バジリウスを突き刺したその箸を、士郎のものと交換せらるといつように、無言の圧力をかけてくるのだ。

「いや、だつてお前、それは……」

凛の自業自得だらうと、言いかけた言葉を士郎は既で飲み込んだ。そつ、凛がその機嫌を急降下させたもう一つの原因である、炭のように真黒なおかずを、無言で指さしているのだから、士郎に反論の余地などなかつた。

「喜んで……」

差し出した箸をひとつたくるよつにして受け取つた凛は、焦げていなかおを選びながら、黙々と弁当を食べ始めた。

今朝方、士郎が弁当のおかずを調理している最中に、不幸な事故が起こり、不覚にも氣絶してしまつたのだが……その時、フライパンに掛けていたアスパラベーコンと、油で揚げていた唐揚げは見事に炭化してしまつたのだ。

「あ～痛かった。トオサカのお姉ちゃんも無茶しいなや。もつりよつとでボクの額、少林寺になつてまうとこやがな」

復活したバジリウスが額を撫でながら、更に余計な一言を投下する。

ギロリといつ音が聞こえてくるのではと思ひほゞい、凜に睨みつけられたバジリウスは、座つたままの姿勢で器用に飛び下がった。

「お前……何しこきたんだよ……」

「何つて、昨日の晩、言つたやないか。納得してもらつまで、HIMIヤくんにつきまとつて」

呆れながらバジリウスに問い合わせた士郎に、もしゃもしゃと焼きそばロールを頬張りながら、バジリウスが答える。

「ああ、そう言えばそんなこと言つてたよな。まあ、俺もお前に聞きたいことがあつたから、丁度いいんだけどな」

「んあ？ 何やねん、HIMIヤくんの説きたいことつて？」

紙パックのコーヒーにストローを突き刺しながら、士郎からの質問は予想外だといつよつな顔つきでバジリウスが先を促す。

「お前……イリヤの事を姉と呼んだけど、それつて」

「ああ、そのことかいな。そやなあ……こつちの誠意を信じてもらうんやから、ボクの素性くらい話をないかんや。ボクは、キリツグとアイリストフィール・フォン・アインツベルンの遺伝情報をベスにして造られたんや。アインツベルンの現当主、コーブスタクハ

イト・フォン・アインツベルン まあボクらは敬畏の念を込めて、アハト様って呼んでるけど、この人は第五次にイリヤ姉ちゃんを送り出す前から、次の聖杯戦争の準備をしてはった。ようするに、将来必要になるかもしれん第六次のマスターとなる存在の用意やな。そやけど、第五次用に、その時点で考え得る限り、最強のマスターと最強のサーヴァントを用意してたんやで。もし第六次用の準備が必要になるつちゅうことは、第五次で負けたつちゅうことや。そこで、アハト様は第六次用のマスターに関して、イリヤ姉ちゃんとは違うアプローチをとつたんやな。それまでの聖杯戦争で、アインツベルンが一番聖杯へと近づいたんは、第四次やつた。つまりや、キリツグのマスターとしての手腕は、紛れも無い本物やつたつちゅうことを認めはつたんやな。まあ、はらわた煮えくり返つとつたやううけどな……ほんで、第六次用のマスターとなるホムンクルスには、キリツグの暗殺術と戦闘理論を植えつけようと考えたんや。そうして造られたんが、第六次聖杯戦争マスター用ホムンクルス……の試作品のボクや「

「……試作品つて、お前……」

淡々と話すバジリウスの出生にまつわる内容に表情を曇らせていた土郎は、何気ない調子で語られた、その最後の言葉をどうしても納得できず、眉をしかめた。

「何、景気の悪い顔しどんねん。そらそやろ? 当時はまだ第五次すら始まってなかつたんや。この後、第五次の結果も踏まえて改良を重ねていくんは、当然やわな。ボクが今回冬木に来た目的も、これに由来しとるんや。過去の聖杯戦争で、一番多く最後まで勝ち残つたサーヴァントは、セイバーのサーヴァントや。そやから、アハト様はキリツグが持ちだした聖遺物<sup>アーティファクト</sup>の回収を命じたんや。イリヤ姉ちゃんを連れて帰れつちゅう命令も、次に向けて第五次のフィード

バツクが欲しいからちゃうか。ただなあ……なんや、急に決まった話やつたみたいで、培養槽で学習中やつたボクは、キリッグの技術も受け継いでへんねん。現に、ボクが叩き起こされた時、同型の弟はまだ培養槽のなかにおつたぐらいやからなあ

飲み終わったコーヒーの紙パックをクシャリと握りつぶし、話し終えたバジリウスは、その表情すら変えずにゴミを紙袋へと集めている。

ただただ一族の宿願成就のため、どんな物でも使い捨て、必要と有らば他者から奪い取ることすら厭わないAINNZベルンの在り方に、士郎ははつきりとした嫌悪感を感じていた。

そんな奴等にとって、今、目の前で呑気にゴミをまとめているバジリウスも、もしかするとその宿願のための使い捨ての道具にすぎないのではないかと。

「あなた……わたし達に、そんなことまでペラペラと話してもよかつたのかしら？」

それまで、黙々と食事を進めていた凛が、鋭い眼差しでバジリウスを見据えながら問いただした。

確かに、バジリウスが明かした内容は、次回の聖杯戦争へ向けた、AINNZベルンの方針に関わることだ。

それは、御三家の一角たる”遠坂”の当主、凛の前で気軽に話すべきものではないのだろう。

ただし、今回自分達が聖杯を破壊したのだから、第六次聖杯戦争など起こりはしないけどなと、士郎は心中で呟いていた。

「ええも悪いも、ボクはただエミヤくんに信用してもらいたいから、話しただけや。それが、目的を果たすための王道やと思うしな。まあ、これが原因で負けるんやつたら、どんなことしても勝たれへん

思つけどな

凛の視線を受け止めながら、バジリウスが自身の信念を口にする。その目的自体は了承など出来はしないが、バジリウスのやり方には共感できる部分があると、士郎は感じていた。

もつとも、第六次が起こらないと考える士郎は、バジリウスの目的自体に価値があるのかどうか、疑問に思つていたのだが。

「けどなあ……なんや、ボク。イリヤ姉ちゃんにきらわれてしもてるみたいやし……はあー、どないしたらええ思つ? ハミヤくん?」

「いや、それを俺に訊くのかよ。だいたい俺は、お前の目的を了承していないんだぞ」

「いくらバジリウスのやり方に共感しようど、その目的自体の価値に疑問があろ? 提示された内容に納得など出来はしない。それはそれ、これはこれだと、士郎はバジリウスを突き放す。

「ああ、そやないねん。そらあ、目的達成は大事やけど、それとは別に、イリヤ姉ちゃんに嫌われるつちゅうのは、悲しいやん? ボク、これでも楽しみにしてたんや。冬木に来て、自分の姉ちゃんに会えることを」

「なら、尙更イリヤを連れ帰るなんじことは、諦める。お前がそれを言い続ける限り、イリヤはお前のこと好きにならないと思つぞ」

言葉としては切つて捨てたよつな内容だが、士郎はバジリウスの言葉に、幾分驚かされていた。

一族の宿願成就を唯一の目的とするはずの彼らには、それ以外の目

的などあるはずがないのだ。

にもかかわらず、バジリウスはイリヤスフィールの好意を得たいと言つ。

それはまるで、幼い子供がただ自分の願望を口にするよつて、その内容に整合性など考慮しないかのようだと十郎には思えた。

「それに、あなたの容疑が晴れたわけでもないわ。イリヤだって、まだ、あなたを疑つてゐるのよ」

「はあ～困つたなあ……どないしょかなあ……」

行き詰つたバジリウスは、ふらふらと揺れながら、一人屋上をたち去つていった。

夕刻、衛宮邸の居間では、藤村家よりお裾分けの筈をふんだんに取り入れた、季節感あふれる夕食が始まつていた。  
始まつていたのだが……開始早々に現れた闖入者のために、食卓の雰囲気は最悪のものとなつっていた。

「何や、えらい静かな食卓やな？まあ、そんなことよりも……はい、イリヤ姉ちゃん。これ、ボクからのプレゼントやー！」

静か過ぎる食卓の原因がナニにあるのかなどお構いなしに、ドカドカと勝手に上がりこんできたバジリウスは、満面の笑みでイリヤスフィールへと話しかける。

持参した巨大な袋から、動物のぬいぐるみを次から次へと取り出し、イリヤスフィールの周囲へ並べていく。

「……いるないわ……」

陸・海・空を問わず、様々な動物のぬいぐるみを取り揃えたバジリウスを見向きもしないで、イリヤスフィールはポツリと零した。

「そ、そないなこと言わんと……ほら、コレなんかどうや？ でつかいクマさんやで？！」

「いらっしゃって、言ひてるじゃないつー！」

イリヤスフィールの背丈ほどもあるクマのぬいぐるみを抱えながら、「機嫌伺いをするバジリウスに、拒絶の声が叩きつけられる。その様子に、居間の空気は一層重さを増し、桜などはどうしていいのかわからず、オロオロとするばかりである。

これには、流石のバジリウスも、しゅんと頃垂れてしまった。

「まあ、そう言つなつて。ぬいぐるみに罪はないんだし、貰つてもいいじゃないか。うん、このアザラシとか可愛いぞ？ ああ、このペンギンもいいんじゃないか？ ほら、これなんて……」

見かねた土郎が間を取り持つよう、バジリウスが持ち込んだぬいぐるみを、一つ一つイリヤスフィールへと渡していく。

その最中、急に土郎の声が止まってしまった。

バジリウス以外の全員が、どうしたのかと視線を向けたその先には、

小さなライオンのぬいぐるみを掴もむつとした士郎の手が、中庭でピタリと止まっていた。

「あ……いや、なんでもない……それより、どうだ？ イリヤは氣に入つたのつて、あつたか？」

おやらぐ、士郎が動きを止めてしまつたのは、時間にして約二~三秒にも満たない間だつたのだが、それが意味するものを彼女たちが理解するには、十分過ぎるほど長い時間だつた。

それでもなお、何事も無かつたかのように笑顔を見せながら、自分に語りかける士郎の姿を見ていることが出来ず、イリヤスフィールは自分からぬいぐるみを手に取つた。

「うん……シロウがそいつになり、もうひとつあげるわ……」

そう言つて、イリヤスフィールはライオンのぬいぐるみだけを、バジリウスが持参した巨大な袋へと押し込み、これは要らないからと、突き返した。

「良かつたじゃないか、バジリウス。イリヤが貰つてくれても」

そんな周囲の空氣について行げず、喜んでいいものか判断のつかなかつたバジリウスに、士郎が声をかける。

「えへっと……ほんまに、良かつたんやろか？」

「だつて、お前はイリヤのために持つてきたんだろ？ なら、良かつたに決まつてるさ」

微妙な表情のまま訊ねてきたバジリウスは、士郎の答えを聞き、

よつやく她的顔をほほえませた。

「それで？　あなた一体、今日は何しに来たわけ？　まさか、イリヤにぬごぐるみ渡すためだけに、来たわけじゃないんでしょうか？」

「いや？　イリヤ姉ちやんに何とか喜んでもらおひ思ひへ、ぬいぐるみわたしに来ただけやけど？　まあ、そういうことなんで、今日のところはこれで失礼させてもらひうわ」

呆れたような表情で聞こかける凛に、バジリウスはあけらかんとして答へ、そそくわと衛宮邸をあとにした。

「あの……こつたい何だつたんじょ、うか？」

「せう難しく考える必要なんてないんじゃない？　単にお姉さんと仲良くしたい弟が、甘えに来ただけだと想ひうわ」

きよとしたまま訊ねる桜に、あざらしのぬいぐるみを抱きながら、複雑な表情をするイリヤスマイルの頭を撫でながら士郎が答える。

「いこいじやなこいか、プレゼントを渡したい相手がこるつてことはわ」

自分の席へと座りながら、ポツリと零した士郎の言葉に、その場の誰もが、何も言えなかつた。

—————

冬木ハイアットホテルの自室へと戻ったバジリウスが、部屋のドアを開くと同時に、抑揚のない口調で告げられる、お決まりの言葉が聞こえてきた。

「お帰りなさいませ、バジリウス様」

つい先程までいたエミヤの居間と、この部屋の雰囲気の落差に辟易としながら、バジリウスは自分を迎えた少女たちに視線を向けること無く、ソファへと腰掛ける。

いつものように、テレビのリモコンを操作するバジリウスは、ふと、少女たちがじっと自分を見据えていることに気づいた。

「なんか用か?」

テレビから流れる、春の行楽地の様子を伝えるニュースキャスターの声を聞きながら、バジリウスはさも興味なさげに問いかける。

「一つ、よろしいでしょうか? バジリウス様」

「せやから、何か用かつて聞いてるやないか」

ヴォーカリングテの確認に、バジリウスは苛立ちを含めた言葉で先を告げさせる。

「それでは……バジリウス様、アハト様へのご報告は如何なされま

したでしょつか？ 先ほど本国から、未だ一度も報告が届いていないと、連絡がございましたが……」

「チツ……」

今回、バジリウスへ下された命は、aigneベルン<sup>当主</sup>であるアハトより、直々に下されたものである。迅速かつ確実な成果と、報告を求められるだろうことは、彼も予測はしていた。

だが、いや冬木へと来て、姉であるイリヤスフィールに会ってみれば、直接血の繋がりなどないはずの士郎が、必死になつて姉を守ると言つ。

凜や桜までもが、士郎に賛同してこむよひに見え、バジリウスには思えた。

なにより、姉の士郎を見る信頼に満ちた眼差しは、一体どこからくるのか。

もしも　あの温かそうな輪の中に、自分もはいれたならば……そんな、あり得ない空想すら浮かぶほど、士郎の家は居心地が良かつた。

「せつかぢやなあ……ボクは一生懸命がんばつてますうつて、お前らで適当に報告じといてくれたら、そんでええわ」

だからこそバジリウスには、今の自分を取り巻くこの環境が、疎ましく思えたのかもしれない。

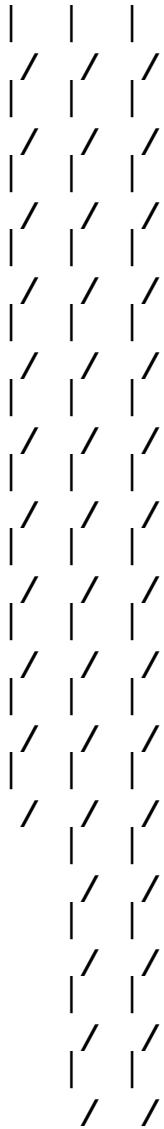
「お言葉ですが、バジリウス様。アハト様へのご報告を、適当になぞ出来かねます。現在までの、バジリウスさまのご活動を、事実のままご報告いたしますが、それでよろしいでしょうか？」

「それでええわ」

ヴェルグンデの事務口調に辟易としたバジリウスは、投げやりに答えるながらバスルームへと向かつ。

「了解致しました」

バジリウスの返答に恭しく頭を下げた一人の少女は、彼がバスルームへと消えた後、その紅い瞳で見つめ合う。底冷えするような冷たい輝きを放つその紅い瞳は、まるで、どこか遠くを見つめているようだつた。



翌日、夕食の準備が整つた衛宮邸の居間では、この場にいる全員が、ある種の緊張感を持ったまま、夕食開始の合図を待っていた。とは言うものの、テーブルの上に並ぶ夕食が、取り立てて高級食材といつわけではない。

今、この場を支配する、微妙な緊張感の正体とは……

「さよ、今日もこいつしゃるんじょつか？ バビルさん」

微妙な笑みで問いかける桜に、

「あんなの、来なくていいんだから…」

類をふくらませて、答えるイリヤスフィール。

「そうね、来たら来て五月蠅いだけだし……あと、バビルじゃなくてパシルよ、桜」

どうでもいいけどねと言いながら、桜の間違いを訂正する凜。それすらも間違ってるけどなと思いながら、士郎はあえて口にしなかつた。

「何で言つか……違う意味で可哀想なヤツに思えてきたな……まあ、いいけど。それじゃあ、食べよつか」

そんな女性陣の反応に、一瞬だけバジリウスへの同情を見せた士郎は、しかし、直後に気持ちを切り替え、食事開始の合図を出す。一気に和んだ居間の空気のなか、賑やかに衛宮邸の夕食は進んでいく。

どうやら今日は来ないみたいだなと、士郎が箸を動かそうとした時、玄関から大きな声が聞こえてきた。

「『じめんぐださい！ どなたですか？ アインツベルンのバジルくんです！ お入り下さい！ ありがとう！』

まるで、何処かの新喜劇のような台詞を一人で言い終えた声の主が、ドタバタと廊下を歩いてくる。

「『じめんじめん、遅なつてしまつたわ』

和氣藹々とした居間の雰囲気が、一瞬にして吹き飛んでしまった

中、ひょりじと顔を出したバジリウスの挨拶だけがこだまする。

「お前なあ……」

バジリウスの痛さを奢めようとした土郎の田に、別の意味で痛々しい姿が飛び込んできた。

「アンタ…………どうしたのよ？ その傷？」

バジリウスの顔や手についた、無数の擦り傷、切り傷に、凜も怪訝な表情で問いかける。

桜は慌てて救急箱の用意をしました。

「ああ、これかいな。夢中になつて山の中走りまわってたら、知らん内に傷だらけになつてしまつたわ。そんなことより、イリヤ姉ちゃん！ これ、ボクからのプレゼントやねん！」

傷だらけの手で、イリヤスフィールに差し出された白いハンカチの上には、山のように胡桃の芽が積まれていた。

「……」

果然としました、それを見つめるイリヤスフィールは、驚きのあまり声も出ない。

「イリヤ姉ちゃん、昔キリングと胡桃の芽を見つける競争しどつたんやろ？ それを向こうにあつた時、小耳にはさんでな。それで、もしかしたら、胡桃の芽が好きなんとちやうかなと思つて、集めてきたんや」

そんなイリヤスフィールの様子には気づかず、バジリウスは笑顔のまま話し続ける。

「なかなか難しいねんなあ、胡桃の芽見つけるの。ボクなかなか上手にだけへん」

「バジルの……バカッ！！」

胡桃を差し出したまま話し続けるバジリウスの言葉を遮つて、イリヤスフィールの大声が居間に響いた。

「折角芽吹いた胡桃の芽を、摘んじゃつたらダメじゃないっ！！」

「あ……！」「めんな……イリヤ姉ちゃん。ボク……アホやなあ」

イリヤスフィールの剣幕に、驚いたように尻込みながら、尻すぼみに小さくなる声でバジリウスが謝罪する。

「ほんとにバカよっ！ それに、バジルが集めてきたのは沢胡桃の芽で、本当の胡桃じゃないわっ！」

「そりなんか……しもたなあ……ボク、あんまり詳しないから……ごめんな、イリヤ姉ちゃん……」

更に間違いを指摘され、もはや顔すら上げていられなくなつたバジリウスの様子にも、士郎はだまつて傍観に徹していた。

本来なら、言い過ぎたイリヤスフィールを嗜めるべきなのだが、それでも、彼女がその名を呼んだという事実に賭けてみようと判断したのだ。

「仕方がないから……今度はバジルと一緒に行つて、私が教えてあげるわ……」

トイと顔を逸らしながらも、最後の最後にイリヤスフィールの口にした言葉が、バジリウスをどれほど救つたか。

士郎は、頬を膨らせたまま、顔を背けるイリヤスフィールの頭を撫でながら、偉いぞと、一言呟いた。

「バジル、俺からもお前に話がある。大切な事だから、よく聞いてくれ。その前に……もう一度だけ確認するけど、セラトリズの事、お前がやつたんぢゃないって、イリヤの前で誓えるか？」

「誓えるっ！ イリヤ姉ちゃんに誓つて、それはボクやないっ！」

不意に士郎から掛けられた真剣な口調の言葉に、バジリウスは居住まいを正しながらも、キッパリと答えた。

そのバジリウスの紅い瞳を、じっと見つめながら、士郎は話を続ける。

「なら、お前に一つ提案したいことがある。お前が命じられた三つの目的のうち、イリヤの事は諦める。イリヤの笑顔はここにあるんだ。それは、お前にだつて解かるんじゃないのか。それから、聖遺物アーティフクトについては、回収不可能だ。既に存在しないものを、お前に渡してやることは出来ないし、仮にあつたとしても、俺個人の思いとして断る。そのかわり、切嗣の魔術礼装ミスティック・コードを探す手伝いをしてやる。もし見つかれば、お前の好きにして良い。その上で、お前はそれを持つてアインツベルンに帰り、お前に命じたヤツの了承を取り付ける。三つのうちの一つを成果として、納得させるんだ。相手が納得するまで誠意を持って頼み込むのが王道。他でもない、バジル、お前が言った言葉だぞ」

突然告げられた土郎の提案に、居間は静まり返る。

「正直、難しい、提案や……」

そんな中、苦渋の表情で搾り出すようにバジリウスが答えていく。

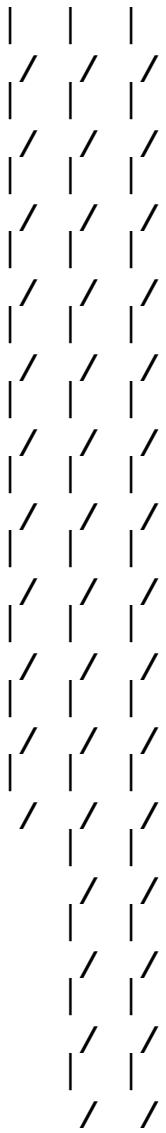
「アハト様が一回下した命令を、簡単に変えることは無い。三つのうちの一つをもって成果とするんは、不可能に近いやう。やけど……」

グッと顔を上げ、土郎を真直ぐに見ながらバジリウスは宣言する。

「その提案、受けるで、エミヤ・シロウ。バジリウス・フォン・アインツベルンの名にかけて、王道を貫いたる」

「ありがと、恩に着る」

そう言って、土郎はバジリウスと握手を交わした。



新たな決意と希望を胸に、バジリウスが冬木ハイアットホテルへと戻ってきた時、従業員服を着た男が、ホテルから出たゴミの分別

を確認している姿が目に映つた。

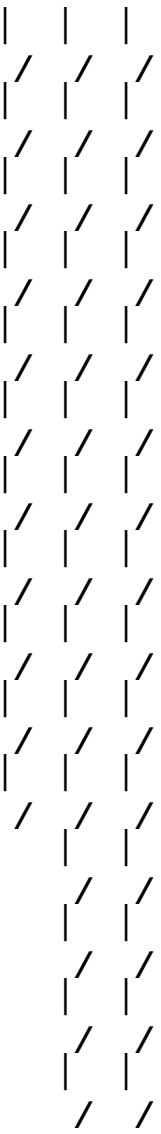
そう言えば週に数回ゴミ収集車がこのホテルへやつてくるなど、バジリウスは何気なしに、その様子を眺めながら歩を進めていた。その時、「ゴミの中に見慣れたはずの衣服が見慣れない有様で紛れている光景が、目に飛び込んできた。

「ちょっと、ちょっとそのゴミ見せてくれっ……」

大声で従業員に声を掛け、先程目にとまつた衣服を確認したバジリウスは、奥歯をギリッと噛み締めながら、自身の部屋が存在する最上階を睨みつけた。

「あいつら……まさかっ！」

険しい表情のまま、バジリウスは一田散に自室へと駆け出した。もしも、今自分が想像していることが事実だとしたら……姉たちに詫びようがないと、どうか間違いであってくれと祈りながら。息を切らして、たどり着いた自室のドアを、勢い良く開け、飛び込んだその部屋の中に、少女達の姿は無かつた……



今夜も衛宮邸にて泊まることとなつたイリヤスフィールは、替えのパジャマを取りに藤村邸へと夜の道を歩いていた。

その小さな手には、白いハンカチに包んだ、山盛りの胡桃の芽が握られている。

それを、田の前でふらふらと揺らしながら、沢胡桃なんてキリツグと同じじやないと、一言小さくつぶやいた時、不意に自分の周りの闇が、濃くなつたことに気づいた。

「だ、誰っ？！」

慌てて振り向いた視線の先には、見慣れたメイド服を身に纏つた、見慣れない少女が一人、こちらを見つめて立っていた。

その服装と紅い瞳は、先日自分の身を最後まで案じながら死んでいつた、誇るべき従者と同じではあるが、醸しだす雰囲気と、感情の欠片も見て取れない表情が、全く異質な存在だとイリヤスフィールに教えていた。

「イリヤスフィール様でござりますね。アハト様の命により、お迎えに上りました。どうか、お静かに御同行願います」

全く同じ容姿を持つた二人の少女の一人が、事務口調でイリヤスフィールに同行という名の強制を強いる。

どれほど丁寧な言葉づかいであろうとも、AINツベルンに連なるものにとつて、"アハト"の名は絶対の強制力となる。

しかし……

「イヤよ、私はあの城には戻らないわ。私の居場所は、シロウの傍だけなんだからっー！」

イリヤスフィールは従者の死に恥じぬよつこと、鋼の意思を持つて、その絶対的強制力を否を返した。

「……仕方ありません。少々、手荒なことになつてしまいますが、何卒お許しくださいませ」

もう一人の少女がそう言ひて、一歩足を踏み出した時、イリヤスファイールのすぐ後ろから別の声が割つて入つた。

「ほお……手荒なことつちゅうのんは、一体どんなことか……きつちり説明してみんかいつ！！」

息を切らせて駆けつけたバジリウスが、一喝すると同時に、イリヤスファイールを庇つよう前にでる。

「バジリウス様、邪魔立ては無用に願います。これは、アハト様直々の「ご」命令。例え貴方であるうと、邪魔をなされるなら、排除対象として構わないと賜つております」

ヴォーカリングテの口から冷徹に告げられた言葉に、バジリウスは自嘲のよつな笑みを零す。

「なるほどなあ……ボクのやり方が気に入らんつちゅう」とやねんな。まあ、それはしゃあない。ある意味、血業自得やしな。そやけどなあ、お前ら、「レはどう説明する氣や？」

そう言つてバジリウスが手にしていたものを、二人の少女に突きつけた。

それは　　じす黒く変色した血に染まつた、少女たちが着てゐるメイド服と全く同じものだつた。

「……」

それを、あくまで無表情のまま見つめる一人の少女は、無言のまま何も答えずにバジリウスを見据えている。

「そうか……ようわかつたわ。イリヤ姉ちゃん、『ごめんなあ……謝つて済むことぢやうけど、それでも、『ごめんやで。』」いつら呪きのめした後で、ボクはどんな償いでもするつもりや」

背中に庇うイリヤスフィールへ、一言詫びたバジリウスは、制服の内ポケットから取り出した皮手袋を手につける。

「ほな、いくでつーー！」

一声あげたバジリウスが、両手を胸の前でパンツと合わせ、そのまま掌をアスファルトへと押し付ける。

瞬間、二人の少女へと向かつて紫電が奔つた。

「終わりやつーー！」

バジリウスが発した言葉と同時に、少女たちの周りのアスファルトから、漆黒に光る巨大な円錐が無数に突き出した。後にはただ、ポタポタと滴る血が、全身を貫かれた一人の少女から流れ落ちる。

「イリヤ姉ちゃん……ボク……」

振り返ったバジリウスは、顔を伏せたまま、言葉を詰まらせた。詫びようのない現実に、どうしていいのかさえわからぬまに。

そのバジリウスの心が、彼の後ろで起こった静かな変化を気づかせるだけの余裕を奪っていた。

「バジルッ！…」

イリヤスファイールの叫びに、ハツとして顔を上げ、振り向いた時には、既に全てが終わっていた。

「な、何で……や……ダイヤ強度の、炭素の槍やで。動けるはず……あらへん……のに」

ヴォークリンデの右腕から、飛び出すように突き出たブレードの刃が、バジリウスの腹部を貫通していた。

「貴方は、我々の名前の由来をもう少し考慮すべきでした」

そう言つたヴォークリンデは、刺し貫いたブレードを、難ぐようにして引き抜くと、そのままイリヤスファイールを取り押された。と、その時、遠く後方で玄関の開く音がした。

「第一目的は完了」、このまま撤退します、ヴェルグンガ」

イリヤスファイールを連れたまま、二人の少女が闇へ溶け込むように姿を消した後には、倒れ伏したバジリスクが、溢れ出した血溜まりに浮いていた。

## 四章「ホムンクルス」（後書き）

ようやく、第一話の半分を超えました。  
今までゆっくりだったお話しも、急展開へと移つて行きます。

## 五章「ライエンのN女」

正義の味方、フンシ……やたら耳には心地よく響く言葉だが、その実、H'GOの塊に過ぎん存在だ。

正義の味方を騙る輩の言つ正義など、所詮、ソイシにとつての正義でしかありはしないのだからな。

そんな一方的な正義を押し付けられ、無理やり悪にされた方は、たまたものではないだろ？

ああ、一つ私からの忠告だ。

もし、君の周りにもこの男のよつな輩がいるのならば、早急に縁を切ることをお勧めしよ？

こういつ手合いはな、さも周りのためだと綺麗事を口にしながら、周りを巻き込んで自滅する。

君にとつては、田舎あつて一利無し、とこうやつだ。

フム……やつこつ意味では、この男の顛末を知つておぐのも、まあ、まるで無意味といつこともあるまい。

さあ、話の続きだ……

夕食後、バジリウスが去った後の衛宮邸では、またたりとした食後の時間が流れていった。

今夜も女性陣がこの家に泊まることになつたため、士郎は彼女たちを送り届ける必要がなくなつたのだ。

連日の宿泊となつたため、先程からイリヤスフイールが替えのパジャマを、藤村邸へと取りに戻つている。

これを受けて、士郎の脳裏には一つ懸念材料が浮かび上がつた。せめて藤村雷画には、当面の間イリヤスフイールをこちらに泊めるという趣意を、説明しておいたほうが良いのではないかと。

「俺、ちょっと雷画爺さんに、イリヤをうちに泊めること、説明していくよ」

台所で洗い物をしていた桜と、居間でお茶を飲んでいた凜にそう言いおき、士郎は足早に玄関へと向かつた。

なにせ、近所の奥様方の間では、この家について、非常に不本意な噂が立ち始めているらしいのだ。

これ以上、噂の火に薪をくべるような行為は、慎むべきだろうとう考えに基づいてのことなのだが、客観的に見て、既に後の祭りであることは否めない。

それはともかく、夕食時に訪れたバジリウスとの約束で、幾分心の軽くなつた士郎は、足取りも軽やかに玄関を飛び出し、門をぐぐつた。

上手くいけば、これ以上誰も血を流す事無く、この難題を収束させることが出来るかもしれないという思いが、まるで希望の灯火のように、士郎には見え始めていたからだ。

そんな想いに囚われていたせいだろうか、街灯の光届かぬ路地の暗闇の中、路上に何か大きなものが落ちてゐることに、士郎は気づくのが遅れてしまった。

「何だ？ やけに大きな落し物だな」

そのナニカへと近づくにつれ、次第に明瞭になる輪郭に、ゆっくりだつた土郎の歩調は、いつしか駆け足へと変わつていた。闇の中でもソレとわかる銀髪と独特の髪型、そして、穂群原学園の制服を血に染めながら路上に倒れ伏しているのは……

「バジルッ！！」

「グッ……ウッ……」

大声で呼びかけ、駆けつけた土郎は、バジリウスが小さく呻き声を漏らしたことで、脳裏をよぎつた最悪の事態が回避されたことに安堵した。

とは言え、その傷と出血量は楽観視など出来るものではなく、一刻も早い治療を要するものだと伝えている。

「バジルッ！ おい、バジルッ！！ くそつ……」

意識が混濁したままのバジリウスを背負いながら、ホムンクルスである彼を治療するには、凛に頼るしか手はないと土郎は判断する。一刻も早く自宅へ戻ろうと、土郎が足を踏み出したその時、バジリウスの手がピクリと動き、その指のある方向へと差し向けた。震える指で必死に指示すその先には、路傍に落ちた白いハングチと、散らばつた沢山の沢胡桃の芽が落ちていた。

「ま、まさか……イリヤが……」

先ほど打ち払つた最悪の展開を、更に上回るほどひの最悪を予想し、

士郎は己の迂闊さに口の端を噛む。

バジリウスとの約束を取り付けたことで、警戒心を鈍らしてしまった自分が許せない。

セラとリーゼリットを手に掛けた何者かの存在は、自分が警戒しないければならなかつたのこと、自責の念に拳を震わせる。

「まだ……や……まだ……間に合ひ……」

そんな士郎を叱咤するように呴かれたバジリウスの言葉に、我に返つた士郎は、路傍に散らばつた胡桃を拾い上げ、自らへと駆け出した。

バジリウスの言つ通り、奪われたのなら取り戻すだけだと、必ずイリヤスフィールを無事に連れ戻してみせると、彼女の従者に誓つた言葉を繰り返しながら。

丁度その頃、楽しみにしていた春摘みの中国茶を味わおうとしていた凜は、突如玄関から響き渡つた士郎の大声に、淹れたて熱々のお茶をゴックンしてしまつた。

「遠坂ああつ！　すぐに来てくれええつ！！」

「熱つ、あつつい！　もう、何よ士郎つ！　アンタのせいだ、

やけどしちゃつたじゃないつー！」

「ふ～ふ～と文句を言いながら、声の聞こえた玄関へと出向いた凛は、その光景に一瞬言葉を失つた。

士郎が背中に担いだバジリウスに意識はなく、その顔は土気色、腹部には大量の出血が見られる。

肩で息をする士郎の切羽詰まつた表情からも、只事でないのは一目瞭然だつた。

「どう、どうしたのよつー！」

慌てて凛が駆け寄る間に、士郎が背中のバジリウスを廊下へ横たわらせると、見る間に血が流れだした。

「詳しいことはわからないつー！　けど、今はコイツの治療が最優先だつ！　遠坂、頼むつー！　バジルを助けてやつてくれないかつ！」

必死の形相でそこまで言つと、士郎は廊下に頭をこすりつけるほど、凛へと懇願する。

AINTSBERLNのホムンクルスであるバジリウスを、遠坂の当主である凛が助ける謂れなど無い、それは士郎にも理解できていたことだが、彼女以外に頼れる人物など士郎にはいない。

そして、士郎の知る遠坂凛という少女ならば、誠意を持つて頼み込めば、もしかするとと言つ希望を持てるのではないかと考えていた。それは、奇しくもバジリウスが貫こうとした、彼の言葉でもあつたのだが。

「と、とにかく、そりどきなさつー！」

士郎の勢いに押されながらも、凛はバジリウスの傷を確認しだす。

「先輩、何があつたんです？ 大きな声が……」

そこに、台所からやつてきた桜が、バジリウスの様子を田の当たりして固まつてしまつ。

「刃物で腹部を貫通されているわ……でも、ほんの僅かに急所を外れてる。これなら、いけるわっ！ 桜っ、タオルをありつたけ持つてきてっ！ 士郎はわたしの部屋から、机の上にあるポーチを持つてきてっ！」

「動かない士郎と、動けない桜に大声で指示を飛ばした凛は、魔術刻印を起動させ、治癒魔術の準備にかかる。

それを見た士郎は、ありがとうと一言呟くと、弾けるように凛の部屋へと駆け出し、それに習つように桜も洗面所へと駆け出した。

「あんな顔されちゃ、断れないじゃない、士郎のばか……」

廊下を駆け出した士郎の背中を見送った凛は、ポツリと独り言を呟き、グイッと腕まくじをすると、バジリウスの治癒に取り掛かった。

凛がバジリウスの治癒を始めてからおよそ三十分。

治癒魔術の核を成す宝石が放つ淡い光が辺りを照らす中、士郎は奇妙な記憶のフラッシュバックに襲っていた。

学園の廊下に倒れ伏す自分と、助けてくれた誰かのぬくもり、そして、淡く輝く赤い宝石。

まるで、映画のフィルムを見るよつて、断続的なシーンが頭の中を駆け巡る。

もしかしてアレは……そつ士郎が思い始めた時、バジリウスが小さく声をもらした。

「……？」

「良かつた！ 気がついたのか、バジルッ！」

思わず声を掛けた士郎へと、未だ焦点の定まらない視線を向けるバジリウスは、次第に戻ってくる意識に、その表情を険しい物へと変えていく。

「すまん……あんたらが助けてくれたんか……けど」

「まだ動かないっ！！ 応急処置しかできないんだからねっ！！」

痛みに顔をしかめながら体を起こしたバジリウスを、凛が叱り飛ばした。

「バジル、今は遠坂の言つ通りにしたほうがいい。それより、聞かせてくれないか。お前と……イリヤに何があったのか」

沢胡桃を包むハンカチを手にした士郎は、それを見つめながらバジリウスに問いかけた。

士郎の表情に、バジリウスは大きく息を吐き出しながら体を横たえ、虚空を見つめるよつにして事の顛末を話し出した。

「今は時間が惜しいからな、事実だけを端的に話すで……イリヤ姉ちゃんが攫われた。犯人はわかつとる……ボクと一緒に冬木に来た、

「一体のホムンクルスや」

「クソツ！ やつぱりイリヤは……」

事態が自分の予想した最悪のものであつたこと、士郎は廊下の壁を拳で打ち付けた。

「……それだけじゃあ全体像が見えてこないわ。もう少し、詳しく説明しなさい。ただし、事と次第によつては、今すぐ治療を打ち切つて、特大のガンドをお見舞いするわよ」

冷徹な魔術師の顔で、凜がさらなる詳しい情報を要求する。

「そやな……トオサカのお姉ちゃんの言つ通りやな。イリヤ姉ちゃんを攫つたんは、ボクの補佐としてついて來た、ヴォークリング<sup>デ</sup>とヴェルグン<sup>デ</sup>つちゅう名前の、新型戦闘用ホムンクルスの試作品や。今日、ボクがホテルに戻つた時、こいつらが冬木に来てから誰かを殺した証拠を見つけたんやけど……まあ、思いつくんは、イリヤ姉ちゃんの従者のことやわなあ。それで、大急ぎでその事を知らせよう、この家にむかつたんやけど……すぐその路地で、イリヤ姉ちゃんを拉致しようとしたる現場に出くわした。どうも、ボクのやり方が気に食わんかつたらしい本国から、強行策を指示されたらしいわ。そやけど……ボクはエミヤくんと約束した。それを破ることは、ボクの矜持がゆるさへん。それで、『イツら一人と戦闘になつたんや。その結果が……』

そこまで話しあると、バジリウスは悔しそつて口の端を噛み締め、ギュッと拳を握りしめた。

「そうか、よくわかつた……俺との約束と、イリヤを守つとして

くれてありがとう。感謝する

バジリウスを真直ぐに見据えながら、士郎は感謝の言葉を返した。そして、立ち上ると同時に、玄関へと歩き出す。

「何處つて、イリヤを取り戻しに行くんだ。そんなの当然じゃないか」

「まあ、アンタならそう言い出すとは思つたけどね……それじゃあ、聞くけど……衛宮くん、あなた、何処に向かいつもりなのかしら？」

イリヤを攫われてしまった自分への怒りに、冷静さを欠いた士郎を止めるほど、凛の静かな一言が廊下に響いた。

「別にイリヤを助けに行くな、なんて言わないわ。けどね、相手の所在も戦力も知らないまま、闇雲に走りまわっても、あのことを助けてことなんてできないわよ」

「ナビゲー！」

「いいから落ち着きなさい、士郎。今、監視用使い魔を総動員させて、イリヤの痕跡を追っているわ。その間にわたしたちがしなくちやいけないことは、相手の戦力を把握することよ」

理路整然と諭すように話す凛の言葉に、士郎は反論すらできず、拳を握り締める。

「H///やくん……ボクが言えることやないけど、トオサカのお姉ち

やんが言つてることは正しい。そやから、聞いてくれ。ボクが知つてゐる、新型戦闘用ホムンクルスの情報を……」

「わかつた……」

凜とバジリウスの言葉に、士郎はその場に腰を下ろした。

「そもそも、新型の戦闘用ホムンクルスは、今までのホムンクルスとは根本的に別モンなんや。見た目はそう変わらんけどな。次の聖杯戦争用に開発されたんやけど、その開発コンセプトは、マスターの影となつて戦闘・情報収集を担うことや。特に、情報の収集と共有に主眼が置かれとる。強力なレイラインのネットワークで複数体の端末型ホムンクルスを、強制的に多重人格化されたハブ型ホムンクルスが遠隔操作するんや。当然、操作される側の端末型のほうは、複雑な魔術行使なんかでけへんから、それを補う意味で、機械的な武装を体に仕込んだる。で、それ以上に厄介なんは、自己修復機能を持つた細胞で構成されるとる端末型は、要になつとるハブ型を殺すか、修復が追いつかんほど破壊せんと、倒されへん言つことや。ボクも、ヴォークリンデとヴェルグンデがこのタイプやつたとは知らんかったせいで、やられてしもた。腹、串刺しにしても、すぐに修復してきよつたからな。つまり、イリヤ姉ちゃんを助けるには、ヴォークリンデとヴェルグンデを完全破壊するか、どこにあるかもわからんハブ型のホムンクルスを破壊するしかない言つことや」

バジリウスの言葉を聞き終えた士郎と凜は、その内容に言葉を失つていた。

士郎は、たとえホムンクルスと言えど、あまりに非人道的なその手法に憤り、そして凜は

「なによ、その卑怯なやり口はつ……！ それじゃあ、冬木以外の場

所に居ながら、聖杯戦争を闘つとの回じじやないつー…」

まるでルールを無視したかのよつた、反則的な手法に怒りをあらわにしていた。

「あの……今は、それよりもイリヤちゃんのことを考えないと、ダメなんじゃないですか？」

そんな凛を瞪めるよつて、それまでバジリウスに包帯を巻いていた桜が、ポツリと呟いた。

「う……まあ、それはそつなんだけど……つて、ちょっと待つてつ！ 監視用使い魔にイリヤ達が引っかかったわ！」

桜の言葉に目を泳がせていた凛が、突然虚空を睨むよつとして叫んだ。

「国道を車で郊外に……」  
「やつかいやな……籠城されたら、いづちが城に近づく前に、ヴェルグンデの重火器にやられてまう

「それに、今森の結界はアイツらに乗つ取られているのよね？ だとしたら、いづちが森に入つただけで感知されるわ」

相手の所在を掴んだものの、状況の困難さに凛もバジリウスも思案を深めていく。

「いや、それはボクが何とかできる。まあ、何とかした瞬間に、森に入り込みましたって宣言してるよつたもんやけどな」

「そうね……けど、ずっとこいつらの位置を把握され続けるよりはマシよ。ねえ、アンタはどんな魔術を使えるのよ？」

「ボクは物質に含まれる炭素原子を分解再構成する鍊金術が使える。ただし、その対象は生命活動を伴わんモノだけやけどな。逐次流動的に変化するようなモノは対象にでけへんと思つてくれたらわかりやすいんとちやうかな。そや、トオサカのお姉ちゃん、Aクラスの攻撃魔術使えるか？」

「今は無理ね、聖杯戦争でそのクラスの宝石は使いきったわ」

「そうか……そうなると、アイツらを完全破壊するだけの火力が無いつちゅうことか……」

思案の先に、相手を倒しきる決定力に欠けるという判断にたどり着き、凛とバジリウスは言葉に詰まる。

「なあ、バジル。一つ確認させてくれ。ハブ型と端末型を繋ぐのは、機械的な通信手段じゃなく、魔術的なレイラインなんだな？」

それまで、一人考え込んでいた士郎が、唐突にバジリウスに聞いかけた。

「それは間違いない。それが、どないかしたんか？」

「ああ、それならなんとかなるかもしれない。俺に考えがある。みんな、聞いてくれ」

そして、士郎は自身が思いついた作戦案を話し出した。

士郎の発案を聞き終えた一同は、呼び寄せたタクシーを表に待たせながら、イリヤスフィール救出へ出かける準備をしていた。話を聞き終えた直後、大反対の意を示した凜も、”全員が無事に帰つてくるため”という士郎の言葉に、納得せざるを得なかつた。また、自分も着いて行くと言つ出した桜に、士郎は”温かいお風呂と笑顔で出迎えて欲しい”といつ言葉で留守を託した。

「絶対に、無事に帰つてきて下さいね……」

玄関を出よつとする三人を見送る桜が、胸の前で両手を祈るよつに合わせながら告げる。

「ああ、約束する。イリヤを連れて、ちゃんと全員で帰つてくれる。だから桜は、安心して留守番してくれ」

最後に、いつもの笑顔でそつ言いおき、士郎達はタクシーへと乗り込んだ。

不安を抱えたまま、それでも、今自分に託されたのは、士郎達を信じてその帰りを待つことだと、桜は独り居間へと向かつ。一瞬、夜の風が廊下の窓に吹き付け、庭に咲く薄紅の桜の花を、吹雪のように舞い散らせた。

そんな幻想的な光景の中、なんの前ぶれもなくパタリと桜が倒れこんだその時、居間の時計が午後十時を告げていた。

――――――――――――――――――――――――――――――

そろそろ日付が変わろうかといつゝの時刻、土郎達は郊外の森の中、その視界に冬の城を捉えながら、己が身を森の茂みに隠していった。

慎重にうかがう士郎の視線の先には、崩れた正面玄関の前に、見慣れたメイド服を纏つた二人の少女が立っている。

「やつぱり、森に入ったことは感づかれとるなあ。まあ、結界ぶち壊したんやから、当たり前やけどな」

「ああ、けどこちらの現在地までは、感知できていないみたいだ。  
それに、この状況は予想通りでもあるわけだし」

森へ到着したと同時に、バジリウスが結界を破壊したため、自分達の襲撃は筒抜けになつてしまつたが、その後の位置は把握されない。

結果、一休のホムンクルスを城の正面へと誘きだした。確かに、ここまででは土郎達が考えた作戦通りだった。

「それも！」までよ。！」の先、正面玄関までおよそ60メートルの間は、なんの遮蔽物もないんだから。向こうの重火器をかいぐつて、接近戦に持ち込まないといけないのよ」

それは、見通しの良い60メートルを走破する間、身を隠すことすら出来ないまま、重火器の的になることを意味する。相手の装備を考慮すれば、無謀に過ぎる作戦立案だった。

「それが出来るかどうかは、エミヤくんの腕次第や。最後に聞くけど、この距離でも狙い通りに矢を射てるんか？」

「ああ、狙いは絶対に外さない」

互いに真剣な視線を交わし、最後の確認をするバジリウスと士郎。その士郎の手には、土蔵から持ちだした弓と十本の矢が握られていた。

「わかった……ボクの命、エミヤくんに預けるわ。ほな、作戦通り、ボクは移動する。二人共、死んだらアカンで」

そう言いおき、バジリウスは一人、森の中を右方向へと移動していく。

「遠坂、俺はギリギリまで矢を射掛けるから、移動のタイミングは任せる。けど……もし俺が八射射掛ける前に反撃を受けたら、お前一人で移動してくれ」

標的から視線を切らず、弓懸けを指にはめながら士郎が呟く。

「アンタは余計な心配しないで、自分が成すべきことだけに集中してればいいのよ。それに、桜と約束したんでしょ？ 全員で帰るつて」

「……ああ、そうだつたよな。なら、絶対に成功させないとな」

凛の言葉に、士郎は小さく息を吐き出し、一本の矢を番えて射の体勢へと入つていく。

射法八節を準えるわけでもなく、ただ流れるように淀みない動作で引き絞られた弦は、周囲の空気のように限界まで緊張を高めていく。そんな士郎の弓を構える姿に、凛が目を奪われた瞬間、空気を切り裂くような高周波の音が聞こえた。

凛がソレに気づいた時、既に士郎は一射めの矢を番え、弓を引き絞つていた。

まるで神技のような連射で放たれた矢は、狙い違わず正面玄関前のホムンクルス一体へと飛翔する。

「やはり来ましたか……しかし、そのような矢の攻撃が我々に通用するとは、思わないことです」

正確過ぎるほど真直ぐに自分達へと向かってくる矢を、ヴォーケリンデとヴェルグンデは、僅かに身をかわすことで避けていく。そして、八本目の矢をかわすと同時に、片膝をついたヴェルグンデの右膝からは、対戦車擲弾発射器が火を吹いていた。

「遠坂つ！！」

「Anfang! E s ist gro s , E s ist  
k le i n ! !」

かたや、士郎が八本の矢を射掛けたと同時に、凛は士郎と自身の重力操作を行い、森の中を左方向へと飛び退いていた。重力の軛から解き放たれ、森の中を加速する一人の後方で、爆炎と轟音が発生する。

危なかつたと、冷や汗を流す凛が予定ポイントへと着地したとき、視線の遙か先には、森を飛び出したバジリウスの姿があつた。

「稚拙な……これで陽動を仕掛けたおつもりですか？ バジリウス

様？」

ヴォークリンデが抑揚のない口調でそう言い放つた時、彼女の横に立つヴェルグンデの右腕が上下に割れ、そこから飛び出したレミントンM870の銃身がバジリウスを捉えていた。

「そんなわけあるかあつー！」

ポンプアクションの銃口が火を噴くよりも早く、バジリウスは両手を地面へとつき、己が鍊金術である炭素原子の再構築を発動させていた。

してやつたりという表情のバジリウスに、その真意を掴みとったヴォークリンデとヴェルグンデが、自分達の周囲に突き刺さった矢へ視線を向けた瞬間、強化炭素纖維で造られた矢から無数の茨が突き出し、彼女達の四肢を貫いていた。

「これで、攻撃でけへんやろつ！ ボクの勝ちやツー！」

凛に借り受けたアズット剣を取り出し、ヴォーカリンデとヴェルグンデへ詰め寄るバジリウスがその勝利を宣言したとき、ヴェルグンデの首がグルリとバジリウスへ向きを変え、その口腔からはデリンジャーのような小型の銃身が飛び出していた。

「アカン……」

僅かに届かないところ、バジリウスが諦めかけたその瞬間、彼の視線の先には、一体のホムンクルスへと向けて中空を滑空する土郎の姿が映つた。

その右手に、歪に曲がった短剣を握り締めながら。

これで囮としての自分の役割は果たせたと、バジリウスは安堵の笑

みを零し、静かにその目を閉じた。

「　　破戒すべき全ての荷”！」

事前の宣言通り投影魔術で宝具を創り出した士郎が、真名開放を行つ声を聞きながら、バジリウスは己が死を受け入れた。

全て、想定通りに運んでいた筈だった。

士郎の放つた矢は、狙い通りにヴォークリンデとヴェルグンデを囲むように突き刺さり、絶妙のタイミングで飛び出したバジリウスが、矢の炭素纖維を材料にして、二体のホムンクルスを刺し貫いた。

その間に、士郎は吐血しながらも、キャスターの宝具“破戒すべき全ての荷”を投影し、わたしの重力操作魔術でホムンクルス達へと向けて突進した。

この時点で、こちらの勝利は動かない。けれど敵の隠し玉の前に…

： 囂役を買って出たバジリウスの命は、どう足搔いても救えない。凛が目の前の事実を受け止め、それでもなお、なにか手はないのかと瞬時に思考めぐらした時、あり得ないはずの一手が撃ち込まれた。士郎が手にした”破戒すべき全ての荷”で、ヴォークリンデのレイラインを断ち切ったのは想定内の出来事だ。

しかし、同時に森の中から放たれた、超高密度の魔力弾がヴェルグンデの首から上を吹き飛ばし、バジリウスを救うには間に合わないはずの次の一刀を、間に合わせてしまった。

結果、”破戒すべき全ての荷”によつてレイラインを断たれた二体のホムンクルスは沈黙し、バジリウスは九死に一生を得た。

「何者だつたのかしら……」

森を抜け出し、士郎達のもとへと駆け寄りながら、凛は魔力弾が放たれた方向をジッと見つめる。

しかし、既にその魔力も気配も消え去り、バジリウスを救った謎の人物が何者なのかは、判らずじまいだった。

「大丈夫？！ 士郎！ バジル！」

倒した二体のホムンクルスの傍にへたりこんだ士郎とバジリウスへ声をかけながら、凛は周囲を警戒する。

「ああ、俺は大丈夫だ」

「ボクもや。死んだと思うたけどな」

確かに、あのままの展開では、バジリウスはその命を落としていただろう。

だが謎の介入者のおかげで事無きを得た今、バジリウスは傷一つ無いが、士郎は投影魔術グラディション・エアの反動で吐血しているのだ。

彼の言葉通り、大丈夫なはずがない。

「血を吐いて、服を真赤にした奴が”大丈夫”なんて言つたって、説得力の欠片もないわよっ！」

そもそも宝具のような桁外れの神秘を、投影魔術グラディション・エアで創り出しておいて、その反動が無い筈がない。

こうなることは当然凛にも予想がついていたため、彼女は士郎がこの作戦を立案した時点で反対したのだ。

それでも、アインツベルンの新型戦闘用ホムンクルスを、二体倒さなければならぬ状況では、他に打つ手がなかつたのも事実だった。そう理解はしていても、どうしても納得できない想いを胸に抱えな

がら、凛は士郎に肩を貸す。

「悪いな、遠坂。世話掛けちまつ」

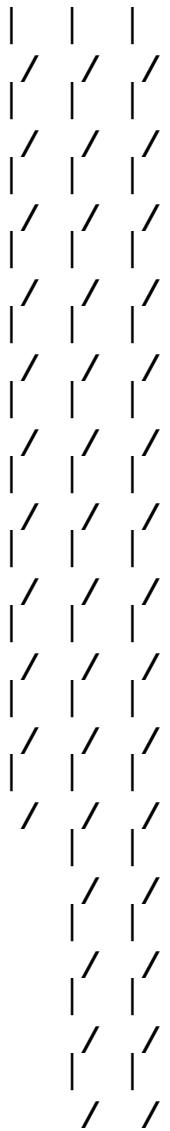
まるで自分の怪我など眼中に無いかのよう、小さく苦笑にする士郎に、凛は俯きながら話しかける。

「別に……そんなこと気にしなくていいわよ。それより、早くイヤを探しだして家に帰るわよ」

「ああ、そうだな」

あの聖杯戦争において、”彼女”の鞄は、無茶をし続ける士郎を守っていた。

なら、自分はどうやって、この無茶ばかりする少年を守つていけばいいのだろうと、冬の城を歩きながら、凛は思案に暮れるのだった。



城の自室で気を失っていたイリヤスフィールを救出した後、士郎たちが衛宮邸へと帰りついたのは、深夜の一時を過ぎた頃だった。凛に肩を借りながら、玄関をくぐった士郎の血に濡れた姿に、最初は笑顔で迎えた桜が絶叫し、その声にイリヤスフィールの意識が回復したのは、怪我の功名だろうか。

なんとか落ち着きを取り戻した桜が淹れたお茶を飲みながら、一同が居間で人心地ついたのは、午前二時直前だった。

「あの……」

そんな中、神妙な表情で一声あげたバジリウスに、全員の視線が集中した。

「今回のこととは、アイツらを止められんかった、ボクの責任や。謝つて済むこととは思つてないけど、それでも……ごめん、ごめんなさい、イリヤ姉ちゃん」

畳に額をつけ、ひたすらイリヤスフィールへと謝罪するバジリウスの姿に、居間の誰もが黙して語らず、ただ、彼女の言葉を待っていた。

「……セラとリズのこと……バジルに罪が無いとは言えないわ

ゆつくりと静かに話出したイリヤスフィールの言葉は、バジリウスの罪の所在をつきつけるものだった。

「だけど……罪は償えばいいのよ、バジル。貴方にその気持があるのなら、きつといつか、セラとリズも許してくれると思うわ。それから、私の従者の死に責任を負うのは、主人である私よ。そこは、間違えないで」

そう言って、イリヤスフィールはそっとバジリウスの頭を撫でた。

「イリヤ姉ちゃん……」

イリヤスフイールの厳しくも、愛情の籠った言葉に、バジリウスは顔を上げることも出来ずに、ただ涙を流した。

「それじゃあ、今日のところは休もうか

一頃り、バジリウスが涙を流した後、士郎が場を収めるように声を掛けた。

「そうね、わたしも何だか疲れちゃつたし、休ませてもらひつわ

思わずじぼれた欠伸を右手を覆いながら、凛が立ち上がる。

「あ……ほな、ボクはこれで……」

その場の雰囲気に、バジリウスが衛宮邸を辞す意をあらわすと、「何、馬鹿な」と言つてんだ。お前も、ここに泊まればいいじゃないか。と言つよりも、安全が確認できるまで、この家に居たまうがいい。解かつたな！」

今更、何を言つてんだという表情で、士郎がバジリウスの衛宮邸滞在を指示する。

「そ、そやけど、ボク……」

「そやけどもクソも無い！　いい加減、みんな眠いんだから、グダグダ言つてないで、泊まつていけ！」

予想外の提案に慌てるバジリウスをよそに、士郎は居間の隣室に布団を一組用意しながら、決定だとばかりに言いつける。

「フフ……シロウは頑固だから、諦めなさい」

呆気にとられるバジリウスに、クスリと笑いながらイリヤスフィールが諭すように声をかける。

「イリヤ姉ちゃん……」の家……あつたかいなあ……」

布団を敷く土郎の姿を見ながら、涙を流すバジリウスが、小さな声で呟いた。

「当然じゃない、だってシロウの家だもの。あつたかくて、やさしいに決まってるわ」

満面の笑顔で答えたイリヤスフィールは、一人の弟の姿を誇らしげに眺めていた。

## 五章「ラインのN女」（後書き）

今回、公開に少し時間がかかってしまいました  
サッカーの日本代表戦があると、どうしても筆が……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9665x/>

---

SOLITUDE

2011年11月17日21時26分発行